生える	tumboh
墓	kubur
刃	mata
人足	kuli
朋友	kawan
捕縛狀	waren
骨	tulang
蛇	ular
富みたる	kaya
研ぐ	asak
刺	duri
地	tanah
茶	tch
賃銀	sewa

恥辱	malu
送る	kirun
置く	taroh
栁	tong
若人	orang muda
私	sahya
壁	dinding
菓子	kueh
乾きたる	kring
堅い	keras
歸る	balck
瓜	kuku
枝	tongkat
土	tanah

	南蠻長崎草	
涙	アヱル マタ	ayer mata
名	ナマ	nama
汝	アンカウ	angkau
六ツ 敷い	スサ	susah
胸	ダダ	dada
魚	イカン	ikan
馬	クダ	kuda
牛	ランボ	lembu
第一	コレ	korek
失ふ	イラン	hilang
昇る	ナイ	naik
呑む	トウラン	telan
乘る	ナイ	naik
雲	アワン	awen
黑い色	イタム	hitam
朽ちる	ボロ	burok
車	キレク	kreta
買ふ	ブリ	bli
衣	サク	saku
神	アラ	allah
捆げる	テイムバ	timba
善い	バイ	baik
大根	ロバ	roba
卵	トロル	telor
大理石	バト マルマル	batu marmar
達する	サムペイ	sampei
田	サワ	sawah
竹	ブル	buluh

太鼓	グンダレ	gendang
太陽	マタ ハリ	mata-hari
祖父	ネネ	nenek
藏する	シムパン	simpan
咀嚼す	ママ	mamak
嘲る	マキ	maki
其	イト	itu
而して	ダン	dan
霽	アエル アムボン	ayer ambun
破る	コヤ	koyak
安價	ムラ	murah
豆	カチヤン	kachang
間違	サラ	salah
待つ	トンゴ	tungu

屋守	チチヤ	chichak
結婚	カウイン	kawin
毛	ブル	bulu
封蠟	ラク	lak
武器	スンジヤタ	senjata
飾	ニル	niru
小供	アナ	anak
戀人	カヽシ	kakasih
珈琲	カハラ	kahua
護謨	ガタ	getah
柄	ウル	hulu
繪	ガムバル	gambar
姉	カカ	kakak
藍	ニラ	nila

足もと	カキ	kaki
酒さけ	アラ	aak
捜さがす	チャリ	chahari
左ひだり 様なら	タベ	tabik
裂きく	コヤ	koyak
金きん	マス	mas
銀ぎん	ペラ	perak
牛うし 乳ちち	スス	svsu
狂きん 氣ぎん	ギラ	gila
金きん 鐵ぎん	ワン	wang
休きう 暇か	イジン	ijin
木き	カユ	kayu
牛うし 車くるま	キレタ ランブ	kret ı slembu
指ゆび	ジャリ	jari
指ゆび 輪わ	チンチン	chinchin
目め	マタ	mata
飯めし	ナシ	nasi
水みづ	アヨル	ayer
明みやう 日にち	イソ	esok
見みる	テンゴ	tengok
眼め 鏡がね	チリメン マタ	chermin mata
磨みがく	ゴソ	gosok
寫しやしん 眞しん	ガムバル	gambar
結しばる	イカツ	ikat
然しかり	ヤー	ya
證しようにん	サクシ	saksi
人ひと	ヲラレ	orang
左ひだり	キリ	kiri

南蠻長崎草

邦語に似たる馬來語

引く	タレ	tarik
水夫	カラレ	khalasi
電	キラツ	kilat
私	サヤ	sahya
能ふ	ボレ	bolch

以上の様に、邦語近い馬來語を拾つて見ても、相當な數になるが、詳細に研究をすゝめ行く時には、その大半に、類似點を發見する事は難事でない。

マタ mata は目とも、刃ともいふのであるが、マタとマタを一緒にしてマタマタ matamata といふ事は、巡査の事である。刃と目は如何にも、巡査らしくて記憶するに都合がよい。アヱルは水で、これにバトウ石を加へると、氷アヱルバトウとなる、水石を氷と意味する等は、洒落の樣な話で、巡査と好一對である。

痛むのサケは、肉がサケだから痛むと思へばよい、桶をたゝけばトンとなる、菓子は食物だからクヱ、涙は目の水のアヱル、マタ、南洋の魚類は、早やく腐敗するから、イカン、九州ではいけない事をイカンと言ふのである。牛が暴れ出せばランボ、失ふたものはイラン（いらぬ）。呑むといふ事は反對にトウラン、咽喉元通らぬ。善いはバイ。長崎あたりでは、よろしい事をよかバイといふ方言をよく使ふ、善いのだとの意を、善か、バイ何々しましたとの事を何々したバイ、買ひました、買うたバイ等と使つて居る。

軍談につきもの〻陣太鼓の太鼓がグングン、飯を咀嚼するからマ〻といふのか、解決は武器の力だからスンジヤタ、戀人のカ〻シは心細い事夥しい、飯は有つてもナシとはこれ如何などと言へば物葉づけとなつてしまふが、ナシにゴリンをつければ、飯を油に揚げたライス、カレーより以上の御馳走の事

寫眞はガンバル、御維新時代の寫眞を眺めると誰もが、がんばつて寫つて居る、ガムバルの起源か呵々。電は闇夜の中で、青白いすごい光を放つてキラツと目を射る。サワと田、カカと姉は意味が大分相違ふが面白い。

私は、馬來半島や爪哇の旅を回顧する時には、すぐ頭の中に浮ぶのが、あの色彩の美と、模樣の變化に富んだ更紗のことである。更紗は、大槻磐水の口授を筆記したる蘭說辨惑に依れば、本名せつつといふ、さらたと云ふ地より出すものを上品云々と記してある。印度國のさらたが何れの地にあるか、果た磐水が說くが如き、地名に依つて名づけられたものか適確には證明する事は出來ないが、葡

葡牙語にも saraca の文字あることを忘れてはならない。

印度語の sarasa と共に葡萄牙語の saraca の、優秀を意味して居るものである。

我邦では、紗羅紗、紗羅染、紗羅詑、更多縞、印花布、華布、佐羅紗、更紗、皿紗等の文字を使用して居る、華模様が眼立ち、而して華々しい華美といふ點から、花、華の字が多く利用されて居ると思ふ、馬來語で更紗に緣のあるものを擧げて見よう。

布。カヱン、kain 瓜哇ではカインと發音し、その他では、カヱンと聞える。

結婚も、布と同じ様にカイン又はカヱンと言ふ。

絹。ステラ、sutra。

長い更紗又は長い布。カヱン、パンジャン、kain panjang。子供を抱くとも言つて居る。

腰卷にする布。サーロン、sarong。

帽子。トツピ、tapi。

手巾。サプ、タンガン、sapu, tangan。サプは拭く、タンガンは手の意なり。

頭の布。カヱン、カツパラ、kain kepala。瓜哇人が頭に更紗を結んで帽子となし居るもの。カラツパは頭の意かぶり、更紗とは、此のカヱン、カツパラのことを指す。

頭の布。トロン、カツパラト trong kepala。トロンは冠せる、又は茄子、人に賴むこと等の意味に用ゐる。トロン、カツパラとカヱン、カツパラは何等相違ひたるところなし。

手袋。サロン、タンガン、sarong tangan。

枕覆。サロン、バンタル、sarong brntal。

花。ブンガ、bunga 又はカンバンとも言ふ。

此の馬來語と瓜哇語とは同じであるが、發音の上に、差異がある、瓜哇の方は、甚だ優しみが多く含まれ、抑揚はまるで、歌の調子のやうに聞かれる。

馬來語の文字は、蚯蚓のはつたものゝ如く見られるが、これは三十三字より成立して居る。歐洲の文字の如く、左りより讀むのでなくて、右より讀んで行く、例へば T. Nagami の場合には、ﻧ ﻣ ﺗ と書く。三十三文字は左の様に書かれる。

ا alif アリツフ

ب ba バー

ت ta ター

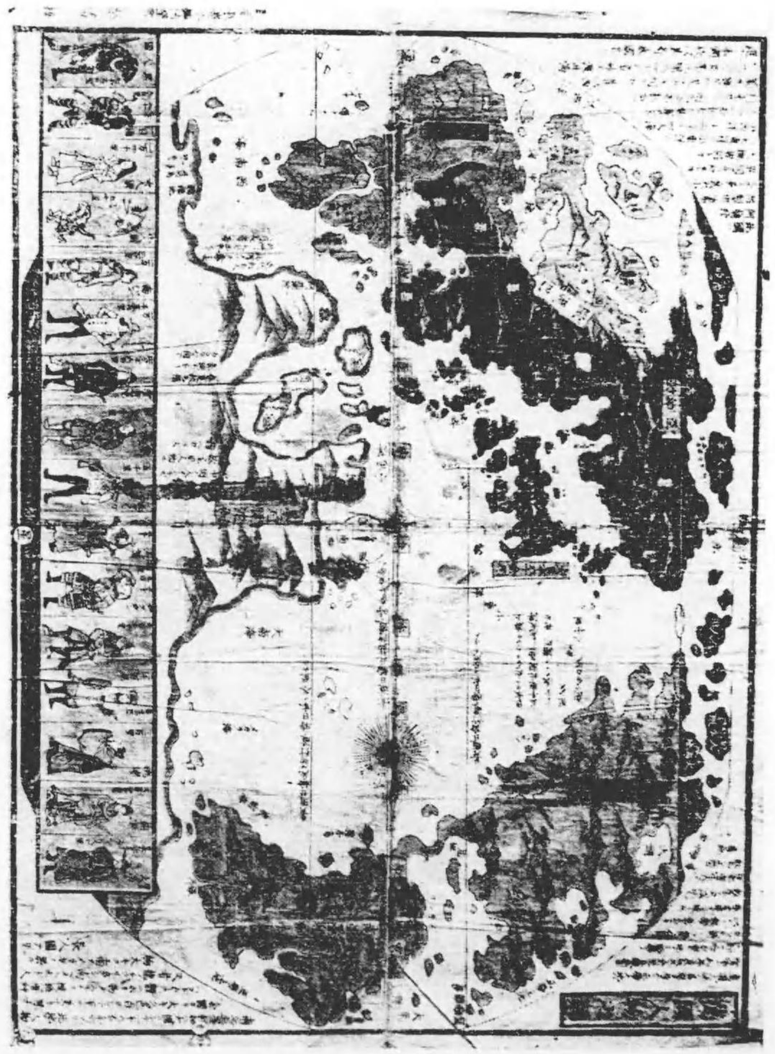
ش sha サー

	南蠻	長崎
ج	jim	ジム
چ	cha	チャー
ح	ha	ハー
خ	kha	クハー
د	dal	ダール
ذ	dzal	ザール
ر	ra	ラー
ز	zai	ザーイ
س	sin	スイン
ش	shim	シム
ص	sad	サッド
ض	dhat	ダッド
ط	ta	ター
ظ	dh	ダー
ع	ain	アイン
غ	rvain	ライン
ڠ	nge	ンガー
ف	fa	ファー
ڢ	pa	パー
ق	kof	クフッフ
ك	kat	カッフ
ڬ	ge	ガー
ل	lam	ラム
م	mim	ミム
ن	nun	ヌン
و	wau	ワウ
ه	ha	ハー
ى	ya	ヤー

Nya　ニヤー

マレエス横文字三十三字は黑坊文字なり、紅毛とちがひて右行たりアラビヤ文字なるべし、紅毛譯司今村金兵衞の話　三月十八日

豫浦雜綴の著書は、かう書留て居る如く、馬來語の文字はアラビヤ文字である。



畫版崎長　圖之物人國萬

（藏所者著）

海外雄飛の長崎人

長崎の港には、年々唐紅毛南蠻船が、絶えず港の中に、巨體を浮かべて居た。萬里の波濤をへて碇泊する異國船から舶齎する物品や、ボートより上陸する人達より得る知識は、此町を中心に、日本諸國の津々浦々に至る迄、海の彼岸に、貴重なる寶物、得難き文明の空氣のある事を知つた進取の氣性を持つ者に取つて、或は貿易商人となり、或は探檢家となり、海外發展の機を高調させ、朱印船は織るが如く彼我の貨物交換に奇利を博するやうになり、苦の世界と惡戰しつゝ目的を達した者が相當にあつた。此處にその代表的人物とでも見る可き人々の傳記を記す事にする。

船本彌七郎

彌七郎は彌七又は顯定と稱した、彼の志は渡航交易をなす事にあつた、彌七郎は、廣南に渡り、阮氏と我幕府の間に、非常なる信任を得、交趾地方に渡航する我が商人の監理として、海外にある貿易家の間に、群を拔き、安南大都統瑞國公より、特に義子の待遇を賜はり、破格の光榮をになつたのである。

安南國大都統瑞國公報書

日本國本多上野介正純幕下、遙覩雲箋、如接風采、比者、彌七郎天敎一見、篤實忠厚、我結爲義子、兼愛諸書、曲加勸戒、體如釣意、玆焉彌七郎回國、不勝想望、爰裁片楮、附風奬保、萬望幕下見

レ幸彌七郎、我知其惠、且勸懲國常典、理宜稟白國王、明年復許彌七郎整飾參艘、便來本鎭、一平交易、兩全恩義、所有小物白絹貳疋奇藍壹斤聊贈爲信、其餘他客商、不得混進、倘有暴惡、正以國法、謂不能容、書不盡言、至矣必矣。

弘安六年五月初六日

此書は、彼が義子の待遇を與へしを證するものである。慶長九年には、德川家康が、南大都統瑞國公に贈る文書を託して居るほど、彼我の間に、外交上重用されたのであつた。

彼は又、慶長十年の頃には、東埔寨方面に、驥足を大に伸さんとしたが、原彌二右衞門、長井四郎右衞門の活躍節圍內であつたので斷念してしまつた。

彌七郎は、慶長元和の頃、前後三十年を、安南地方に暮して、家康の依囑に依り、その制札をうけ邦人を督勵し、商業上の擴張をはかつて、外交の圓滿に獻身的奉公をつくしたが、安南國情の變化に鑑み、晩年は、平和な餘生を長崎に樂しんだ。彌七郎の父は、彌平次と言つて、文祿年間、朱印狀を貰つて居た、彌七郎の子は、祖父の名を襲名して彌平次となつたのであつた。

後藤宗印

諱は貞之、通稱稱太郎、後庄左衞門と改め、剃髮して宗印と稱した。父は肥前杵島郡領主後藤中

務大輔貞明の子で、永祿年間長崎に來り、彼の才智は世に知られ、住民の頭分である役目の頭人となつたのであつた。頭人の役廢止されるに及んで、町年役に任命せられた。頭人の中には、高木勘左衞門、高島了悅、町田宗賀等が居て、宗印と共に、複雜なる制度にもよく力を致したのである、その頃は切支丹伴天連の勢中々侮り難きものが、長崎の天地にあつた。それは港の隣接地である浦上、山里淵の三ヶ村の年貢を葡萄牙人が收め居たので、耶蘇敎會は素晴らしい勢があつた、頭人の苦心は、此耶蘇敎會と住民の間に立つて、彼我の利益を圖るに都合よく努力せなければならなかつた、自然耶蘇敎會の人等に接近する機會の多い彼等は、切支丹敎義の眞理に耳を傾け、基督を拜するものが多くなつたのみならず、住民の中でも、在來の宗敎に滿足しなかつた者は、敎會堂の門をくゞり行くことの日が多くなつて來た。長崎の開港場に集まり交易する人の腕には、コンタツを吊されねば、海外貿易に便利を得なかつた樣になつてしまつた。

豐臣秀吉の眼光は、切支丹宗門の無益を知ると共に、彼敎義の下に伴天連共の有害が國に波及する事を見ぬいて、切支丹禁壓の方針を生じ、寺澤志摩守廣高、藤堂佐渡守高虎は長崎に派遣され、伴天連の勢力を驅逐し盡したのであつた。

秀吉、朝鮮征伐の爲、その本營を肥前名護屋に移し、自ら出張したとき、頭人總代に選出された宗印は、秀吉に謁し、勞を稱して、特に猩々緋の陣羽織を與へた。

宗印は、慶長十一年丙午六月十二日、芝萊の通商を許され朱印を賜り、引つゞき十二年には、暹羅の通商も許可され、東甫寨との通商も自由に出來ることゝなつた。

寛永十四年十一月二十四日、八十餘歲の高齡を以つて、宗印は永眠したのであつた。彼は切支丹信者となると、最も熱心なる敎徒となつたとも傳へられる。

末次平藏

末次平藏の父興善は、長崎開港後間もなく、博多より移轉し來り、私財を投じて一町を作つた、興善町といふのがそれである、興善の父の商賣は日々榮え行くと共に、彼の子平藏は、人となり頗る機略ある事父に似、その上豪膽明敏であつた、父興善の他界後、彼平藏は、葡萄牙人の海外貿易に莫大なる利得あるを見、貿易船を建造せんとの志を抱いて居た、天は彼に、好機會を與へた、豐臣秀吉は文祿元年豪商に朱印狀を授け、海外貿易を大に奬勵したので、彼は荒木宗太郎、絲屋源左衞門、船本彌平次と謀り、安南貿易を開始する事とした。當時の朱印船は九艘舟と稱せられた。その後慶長九年德川家康より朱印狀を賜り安南に、貿易船を派遣した。九艘舟の中の二艘は末次平藏所有の朱印船であつたゞけ、海外貿易家としての彼の勢力は大なる者があつた。

豐臣秀吉、肥前名護屋に出陣の折、頭人總代として、自選をなし、公領の御禮を言上に行つた村山安東は、辯佞巧みに秀吉の歡心を求め、長崎支配と立身して、町家に向つては地子銀を徵し、村には年貢を納めしめ、已は僅か二十五貫の運上銀を上納し、差益を懷中し威勢驕奢の心となり、平藏を輕蔑する事甚しかつたので、平藏は大に怒り、父興善が貸與へし銀十五貫の返償を迫り、兩人の間に爭論の輪は大きくなり、遂に江戸に出でて對決となつた。

村山安東は、尾州名古屋の浪人で、新開地の長崎に一攫千金を夢見て出で來り、末次興善に見出され、彼の才智は頭人に出世し、秀吉に拜謁したのは、二十七歳の青年時代であつた。安東は末次家に對する恩儀を無視し、法廷に於ける爭論は、やゝもすると平藏の敗けになりさうであつたが、安東が大阪陣の大野修理亮の下知を受けて、兵糧、武具を城内に運びし祕事を、平藏の爲に告げられ、安東は江戸にて死罪、その家族十何人は長崎にて殺されたのであつた。村山安東は、自分の祖先が豐臣家の臣として恩顧を受けて居たので、如何かして、世を豐臣の天下にせんものと計り、佐々木某等の如き浪士に謀叛を起す爲の軍用金を、集めて居たとも言はれて居る、又彼は熱心なるジエスイツト派の切支丹信者で、アントニ東庵とも言はれた、東庵とは、秀吉の御前に出でてより改名したのであつた。

平藏政直は、興善町の隣町金屋町に住居して、乙名役であつたが、外町代官職を贏ち、海外貿易專門に身をゆだね、勝山町に宏莊なる邸宅を營み、寛永二年には、青木賢清を助けて、諏訪神社の社殿造營に萬金を拂ひ、諏訪大明神を安置したのであつた、寛永五年三月には、平藏の派遣したる船を阿蘭陀人の抑留するところとなり濱田彌兵衛等を報復に出したのであつた、寛永六年には、暹羅國の使節來り、町年寄高木作右衛門、代官末次平藏に茄花人絲緞四疋宛を贈つた、寛永七年五月廿五日平藏政直は殁してしまつた。

濱田彌兵衛

臺灣は鄭成功の父鄭芝龍が、平定して居つたのであつたが、芝龍明朝の招きに應じ、福建に入りて以來、阿蘭陀人の、支那貿易根據地となつてしまつた、我が寛永元年には、澎湖島を占領して居た阿蘭陀の兵は撤退して、臺灣の安平に據り、城塞を完成し、防備を嚴にして、出入の商船には稅を課したが、我が日本の貿易船は、阿蘭陀の主權を認めなかつた。寛永五年三月末次平藏の貿易船二艘安平港に入るや、臺灣長官ピーテル、ノイツ pieter nuyts は、乘組員を拘禁したる上、二艘をも奪つたのであつた。

平藏は、貨財を劫取する阿蘭陀人の横暴を怒り、仇を討たんと壯士を招いた。平藏の友人である濱田彌兵衛は、人となり任俠の男であつた爲、契つて阿蘭陀人を降伏させんと平藏に告げ、弟小左衛

門及び募集に應じた七百人を船に乘せ、寶永五年三月三日の雛節句の日に、大丈夫玉と爲りて碎けん吾國の爲に恥を雪ぐこと能はずんば、安んぞ敢て國に入らんやと、衆を勵まし、勇ましき門出をしたのであつた。此頃平戸に在りし阿蘭陀人は、早やくも、濱田彌兵衛の仇を報ぜんことを知り、安平に報告したので、安平港に彌兵衛の船現れし時には、警戒嚴重なるものがあつた、彌兵衛は臺灣の土地を開墾の爲め來たれりと稱し、油斷をさせ、壯士を農民に變裝させて居た。が阿蘭陀人は、彼等の刀劍、槍戟を奪ひ、三日の後、船を進むる事を許したが、警戒は解かれなかつた。城下に入る事を得なかつた彌兵衛はたゞ手を束ねて、安平の城地を、船上より睨むのみで日は過ぎたのみであつた。六月朔日拂曉、彌兵衛兄弟は、徒二十人を率ゐて、突如城内に躍り出でた。酒宴に笑ひさゞめく阿蘭陀人の士官等は、事の意外に驚き詈り、紅毛人三十人劍を拔いて、ピーテル、ノイツの身邊を守つたが、彌兵衛の子新藏勇敢に戰ひ、弟小左衛門の勇は、たちまち、紅毛人を斃し、長官ピーテル、ノイツに跨つた彌兵衛は、匕首を咽喉に擬して、彼の罪をせめたので、掠めたる貨財を返すと叩首して罪を謝したのであつた、侍衛の士は小左衛門新藏等が、刀を執つて瞋睨したので策の施す可きものがなかつたのである。

彌兵衛は、長官の子を人質に取り、紅毛人四十三人と共に、財物を取戻し、意氣揚々と、十五日間の海上も無事に、長崎に歸り來たので、海岸に出迎へる壯士の家族及び見物人の歡聲は天を動かした程であつた。寛永九年十月臺灣より使節來り、謝してその兒等を還さん事を乞うたので、將軍は命じて人質を放たせしめたのであつた。彌兵衛は有馬の役に軍功をあらはし、新藏は武勇を以て細川侯に仕へ五百石を拜したのである。

濱田彌兵衛兄弟、臺灣討入りの舊記は、何れも大小の相違があるが、此處には長崎拾弐のものを選んで見た。

濱田新藏高砂へ渡り歸事

寛永の頃かとよ高砂の港口に僅之地を阿蘭陀押領して居城を相構支配せり其主宰をハコンフウトヲルと云然るに寛永十四年末次平藏商船を彼地に渡し高砂ニテ小船を借り福州に渡り絲を調んと渡ル所に阿蘭陀是を見て高砂より八拾里沖に小島あり其名をヒヤシウト云此島に待請持渡る所之金銀を奪ひ取り無是非思へども多勢不及力歸朝せり因是平藏が疑を晴さん爲高砂人二人連來れり平藏以外鬱憤していかゞはせんと思ふ所に翌十五辰春長崎町人濱田彌兵衛同弟小左衛門彌兵衛子新藏云へるハ商家に隆生と武性剛張ニテ心さま人に勝るるを以心よしとす此者日頃平藏に恩顧深かりしかば彼彌兵衛平藏に語りけるハ我々兄弟を高砂に遣すは兼ての意趣をとげ鬱憤を散じ賚ては是を以

て舊恩を謝すべしと頻に諫めけり　平藏此意に任高砂渡海の事を議定す　彌兵衛思ひけるハ　未年をもかさねずして渡海するにより必定兼て之意趣を晴さん爲來るやと無左右船より卸ぬし　謀の爲とて長崎村の百姓百人餘　鍬鎌等の農工を爲持農人の體にもてなし其上前年召連し唐人の案内者として既に碇を揚艫綱を揚んとする　所に骨肉の者共駈出永き浮世の別れなり武門の家ならば異國の地に體を埋たればとて何程の名をやとゞめんや　永くさい子に悲を殘さんよりは堅固にして歸るべしと聲々に呼はりける彌兵衛聞て何に〳〵武門に生れ年はとてかゝる事を聞ながら耳つぶして日本の名を汚しなんぞ夷の者共に慾にあなどられんや　日本の諸神も照覽あれ我思ふ圖にあたらずんは二度日本に歸るまじ今日日本を出しより體は異國の者ぞ必ず我を待事なかれと云捨て二度ものをばいはざりし船をはやめて推出す程に高砂に着船せり阿蘭陀共是を見て　此船は定テ前年の意趣をとげん爲渡海せると覺たり　必　船より揚るべからす　異議及ハハ　討取るべしと大勢打出ここかしこに集れり　已石火矢を仕りて相待けり彌兵衛船端に立あがり陸の體を見渡す　處に阿蘭陀大勢乘組小船一艘漕寄て日本船に乘移今日本船渡海せし事前年の意趣を報ん爲と覺たりとて既に危く見えし　所に彌兵衛さわがず云けるハ我從日本來るといへども前年の事を不知年來此地の唐人等より舟合る事有りて　渡海せり此地の者共喰事を知て耕す事をしらず　かほどの大國空敷農の役する事を惜しみ今度渡海して耕し　耘事を敎へ我も餘慶を取ん爲なり　聊意趣の爲にあらず　此故に船中乘來る所　悉く農具にして武具なしと陳謝す　此言葉にたばかられ少しは　疑晴たりといへ共武具の類ハ取あぐべしとて鍬鎌に至迄ひとつも殘らず陸にあげ其後大船數艘ニテ相寄警固を備へたり　彌兵衛云けるは成殃をさけて隨氣を付と云事有れば彼が怠る所をねらふべしと心に深く謀けり案のごとく次第ニ心安や思ひけん乘卸も自由に成り時節ハ來れと彌兵衛ハ訴口兒に出立かびたんか前に兩手をつかね崇敬を盡し歸帆の望を述けれ共中々耳にも聞入ず曲糸に腰ををしりうたげして居たりしは運の極と覺たり彌兵衛是を見て我日本を出しより夙に起て神を拜し夜半に寐て是を思ふ造次顚沛も忘るゝ暇なし誠に一念のべる所神明の妙助也と飛をつて引おろす阿蘭陀茂打返さんとせし所に小左衛門脇指を拔む手をいしたのに兩腕をなやしけれバ動事叶がたく彌兵衛さすがを秡心えに押當意趣をいはんとせし處に阿蘭陀數十人劍を拔我先にと駈來る新藏是を見て飛をり眞先に進む　の阿蘭陀一人肩先〻脇下え水もたまらず打落す殘りし阿蘭陀共是を見て跡をも見ずして逃歸りし或は扉を蹴はなし出るも有窓より出る者も有二階住居の事なればはう〳〵逃て去りぬ依之右くみ捕し阿蘭陀をば高手小手にいましめて遺恨の始終をいひし所に警固の船より石火矢を打をる因是彌兵衛云けるは石火矢を剩すべし其上今見る所三拾貳艘の內十一艘の梶を揚させべし然らずば　忽殺害すべしと云けれバとも角もと艘幸し我を

窓より外へ出すコンフラトヲル阿蘭陀ともに向ひ我は無恙必石火矢を打べからず其上十一艘の梶を卸せと云けれバ阿蘭陀共何とはしらね共皆々梶を卸しけり彌兵衛コンフラトヲルを引立我船に歸り日本へ連行へし先々陸にあげし梶を打碎とて手に打寄り微塵になし既に艫綱揚んとする所に阿蘭陀數多馳來り金銀の事においては山をも築べしひらに免し給へとさま〳〵嘆くといへども更にゆるさず阿蘭陀とも申皆ハ然れば一人の男子有當年十二歳にして愛甚深けれども取替て終と愁嘆せしかば流石思來にあらざれバ終にハ望ニまかせしなり扨出船成ぬれば十二艘の船頭其外故有に家臣の阿蘭陀とも日本船に乘けるを彌兵衛是を警固せり此外水主の者共は阿蘭陀船に乘組せ小左衛門新藏是を警固し我朝に歸りける竟に僅の人數を以異國相渡りとりこにして歸る事神德の妙助にあらずんば何ぞ如此くならんや　仰か崇

附

コンフラトヲルの子十二歳其外家臣扈從の阿蘭陀數人大村に遣し籠舍其外は島原の籠並長崎の籠にて入置此時長崎の籠櫻町今諏訪より入町の北角に有

阿蘭陀船梅ケ崎につなぎ朽る日本船は籠町の川や

右のとり子とも翌年死ス此年臺灣より□□爲其親入津せり然ども申分け不相叶逗留して七ケ年に當り籠舍の阿蘭陀共不殘被相渡歸帆や　新藏脇差無雙の切れもの異國の力胴一つ斬落なしと云り。

津田又左衛門

山田長政と津田又左衛門とは、海外雄飛の日に憧憬の日を長崎で送つて居たが、相携へて、暹羅國に渡る事が出來た。當時暹羅は新王朝の初めであつて、國事多端内亂の絶えることなく、首府マユヂアには、慓悍なる日本の浪人が六百人も集つて、異國の地に、英名をあげんものとむなしくも日を暮して居た、山田長政、日本町に入るや、彼の才幹は衆に推されて首領となつた。津田又左衛門も重要視されたのである。

暹羅の隣國六昆は、暹羅の内訌を幸ひとし、兵一萬を率ゐて國境を侵した、王ニモンタムは宰相カウハムの獻策を入れ、日本町の日本人に援兵を謀つたので、長政、又左衛門は、時到れりとなし壯士三百を募り、日本の甲冑弓箭を帶せしめ、數千の暹羅兵を交へて、日本國の援兵海を航し來たると聲言し、一戰の下に敵兵を蹂躙して六昆國に攻め入り、王を擒として凱旋したのであつた。暹羅王大に喜び長政又左衛門に王女を妻としておくつたのであつた。

元和五年子三左衛門と共に又左衛門は歸鄕し、携へ來たる赤檀を能仁寺に奉納した、後再び暹羅に航したが、寛永の頃歸り來た時に、渡航禁令が發布され、彼の海外に志す道はたゝれ、材木町の乙

名として、淋しい日を送らなければならなかつたのであつた。

荒木宗太郎

藤原氏を名乗る荒木宗太郎は、一清又は惣右衛門とも言つた、元肥後熊本の武士であつたが、士を捨て商となり成功せんものと、天正十六年長崎の地に來り、浦上淵村稻佐郷飽之浦に住居したのであつた。

元和八年十一月、海外渡航朱印狀を賜り、南支那、安南國等の交易に從事し、彼自身船頭となり乘組員を指揮して、難航海の上にあつて富を積み重ね、末次、茶屋、角倉等の豪商と共に朱印狀船主として知られた。尙又暹羅交趾地方にも渡航し、彼の信用は異國人の間にも博して居たのである。

安南國王の外戚阮氏は、元和五年、彼に女を娶はせて誓書を渡した。

安南國王殿下兼廣南等處爲二立書一事、蓋聞重二兩國之乾坤一斯言信矣、親二一定之和睦一何貴如レ之、肆我阮家自レ立レ國以來、務施二仁義一、遠來近說惠澤均蒙、玆有二日本國艚主木宗太郎一、乘レ艚駕レ海榮二耀我國拜見一、願レ承二膝下一、我乃推二其所レ欲仮加二貴族阮太良一、巨レ名顯レ雄、非二惟特宮庭之光顯一、抑亦堅二南北之利通一、詩人賽曰、之趾之角之項、爾才稱二令子之才一、如レ日如レ月如レ松、我壽等二南山壽一、榮斯足矣、猗歟盛哉、國有二常法一、立レ書存照、

弘安貳拾年肆月貳拾貳日

三兵衛尉榮は、宗太郎の曾孫であるが、阮氏の誓書を、子孫に知らせる爲めに大和文に書き改めた。

安南國の殿下兼廣南等處書を立つるがための事

蓋聞兩國の乾坤を重んずといふこと此言葉まことなる哉、一家の和睦をしたしむこと何のたつときの事が足にしかんや、然るに我阮氏代々國を立しより此かた、務て仁義を施すゆゑ、遠き者きたり近き者よろこび、各恩澤を蒙れり、こゝに日本國の船主荒木宗太郎といふ者あり、船に乘海を渡りて我國にきたり、まみゆることを榮燿とし、親類のちなみを受けんことをねがふ、我其こゝろを推察し、仍て親族に加へ阮太郎と稱す、其の名高くあらはるゝ事、只是宮廷の光顯るゝのみにあらず南國北國通路のたよりを堅うする也、詩經にいはゆる麟の跡麟之角麟之項とて公族の多きにたとふ其方の才令子の才にかなへり、日のごとく月のごとく我壽は南山の壽にひとし、たかひの榮花滿足せり、猗歟國につねの法あり、書を立て證據を與へおくもの也。

宗太郎の夫人は王加久戸賣と言つた。諏訪祭禮の王妃さんの行列は、此の王加久戸賣夫人の行列を眞似したのである。

海外渡航禁ぜられてより、宗太郎夫婦は、飽の浦に住み、宗太郎は寛永十三年十一月七日、王加久寛夫人は正保二年十一月七日、年は變れど、月、日共に同じうして病歿したのであつた。宗太郎夫妻の間には、家須女を生み彼には、京都の人が養子となつてむかへられた。

高木作右衛門

諱は忠次、町年寄である、元和年間には、薩陸國（ボルネオ島の一部）と通商交易をして居た、後禾次平藏とともに、切支丹宗門の宗徒を諭して佛敎に轉ぜしめた功勞があつたので、時服及び銀を賜はつた、が切支丹宗は天草、島原の地に盛んであつて、極刑も何等效果なく、人心は佛敎を捨てゝ切支丹に走る者が多くなり、切支丹徒の一揆は蜂起して、大合戰となつたのである。離れ島の島民には原城の軍に同情するものが多いので、島原の亂平定する迄には、港內外の警備に從事するのは大役であつた、彼は警備の功により江戸に於て將軍家光に謁見を許され、厚く賞されたのであつた。作右衛門の子孫は二家に別れ、一家に長崎代官、一家は町年寄として、幕末に至る永き間、長崎に盡くせる功は大きく、彼の家名はかゞやいたのである。彼の系圖は今、私の所藏するところとなつて、卷をひもどけは、彼の親戚並びに、緣類に名あるものゝ多きに驚く位である、系圖の卷頭の文を誌して、彼の家柄の名譽を殘しおかう。

藤家高木系圖　家紋十二日足

原夫萬物之生也必有根本者必有枝末而奕葉聯芳雖經百世無曾絕者蓋因其本深且固也姓氏者本也人生之所以辨其所自來也史註曰姓者所以統繫百世使不相別也氏者所以別子孫之所出也豈不然乎哉高木氏者本大織冠之苗裔也世家居總刄海上到從二位越前守貞永卿之肥刄忽族館夢　天照太神宮八幡大菩薩告曰汝所建以朝日爲旗貞永不任感戴前至佐賀高木築城居之尋八幡宮爲鎭護神蓋酬靈盛也其孫肥前守宗家伯耆守宗朝之所建朝日旗存今于八幡宮到應永年中家經嫡子右京大夫胤秋興龍造寺善爾來二葉改姓龍到胤秀時又復舊姓中比爲河上社務以備外劫也於截枝分葉聯兒孫蔓衍到今不絕者豈非其本深且固者乎

忠次は寛永十八辛巳三月晦日に卒した、彼の名は高木勘右衛門忠雄である。

竹內貞基

通稱卯吉郎、淸潭とも稱した。父は良太夫、最初山本氏を稱し後竹內家を繼いだのである、漢學を家兄山本晴海に學び、書道を村井正澄に習ひ、又高島秋帆に從つて西洋砲術を修行し、多くの門下生の中にて、頭角を現し、劍術を村井正澄、柔術を竹迫柔助に學んだのみでなく、國學を中島廣足に就いて、師風の和歌をよくした樣に、彼は幼少にして多藝多能であつた。年十六にして船番役を勤め

高島秋帆罪を得て獄にくだるや、貞基は秋帆の爲、種々便宜をはかつたのであつた。

阿蘭陀軍艦ヘデー號は、前年蘭國に註文したる幕府の小蒸汽船を載せて來たが、汽船運用、汽罐使用、大砲使用、造船法等を知るものは一人も無かつたので、その法を長崎の役人二十數人と共に、佐賀藩士も交つて、阿蘭陀人グフアビユース等に就きて、反射爐使用法と同時に講習を受けさせたのである。奉行水野筑後守は、船番觸頭大木藤十郎を取締となし、竹内貞基、山本物次郎、横山喜三太、野口美太夫等を、グフアビユースの直傳習生に命じたのであつた。大木藤十郎は貞基とともに秋帆の門人で、砲術に妙を得て居た。講習は出島の阿蘭陀屋敷内で行はれたのであつた。阿蘭陀人より知識技術の方法を知つた貞基は、後佐賀の藩主鍋島閑叟侯に聘され、藩の人々に海軍術を教へたので、後年佐賀には海事思想より成功する者が數多く出た萌芽は、實に貞基の力であつた。尙鍋島侯の爲に木製機關雛形を造り、水戸侯、長崎奉行の囑に依つて之を作つた、これが日本最初の蒸氣機關雛形の製作の始めである。

安政二年十月には、出島に海軍傳習が開かれ、勝安房、榎本釜次郎、五代友厚、川村純義、池部啓太、中牟田倉之助、永持享次郎、佐野常民等の諸藩士が傳習に從ふや、竹内貞基、横山喜三太の二秀才は選ばれて、ヘテー號の中に於て航海術を學んだのである。

安永四年には、幕府、軍艦教授所を創立せんとして、實地試驗を試みた、傳習所目付永井玄蕃頭は、竹内貞基に汽船操練を、技術の優秀なる者に命じた、その中にて、貞基は軍用長として、名譽の指名を得、阿蘭陀國獻上の觀光丸を見事に、海路安全、江戸に航海したので、これが日本人の汽船航海の初めであつた事は特筆しておかねばならない快事である。

貞基は、幕府の軍艦教授所の教授に命ぜられたが、固辭して受けなかつた、が、止む事を得ず二ケ年間教授所に留まつた、長崎に歸る時には、觀光丸に乘り、その年の秋には、觀光丸運用長に命ぜられ、文久三年五十一歳、病歿した。彼の門人には多くの名士と、著書には航海圖說數十卷とが殘り、日本海軍の基礎の上に於て、光輝ある歷史を作つた偉人であつた。

絲屋隨右衞門

絲屋隨右衞門は、山城國京都に生れたが、後、海外貿易には、長崎の地が一番便利なる事を知り、袋町に住居する事になつた。

絲屋隨右衞門渡唐年十六歳、慶長六辛丑年より寛永九壬申年迄三十二年の間二十四度渡海。

長崎古今集覽には右之如く記して居る點より察すれば、隨右衞門は幼少より獨立し、貿易業に從事したる朱印狀を許されたる商人で、父は富豪であつて、その財をついだものと見られる、父母の姓名等

の明瞭を缺く事は遺憾に堪へない。

肥前島原領主松倉豐後守重政は、豪傑の氣風を備へた大將であつた、彼は邪教切支丹を根絶するには、その根源地たる呂宋を討つて、禍を掃蕩す可しと思ひ呂宋國征伐を考へた、而して藩士吉岡九左衞門、木村權之助に命を含め兵二十人を率ゐせしめ寛永七年十一月十一日長崎の港を出帆させるのであつた、此の案内役には、幼少の頃より海外事情に通じたる絲屋隨右衞門を適當なるものとして選んだが、船中は難海の日のみつゞき、炎暑さへ加はる異鄕の海上に於て、兵の大半は死亡し、木村權之丞さへ、熱病の爲死んでしまつたのであつた。航海の苦しみもやがては、目的地たる呂宋國に着したのであつた。切支丹信徒として高山右近、内藤德庵等七人が流されて此島に在つたので、隨右衞門一行に面談しようとしたが、呂宋政府の嚴重なる監視の爲めに、それを果す事は出來なかつたのである。偵察の任務を果して歸つた吉岡九左衞門等の海上難航海等の事が、重政をして呂宋攻略の不利をさとらしめたのであつた。

隨右衞門の子五郎左衞門は、寛永元年袋町乙名となり、正保、承應の時に、年行司重役を二回兼務し寛文二年一月歿したが、隨右衞門は何年何月に死んだのか、彼の詳傳と共に不明であるが、二十數度の渡海を見ても、如何に海外貿易史上重要なる人物であつたかゞわかるのである。

柏原太郎左衞門

小堀遠州の家臣兵部左衞門の子、年十六にして征韓の役に從ひ、役後流浪して熊本に足をとゞめて居たが、長崎に住むやうになり屋號をも天野屋と號して商人となつてしまつたのが柏原太郎左衞門である。彼は末次平藏の船が臺灣の阿蘭陀人の爲に屈辱を受けたとき、濱田彌兵衞と共に、臺灣に渡り、臺灣長官の子を質として引揚げた勇者の一人であつた。此賞として幕府は米百俵を彼に與へた彼は晩年、熊本の地に世をおくつたのであつた。

島谷市左衞門

堺より長崎に移り住んだ人の中に、航海術に秀でた者があつた、島谷市左衞門がそれである、紀州の者の漂流して無人島にある事が評判になつたので、幕府は、航海術に長ずる者に命じて探らせようとした、長崎奉行牛込忠左衞門は、小林謙貞を推擧したが、謙貞は市左衞門の非凡を稱へて、彼を推したのであつた。

代官末次平藏は、唐船を摸造して、工成ると同時に島谷市左衞門を船長に命じた、市左衞門は直に出帆し、江戸及び南部等の航海に從事する事となつた、時寛文九年の事である。

延寶三年閏四月には、小笠原島探檢の大命を市左衞門に命ぜられた、彼は下田港を解纜して二十五

日小笠原島に達し、三十一日間は、探檢に日夜を過ごし、六月五日島を去つて二十日江戸に歸つたのであつた。彼の具さに報告した小笠原探檢談は世人を驚かせた程有名なものであつた。元龜の頃長崎に來た彼は、元祿三年病を發して歿したのであつた。

大浦ケイ

油屋町にて手廣く茶商をして居た大浦ケイは、嘉永六年出島屋敷の阿蘭陀人テキサストルに諾つて、肥前嬉野茶の見本を、英米及び亞拉比亞三國に向け輸出を試みた、安政三年には、英人オールド來り巨額の註文をする事となつたが、當時の茶の產額は微々たるものであつて、九州諸地方を探し求め、十ツト一萬斤を手に入れたのであつた、これが日本茶の海外輸出の濫觴であつた。ケイの事業は益々富をなし、彼女は茶輸出にとゞまらず種々の海外貿易を初め、外人民留地に住む大浦の商館と往來し、一婦人の身を以つて成功者の一人となつた、性質剛毅氣慨があつた、男を買ふなら役者の樣なノツペリしたものは嫌ぢやと言つた。その頃薩長土肥の士が、長崎に集まつて居た、幕末の頃で脫藩したものが多かつた、彼等は、金の入用な時には、ケイを尋ねて惠みを受ける者が相當にあつた、ケイは武士の面倒をよく見て、彼等に黃金の憂なからしめた反面には、男妾のやうにした士も一人や二人でなかつた、その中から明治建國史上に重要な花形となつたものもある。ケイ女は製茶の輸出に功勞のあつたばかりでなく、幕末當時の勤王の士に對するパトロンとしても、我々が忘れる事の出來ない女丈夫で、名物女大浦おケイさんは明治十七年四月亡くなつてしまつたのである。

此他に、長崎人にして海外關係の深甚たる人は、枚擧に遑なき程である。ことに、鄭成功、和田理左衞門、村上武左衞門等の傳記は、他の項で述べて居るから、此處で擱筆する事とした。

レンラン節の浮女哀話

大空に雲の峰が悠々然と、現れて居るが、ジャランジャラン（散歩）の時刻になると、白と黄を含んで、まるで油を絞出すやうな白雲が、淡紫色と桃色に交つた色に變り轉ずる頃、燃えるが如き青草の上を、水牛の一群をひきゐて頭を振りつゝ黒坊の兒等が、節面白い俗謠を聞いた、私は新嘉坡の波止場近くで、非常なる興味が、頭の上に繁り咲く合歡樹の花の雲のやうに、胸の中に擴がつて行つた。亦、劇場のボックスにある時も、言葉は分らなかつたが、凄愴と悲哀に籠つたレンラン節を聞き、浮女の薄命を知つたのであつた。そのレンラン節の悲調を帶びて、聞く者に涙を誘ふものは、浮女のチミナ、サヤンの歌であつた事を、南洋通の友人から、背後に、椰子の葉の風に動くホテルの庭で、ウキスキーのコップを手にし乍ら聞いたのであつた。

馬來半島の奥地にはテラと名づけられた、錫の產地で賑はふ町がある。此のテラの里に生れたのがチミナ、サヤンであつた、彼女は、歳をふる程、若者達の眼につくやうに美しく成長してゆく。常夏の國の誰人も、生れつき色黑き中に、彼女のみは白い色をした顏形が、一層眼許涼しく、明眸皓齒風貌典雅であつて、女神來として、遠近の男の胸に強い戀の矢を深く立てたのであつた。

チミナ、サヤンは、仙人掌に圍まれ、扇芭蕉、金竹、名も知れぬ密林を背にして、庭前に香氣馥郁と放つ蘭の咲き亂るゝ中に、小さい館を結んだのであつた。彼女の微笑、彼女の甘い囁は、多くの若者の心を狂はせた、身分尊き王侯の地位にあるものも、茨の道を厭はず、巨萬の富の庫を立つらねた豪商も、彼女の歡心を求める爲には、榜葛剌の阿片、莫臥爾の花布、波斯の葡萄酒、呂宋の鹿皮、滿剌加の玳瑁、東京の紗綾等の貴重品が次から次にと贈られた。

彼女の柔かい腕と、花蕾の如き脣は、白髮の老人も、額に紅で線を描いて居る青年達も、故郷妻子、家を忘れて通ひに通ふのみであつた。多くの男を奴隷のやうに思ふ彼女の心の中、にも一人の若者の姿が不思議に、片時も去らうとしなかつた。他の男と戲むるゝ時、他の男に嬌態をつくす時にさへ、彼女の頭の内には、その若者の事が、戀となつて心憎きまで、離れなかつた。妾程の女が、一人の男にと、強く思ひかへしても、その若者が、帳を開けて這入り來る姿を見ては、彼女は珍しくも、他の男に對する女王の如き態度になれなかつた。

或月明の深夜に、チミナ、サヤンは、他の男の眠る透をうかゞつて、ソツト裏庭に出たのであつた。もう此時は、戀人の財力も盡きて居たのを、彼女の方から、毎夜無理の首尾をして誘出して居たほどになつて居た。

青白い月光は、晝の樣にかゞやいて、蓊鬱と繁茂する小山を通して、裸足のまゝの彼女の足下の美しい草花を照してゐた、戀人を待つ心には、言ひ知れぬ樂しい氣分があつた。彼女が、草花を手に

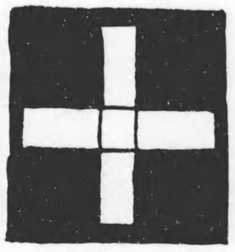
して香氣をかぐ時には、何處からともなく、蟲の集くのが聞えて居た。半時、一時はもうたつてしまつた、チミナ、サヤンは、やるせなく腹立しさを押し包んで、兩手で、黑髮を蹦つて居た、彼女が戀人と逢つたら、待ち侘びる恨みを如何言はうかと考へつゝ眼を伏せて、心焦立つて、フト眼をあげると、其處には、怪物の姿がたつて居た。

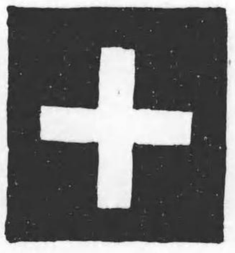
時ならぬ悲鳴に、家人は驚いて庭に出た、青草の上には、眞赤な血潮と、踏みにじつた猛獸の足跡が亂れて、その血の流れの中には、チミナ、サヤンの耳飾の美しい寶石が一個落ちて光りを放つて居た。

太刀を手にする者、吹矢を携へた者、投槍を握つたものゝ一隊が、手に手に松火の光りに、峻しい山道を照らして足を踏みしめて進んだ。黎明の風がヒンヤリとする頃には、岩石の間に、一點づつの血塊が、浮れ男の多くを引つけて居た。チミナ、サヤンのものであつた。

血氣に逸る若者の一群も、岩石の上に、彼女の死骸が、無慙にも投げ出され、首、手、足が喰ひ散らされて、眼もあてられぬ凄愴に、近寄らうとするものはなかつたが、その中から走り出た一人の若者は、彼女の首を兩手で抱きあげ、とめどなく流れる涙に、無言のまゝ、脣をおしあてた、この若者が、彼女の戀人であつた、氣を取り直した戀人は、大勢と共に、猛獸の足跡をたどりすゝんだが、獰惡なる敵を見出す事は出來なかつた、チミナ、サヤンを喰殺したのは虎である事が、足跡に依つて知れた。

その悲しむ可き出來事のあつた日から、村人達は、美貌の浮女を思ひ出す爲に、チミナ、サヤン、チミナ、サヤンと口々に唱へ、哀調限りなき俗謠に歌はれる事となつたのである。





宇十家山々野　宇十すると　架宇十すると　住　人けうやち

宇十家堀　宇十竹切家枝御　宇十竹切道家務能　欅すると　すると家川中

クロス紋と阿蘭陀紋

生存競爭の激しい地球上に、人間が生活する以上、お互ひの名譽、誇等の欲望を絶つた事は有るまい。無人島と呼ばれる國の住民と雖も、身を飾り、名を惜しむものである。古くは原始時代の人達、近くは蠻人の樣に言はれる阿弗利加やニューギニヤ島の人達でも、他人に誇る可く、自分の身體に刺青を施して、その線や、模樣等に依つて、己の力量、美術的心理、傳導的の名譽を美術化して表現し、又は階級の差を示して居る、此の刺青と、紋章とは最も密接なる關係であると思ふ、肉體を疵つけずして、衣服の上に現すものが紋章である。

歐洲諸國では、由緒正しき家柄や、名譽ある歷史を持つ國柄は、必ず紋章を定めて居る、それはウイリアム、ゼ、コンクリエラー時代に、騎士が馬上にて武術の技を戰はすとき、又は國と國の爭鬪の日がつゞく時、敵手にも、味方にも分りよくする爲に選び出された記章である、ので歐洲の紋所は騎士の手に握られた楯が、紋章の一定した形となつてしまつて居る。獅子、鷲、蛇等の猛獸類、美しき草花、暗黑界を照す、太陽、月、星等が多い。

此の紋章は、我國にも、歐洲諸國の樣に早くから傳つて居る。

日本は、天祖天孫が、建國の基則を初められると同時に、仕へまゐらせる群神に、分業的職業を賜つた。而してその賜つた職業を姓氏となしたのである、景行天皇は、柏の葉に珍味を盛つて獻じたる者に、膳臣の姓を賜つた、膳臣は、柏の紋章をつけて奉仕したとの傳說がある。

權意、格式、歷史、所屬等を、容易に知らしむる爲に、旗、指物、船印、馬標等にその記號物たる紋章を定め、次第に美化しつゝ、衣服等に紋章を附する樣になつた。紋章を迚調べると、祖先等が早く分る樣な便宜なものとなつたのである。此の紋章を大別すると四種に分けられる。

國家の紋章
皇室の紋章
團體的の紋章
個人の紋章

國家の紋章とは、その國を現す紋にて、我國は日輪の日ノ丸、露西亞は鷲、暹羅は白象等の如きものである。皇室の御紋章は、十六瓣の白菊の花を用ゐられ、團體的紋章は平家の揚げ羽の蝶、源氏の笹龍膽の如く、集合體の目標、個人の紋章は、その身分家柄に依る各自異れる紋を選びしもので有る。

此の、個人の紋章を、家紋、紋所紋と呼んで、本紋、裏紋の二つの區別が出來た。公式に使用する所謂正紋が本紋、公式でなし非公式の場合に使ふ紋が裏紋で、裏紋は又、添裏紋、替紋とも稱され

ろ。

紋章を注意すると、例へば徳川將軍家の丸葵の如きは、同じ家柄であつても、水戸や紀州家は、葵と輪の接觸に僅かばかりの相違がある様に、細別すると、なか〳〵數多いもので有るが、約三千の數があるのである。

紋章起源の、記錄に見える最初は、藤原時代の末で、西園寺實季が鞆繪紋を、車に用ゐ、德大寺實能が帽額の紋章を、やはり自用車に附けたのが重要な事になつて居る。車に用ゐ、混雜等の場合にも遠方より眺めてもよく分明するので、紋章は大に、重寶がられつゝ、衣服、調度に使用し初められたのであつた。公卿の優しい心は、美しい花卉、草木を好んで、紋章に選び、武士の猛しい氣持は、龍や獅子、武器等を以つて、敵手を威嚇しようとする。

紋章の模様に依つて便宜上、部分の方法を取つて見ると。

- 天文、地文の紋
- 動物の紋
- 植物の紋
- 器具の紋
- 建造物の紋
- 錢、貨量の紋
- 文字の紋
- 形容の紋

になる、天文地文の紋とは、日、月、星、辰、山、水、波、雪、雲、霰等で、日の丸、三ケ月、一文字に三ツ星、九曜、並九曜の紋がある。動物の紋には、鹿、馬、獅子、兎、鷹、鷲、鳩、鶴、雁、烏、鳳凰、龜、蝦、昆蟲類、軟體動物等があつて、獅子に牡丹、鴛鴦の丸、竹に雀、帆立貝、繋ぎ馬、光琳龜、向ううさぎ等が面白い、植物の紋は、藤、橘、牡丹、柊、丁子、葡萄、若荷、薄、瓜、羊齒、松、杉、燕子花が異彩を放つ。菊巴、澤瀉、櫻、梶葉、蔦、いてふ守、ぶじ輪紋等がある。

器具の紋は、非常に數多いものであるが、漁具、農具、馬具、武具、工具、家具、樂器、玩弄品、祝品、運搬もの等が有つて、團扇、鏑矢違、杓車、槌、梯子、獨樂、釘拔、八幡かぶと、丸にかぎ。三つ寄せ笠、かま、つゞみ、蕪菁等が目立つ。

建造物の紋は、神社に關するものにて、堅魚木、千木、瑞籬、二八額、丸瑞垣等がある。井筒等の圖案化である。千木、瑞籬、欄干、鳥居、額。普通家屋では、髮

錢、貨量の紋には、錢のいろ〳〵、法馬、桝等があつて、また、桝にますかけ、重ね桝、三つ積重ね桝、永樂通寶、寛永通寶、裏錢等の紋が出てくる。

文字の紋、文字を幾何學的の形となし、瑞祥的のものがなか〳〵多い、多くは一字を以つて現出した試みで、丸に川、信濃源氏上文字、松平丸利、松平家祭、本の字、角餅戸の字、丸にいの字、丈の字、ことぶき、三山てんじ、林の字の丸、丸に福の角字、三つさの字の丸、巴の角字、堀の角字、橘の角字、中村家イ字菱などが目につく。

形容の紋は、目結、菱、鞆繪、引雨、源氏香、立涌等であつて、藤原時代に行はれたものが多い樣である。その中でも源氏香や源氏紋のきりつぼ、夕がほ、をとめ、あふひ等は、よく人に知られた瀟洒なる紋章であらう。

此の紋章をもう少し分類分して、種々の意義を示す事も無駄な事ではあるまい。

尙美的紋章。凡そ、紋章の非美的ものゝあらう筈はないが、特にその中に於ける美的のものをあげて見ようとすれば、藤原時代の殿上人の附けた衣類の紋章より轉化したものであらう、藤、杜若の如き、花卉木葉章を用ゐたものである。

歷史的紋章。主として武將が己の武威を示し、或は祖先の名聲を大切にする原因に依れるものである。

尙武的紋章。これは、武器を主として用ゐて居る、やはり、武將の强がりを示したもので、花や草木等の優美なるものに迄、武張つた模樣に化し、劍梅鉢、劍桔梗等を作つて居る、藤原時代の優長さと、源平時代の殺氣とを旨く調和して居る。

瑞祥的紋章。戰ひの勝利、一身の長壽、家柄の繁昌の如き、目出度ものので、鶴、龜、壽、崇拜する人の紋章を、好んで使ふ。

宗教的紋章。人間には、信仰の力は偉大である、宗教の爲めに、國と國との爭ひ、宗教の爲めの犧牲、不可思議の力を把持する宗教の印は、信心に固まりぬいた人の禮拜の氣分に依つて附けられる紋章である。神道を崇ぶ人達には、鳥居、玉垣等、佛教の教義に跪く者には、輪寶、羯摩、切支丹と言はれる耶蘇教を讃美する人には、十字架を用ゐ、卜筮、祭祀の道を奉ずる人達には、易の八卦、九字十字の呪符のものがある。

紋章が複雜になつて來ると同時に、我國の對外關係が、いちじるしく密接の度を速めて、天文十八年には、基督教の宣教師フランシスコザビエーが、その教への種を蒔き初めた。九州の豪族大友義鎭宗麟は、彼が二十一歲の時、天文十九年に、自國の豐後府内の城中にザビエーを引見し、教義を

聽聞し、果ては、新宗教の所説に大に感じ、領内に布教する事を許した、此の教に洗禮を受けたのは、初め頃には、身分あるものは殆どなく、下級民が多く、その勢力は甚だ微々たる力であつたが天正五年位には、大友一族にて信奉するものが續々と起り、翌六年六月下旬には、宗麟四十八歳にて信者の一人となり、宗麟の力に依つてザビエーの傳導が、諸國に擴まつて行くのであつた。織田信長が弑せられし天正十年には、信徒の數十五萬を數へ、豐臣秀吉が迫害の火蓋を切つた頃には、その倍數の三十萬人になつて居た。九州、近畿、中國には、マリヤを祈る聲が珍しくなかつた。ことに肥前大村には五萬、豐後に一萬、肥前有馬、鹿兒島、肥前平戸に六萬五千、近畿及び中國に二萬五千といふ數が現れて來たのであつた、民衆的に信仰の人々が增加するばかりでなく、大名の間にも相當な顏振があつた。織田信長時代のみにても、

大村民部大輔純忠　肥前大村城主
三好山城守康長　河内高屋城主
清原大外記頼賢　公卿
内藤飛驒守如安　丹波龜山城主
池田丹後守　河内八尾城主
高山飛驒守　攝津高槻城主
畠山河内守高政　河内高屋城主
五島大和守　肥前五島城主
天草伊豆守種元　肥前天草城主
一條兼定卿　土佐國主
有馬修理大夫義貞　肥前有馬城主
大友義鎭宗麟　豐後府内城主
伊東修理大夫祐兵　日向飫肥城主
有馬修理大夫晴信　肥前有馬城主

等が、祖先傳來の佛教を捨てゝ、異教徒となつてしまつた。此の大名の中に、九州の大名の多きことは、後年、九州諸國が基督教の巢窟の樣になつた導火線と同じである。彼等が、新らしい教義を仰いで洗禮をうけると、嬉んで切支丹名を貰つたのであつた、而して横文字の書判を手習ひしたりするハイカラとなつて、何十代前より、正式の服裝に使用して居た紋章に代つて、十字架をさへつける樣になつた、基督教は切支丹と呼ばれ、或は又クロ宗等と稱される樣になつたので、此の十字架紋をクロ

ス紋と言はれた。

基督教の宣教師は、上流の人々に接し初めると、最初に考へついた事が紋章のことであつた、洗禮を授けると共に、十字架紋をつける可く進めた、此の十字架紋は、クロス紋と言はれる前より、我國の古來の紋帳の中にも有るのである、それは文字の紋に屬する十の字である。ので宗教的紋章、文字の紋としての區別は非常に、後世の私達をして六ケ敷ものとしてくれて居る、が、これを附けた者が切支丹宗信者であるか如何かを調査すれば、十字紋であるか、クロス紋であるかは分類されて來る。

紋帳を繙けば、クロス紋、或はそれに紛らはしきものが數多く有るが、切支丹迫害に依る時代に、正式紋として、或は裏紋として、かく紛らはしき紋章を用ゐ、世に疑惑を殘したか如何であるかはすこぶる疑問としなければならない。

目に見えて正しきクロス紋は四種である、クロス紋はクルス紋とも言はれる。「くるす十字架くるす十字、野々山家十字、堀家十字。

クロス紋より轉じた卽ち切支丹宗門が、禁教令後に用ゐたかと疑はれるものには、

御枚家切竹十字、くるす轡。くるす角轡。能勢家違切竹十字。佐倉堀田家轡蔓。小見川内田轡。伊庭くるこくるす。岡山池田札くるす。中川家くるす。因幡池田家くるす。立花家くるす。立花家祇園守、中村家丸筒守。中村家角筒守。くるす筒守蔓。金子家筒守。山本家四つ石疊。藥師寺家五つ石疊西郷家丸に十文字。劍先まんじ。右まんじ。五つ割左まんじ。弘前津輕家左まんじ。阿波蜂須賀丸にまんじ。丹波家ひきちがひがある。

此の疑問を存し得る紋章中で、弘前津輕家左まんじは、弘前が切支丹に關係深い土地とて、大に注目に價するものである、或人は、西郷家丸に十文字は、鹿兒島の人彌次郎が、日本最初の切支丹傳導師を、連れて來て、領主島津に、切支丹の教義を說き、その布教が公然、領内に行はれた歷史あるに依り、是はクロス紋であると云はれるが、寧此の紋章は、丸に文字紋の十を、一層圖案化したものとして認めるが正しいものと思はれる、中川家くるす紋は、秀吉の臣中川瀨兵衞清秀の代より用ゐ、御札くるすは、高山友祥と親交深き、池田勝人の紋章で、中川清秀の娘は、勝人の妻にあたる血緣上見逃す事の出來ない疑問中の、眞に近づくものである。一說には中川清秀の紋章は、和田惟政と戰ひ、惟政の首を獲てより、其勇名天下に知られ、勝利を記念する爲に、惟政の甲の前立物轡を家紋とせりとも傳へられて居る、それを信じるとせば、切支丹關係の紋と見なす事は困難である、和田惟政は、切支丹徒には何等の接近を持たぬ男であつたから。

伊庭くるこくるす、くるす角轡、御枚家切竹十字、山本家四つ石疊等は、何んぞかくろす紋との因

緣がありさうに考へられるもの丶、斷定的の史料があらない事が殘念でならない、それに又、角立井筒もくるす紋に近い形を示して居る。

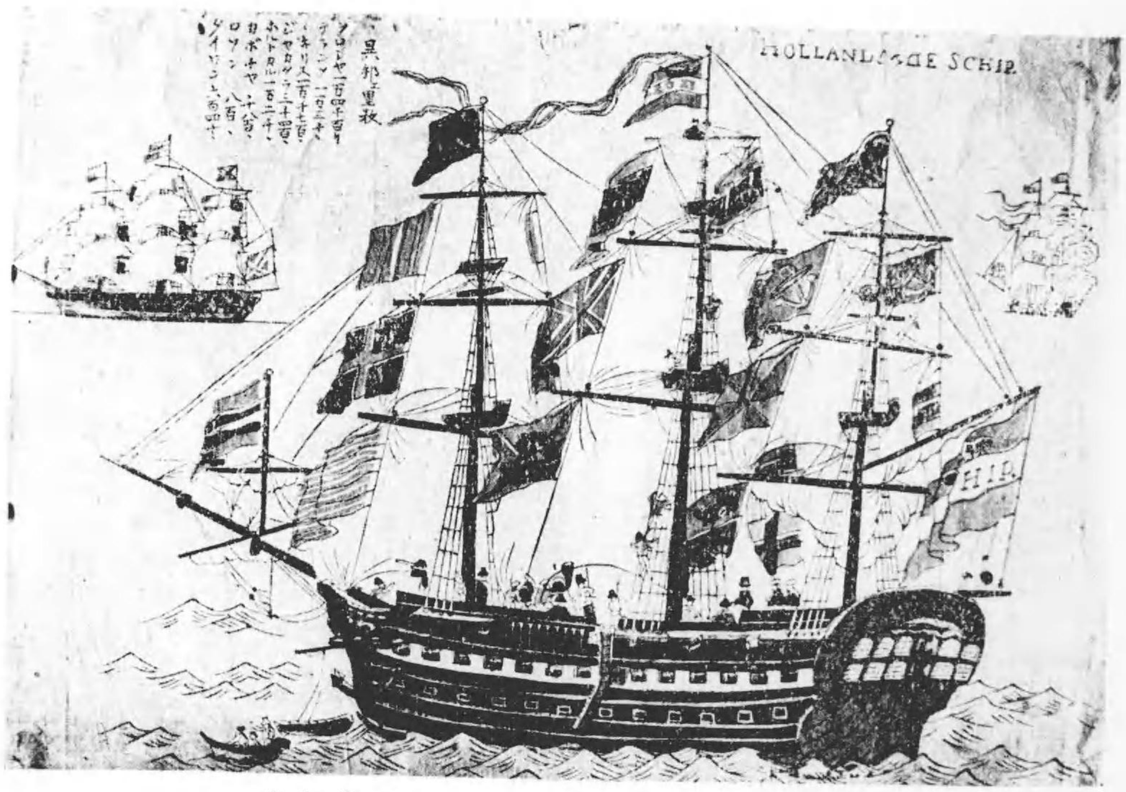
切支丹關係のくるす紋の後には、宗門に依らざる文字の紋の中に、異國禮讃の横文字、ローマ文字の紋が、一つの流行を追つて來る樣になつて來た、おらんだ紋がこれである。おらんだ紋が、何時の頃より、歡迎される事になつたか、その傳來を詳細にしる事を得ないが、文化文政の德川十一代將軍家齊が、學藝の發達に意を用ゐた頃に、蘭學の隆起を見ると共に、裏紋として、異國の地に、憧憬する新人や、蘭學關係の學者等に、使用されたものであらう、文政板の紋帳の中から一々拾つても相當な數になるものであつて、文字の書體は大概一定して居る、中には讀みにくい程のものもあるが、羅馬字くづしである。

りやう lizou。りんだう linlom?。かく kaku。なし nasi。らん(不明)。くるま kuluma。くわ kuwa。くぎぬき kuginuki。まもり mamori。まる malu。ふじ Fuji。いちやう(不明)。いしだゝみ(不明)。ゐづこ(不明)。ほし hosi。はなびし(不明)。ほ ho。ぼたん botan。くいじ heiji。ともく Tomoe。ちやのみ(不明)。ちやうはん(不明)。ちやうし(不明)。ちきり Chikiri。りうご liugo。りんぼう(不明)。おもだか(不明)。わちがい(不明)。かりがね kali。かじ kaji。

かしは kasiwa。かたばみ Katabami。よつめ yotume。たかのは Taka。たちばな Tatibana。つた tuta。つる Tulu。むめ mume。うちは Wutiwa。うるこ Wuleko。くつは kutuwa。やまがた yamahata。や ya。ふせん渡 Fuseni。ふみ Fumi。ふんどう Fandowu。ことじ kotoji。ごとく gotoku。てつせん Tetusem。蝶 Tewu。あふひ afuhi。あさ asa。あふぎ afugi。さくら sakuri。きやうくるま(不明)。きゝやう kikiyawu。きり kili。めやうが meyawga。ひし hisi。ひらき(不明)。もつから(不明)。もみじmomidi。せきちく sekitika。寸はま(不明)。すぎ sugi。

文化十三年十二月板になる、紋帳の中にも、多くのおらんだ紋がある。その中で面白いと思はれるものを少しばかり拔いて置く。

くぎぬき kuginuki。ちやうはん tiyouhun。よつめ yotume。ちやのみ tiya。ごとく gotoku。ことじ kotoji。



長崎版畫　　お ら ん だ 船

（著者所藏）

紅毛人と繪踏

切支丹の廢教と共に、繪踏の式は、紅毛人をして憎惡の念を強め、鎖國の狀態よりも一層惡感を、與へたのである。

歐洲諸國は、東洋諸國の寶物を手に握らんものと、爭ひ渡る中にも、佛國政府は、極東に利權を附殖せんものと思ひその對策中、琉球の地の狀況を調査する爲に、軍艦アルクメヌ Alcméne 號を遣はしたのであつた。弘化元年（千八百四十四年）四月廿八日、支那をへて、那覇港に錨を投じた、船の甲板上には、教皇代理フオルカド Forcade が、異教地に一身を投げ出して布教の爲盡さんものと、固い決心を持つ姿が立つて居た。フオルカドの横には、アウグスチヌ高が、琉球の山や町に見とれて居た。アウグスチヌ高は、支那人であつて、聖教の爲に、二ヶ年の間、廣東の獄屋に苦しんで居たのを、セシル提督が救ひ出して、傳導士の役を受けて渡つて來たのであつた。やがて、將校二三名を從へてボートを漕いで、上陸したフオルカド、アウグスチヌ高等が、役人に向つて交易を願ひ出たが、物品が無いからと素氣無くも謝絶されてしまつた。フオルカド一行が、町中に入ると、小役人が現れて、彼等の歩みを止めたが、平氣に、ドシ〳〵進んで、五月蠅つきまとふ黑山の人々や、官吏に腕を取られながらも、町中を見てまはつた。海岸に出て、ボートの出迎を待つて居ると、波戸場の敷石の上に、墨黑々と十文字を書いたのが眼についた。彼等の一行は、何故に十字架の如きものを此處に記してあるのかと語りあつた。傍に居た小役人に向つて、支那語で尋ねて見ると、如何も十字架であつて、此地に上陸するもの〻誰もが、踏まねばならぬ事を知つて、驚愕したのであつた。日本や琉球に渡海する目的は、基督教の布教の自由、繪踏の廢止を主唱し、撤廢せんとの志を持つて居つたオルカドは、不愉快な印象を強く彫みこまれたのであつた。琉球滯在はフオルカドとアウグスチヌ高の二人が、強硬な艦長の談判に依つて許され、軍艦は浪を蹴つて島を去つた、宣教師達は食料に苦しんだり、役人に苛められたりして年を暮した。フオルカドは十分なる教へを導く事は出來ずして、反つて自身が嚴重なる監視を受けたのであつた。

教皇グレゴリオ Gregorius 十六世は、日本全土及び琉球諸島を一緒にして、教皇代理區を設け、勇敢智謀あるフオルカドを拔擢して、年三十の青年である彼を司教に任じたのである。

阿蘭陀甲比丹ドンクル、キユルシウス Ian Hendrik Douker Cnrtius は、切支丹の教義の自由を說いて、その刑罰、繪踏の惡法の禁止を力說した、其書翰を長崎奉行川村對馬守、目付永井岩之丞、目付淺野一學に差出したが、何等の好結果は得られなかつた。

翌年には、奉行の交代となつたので、直に再び、奉行目付へ宛て〻書翰を贈つた。繪踏の義は、外國尊奉のものを侮蔑し、外國を仇敵と認めるも同然であるから、一日も早く繪踏の廢止をしなけれ

ば、外交上に重大なる葛藤を起すに至るであらうと。

こゝに於て、奉行、目付等は協議を遂げ、幕府に進言し、同年十二月廿九日長崎奉行は、代官町年寄に、來春の繪踏見合を命じ、ドンクル、キュルシウスの言はかくして用ゐられたので有つた。

此の安政の頃には、外國との關係が一層接近して、長崎の地にありては、元年の正月七日には、魯國使節、奉行に謁し、八日入港の三艘の魯艦出港し、十八日には、幕府、蘭人に軍艦及び蒸汽船の建造を依賴する。三月、玉藥を增製、同月廿三日には魯艦三艘再び來港する。七月五日には阿蘭陀商船小蒸汽船を載せ來る、これは幕府より囑するもので代銀六十五貫目であつた、而して港內を回せしめて、船頭役水主に運用法を學ばしめた。閏七月には、碇泊中の唐蘭船に對し、夜中漁舟を出し事を禁じた。同じ十五日には、三艘の英國蒸汽船、一艘の軍艦來る。鍛冶師有吉作太郎、時計師御幡儀右衛門は、蒸汽船の雛形を作つた。八月は英人港外の鼠島に上陸を許可され、普請役佐藤陸三郎等は、蒸汽船機關等の傳習を受くる爲に、江戸より來る。十月、蘭船の輸入したる蒸汽船雛形を肥前侯は借受けた。此年唐船二艘、蘭船一艘の入港があつた。

二年には、蘭船二艘唐船五艘の入津になつて居て、正月廿八日に、唐船一艘漂着して來た。二月西山鄕に硝丘を設け、鼠島を外國人の遊步場に定める、鼠島は神皇島とも言ふ小島で、神功皇后の遺跡地とされて居る、現今は海水浴場として名高い。

三月十八日、佛國は國書を携へた使節を、軍艦に載せて送り來る。四月朔日、英人を西役所に引見した。六月七日には、蘭國の蒸汽軍艦二艘來り、一艘は幕府に獻ずるものであつた。阿蘭陀人ポンペを聘して醫術の傳習を開く、この家が傳習所と呼ばれる。七月になると、小十人組矢田堀景藏、小普請組勝麟太郎、徒士目付永持享次郎等、幕府より吏員を派遣して、蘭人に航海術を學ばせた。蘭船の輸入したる小銃六千挺を江戸に送つた。

八月十四日、兩奉行、兩目付英艦提督副將を西役所に引見す。奉行は二人、目付も二人である。十八日、英佛兩國軍艦入港、廿五日、蘭國獻納の軍艦を受ける。此の船は翌年、觀光丸と命名された、幕府は此の軍艦の御禮として、長刀二、鎧二、太刀三、金屏風十雙、絹高紗染百匹、白銀三百枚、眞綿二百把、銅三萬斤、米三百俵を蘭國に贈り、彼國の宮內官、乘組の船長以下水夫火夫に至る迄、勞を謝して贈物をなした。幕府ドングル仕掛のウエゲエル銃一萬挺を、蘭人に買入を賴んだ。

十月二十二日には、阿蘭陀人に市街散步を許した。

十一月、英船の港內碇泊の許可があつた。十二月には傳習方在勤目付永井岩之丞從五位下に敍し玄蕃頭と改む。平戶小屋鄕に、外國人の休息所を設く。蘭通詞に、各國の語學を學ばしめるやう幕府の

命令あり。

三年二月三日には、東印度邊の船來り、薪水魚菜を與へ翌日出港せしむ、この船は長サ十三間で、女子小兒が乘つて居た。九日、外國船港外の伊王島前に泊し、翌日去る。四月十日、米國小船來り二日後出帆、廿日、小島鄉の奥の山の廣場である合戰場にて砲術の演習を四日間行ふ。六月平戸小屋鄉大鳥崎に、傳習方射的場を開設する。八日幕府の囑に應じ代銀二千五百貫目の蘭蒸汽船來たる。八月五日、英艦四艘來り、七日英人を引見する。九月十日英艦又來る、十八日より切支丹信徒を、續々縛して獄に下す。秋になつて阿蘭陀人の坑山教師來り、地役人（長崎の役人）をして傳習せしめる。十二月蘭人に就いて西洋砲術を習はせ、蘭國製活版を以て、蘭文法書セイタンキシスを印刷せしめた。

四年には、蘭船二艘、唐船四艘の入港で、三月四日は傳習方目付永井玄蕃頭蒸汽船觀光丸に乘り浦賀に航せしめた。五月、傳習方等の手に依つて、去年秋、工を起して、金二千兩を費し、長十五間幅三間半の汽船を作りあげた、瓊浦形とも長崎形とも稱した。

八月、米船に港内碇泊を許し、港内に於て祝砲を發する事を外國船に許可した。英語學生を募集する。

安政元年の奉行は、水野筑後守、荒尾石見守、目付永井岩之丞、二年には奉行荒尾石見守、川村對馬守、目付永井岩之丞、淺野一學、三年は、奉行は變りなく目付に淺野一學、岡野駿河守、四年になると奉行は、荒尾石見守に水野筑後守の復活を見て、目付として木村圖書、松平久之丞が任命された。

江戸にありては、安政元年より四年の間に、米使ペリー再び浦賀に渡來、米と和親條約締結、吉田松陰、佐久間象山の捕縛、日章旗を日本國總船印に決定、英、露、蘭との和親條約なり、蕃書取調所の設置、米國總領事ハリス來る、軍艦教授所の開設、ハリス將軍に謁す等。

江戸、長崎はかく、外國關係は繁雜を加へても、最初の間には、繪踏の法を外人に、我國人同樣の方法を持つて、踏ましたのであつたが、ドンクル、キユルシウスの建議書となつて、それを廢す事をとりついだ奉行の水野筑後守、荒尾石見守、目付岩瀨伊賀守等の功勞は、特記大書して、我國の外交を圓滑に進める爲、その力の偉大であつた事を、我々は讃美せなければならない。

洋妾　明治初年風俗　上野彦馬撮影

（著者所藏）

稲佐と御露西亞

長崎の對岸に、半島となつて突き出でて居る一角に八面山が、高く聳え、夕陽が沈んでからは、螢の火の如く人家の灯が、海深き港内に映り耀く。露西亞の太公を情夫に持つたもの、入墨で眞白の腕に露西亞墓を掘つて横文字を書いたもの、弓なりに曲つた腰をのばして歩く老人の口から露西亞語が流暢に語らるもの〻多い土地が、八面山と仇名される稲佐岳を中心に、凸凹形の町を爲すのが稲佐町である。此處は、古老より子供に至る迄、露西亞とは言はないで、御露西亞と、御の字をつける程、露西亞人に對する恩愛の情が、未だに消えないのである。

日露の役に、旅順總督ステツセルが捕虜として、淋しき日を送つた時にも、稲佐お榮に面會をもとめた程であつた様に、此處の洋妾の中でも、稲佐お榮は、露國の宮中や大官に迄、その艶名を傳へられ、やんごとなき君々と枕を交した事も一度や二度でなかつたのであつた。

此の稲佐は昔は、浦上郷の中に含まれて居た。露西亞の軍艦が來るに從つて、稲佐の地とは親しさが增した。悟眞寺といふ寺院は、おろしや人休息所と定められてあつたが、安政七年申六月にはおろしや人止宿所と改められ、彼杵郡浦上村淵庄屋志賀九郎助へ、奉行所よりおろしや人取締その他雜用として銀四百五十目下渡され、稲佐の地は、おろしや人の爲に自由なる天地となつたのであつた。同年の夏には、軍艦一番船、二番船、三番船の士官が、漁夫や農夫の家に上陸して、宿泊する事を許された、而して、その中の二番船乘組士官ゲリゴラシは、漁師喜市方の一室を借受け、間代として一ケ月五兩を支拂つて、稲佐の人々を驚かせたのであつた、當時の五兩は莫大なものであつて、漁夫農夫には、見た事もない黄金、稲佐の人達は嬉んで、われも〳〵と、おろしや人に、室を提供するのであつた。日本食の咽喉に通らないおろしや人は、賄は別として、間代のみが五兩づつ支拂はれたので、此時分より、御の字をつけて御露西亞と呼ぶやうになつた。彼等は、長途の航海の慰安や、好奇心から、異郷の寂寥を女の歡樂に耽けるのであつた。漁師の女、百姓の娘は、黄金國の神様の様に尊敬して、異國人の肌に觸るゝ事を乞願ふ者が多くなつて來たが、庄屋は、御奉行に國法たる受書を出さなければならなかつた。

三ケ所誓文の事
一切支丹宗門之事
一博奕之事
一隱賣女之事

右三ケ條御沙汰之趣堅く相守當村内に相背き候者一人も無御座候爲後日依而如件

萬延元申年八月二十日

御奉行所

高木作右衛門御代官所
肥前國彼杵郡浦上村淵庄屋
志賀九郎助

肌障りの荒い、嚴乘な體格の所有者たる女達と、露西亞人の戀語りの夢は破れ、國法の嚴しさに嫌氣を出したおろしや人は、上陸しても、何等の慰安なき爲に、艦上にとゞまるものが多くなり、切角の繁昌地として開け行く稲佐の町は、再び寂れるのみであつた。

おろしや人等は、甲板上に立つて、出島屋敷や、唐人屋敷を眺めて、自分等も、丸山遊女に接近したいと唐紅毛人の幸福を羨慕するのみであつた。

これを傳へ知つた、丸山、寄合町の樓主は大會議を開いて、遊女屋油屋とみを筆頭として、御支配盜賊方御役場に出頭し、御奉行所によろしくとりなし方を懇願することゝなつた。

乍恐奉願口上書

一、私共儀先前より唐紅毛人へ遊女賣込み御免被仰附加之近來外國人へも同樣賣込み商業手弘く相成り難有仕合に奉存候猶又今般稲佐郷へ止宿致し居候魯西亞人共よりも遊女差越し候樣其筋より申參り候に附き製鐵所の振合も御座候間差遣はし候樣仕度然る處海上相隔て候場所の儀に附き往返の度々風雨其外にて差掛り渡海差支へ可申も難計右樣の節遊女共取纏め置場所兼て差極め置不申候ては不取締の儀と奉存候間右稲佐郷百姓甚八、伊太郎、和助と申す者方へ申談じ遊女共爲立寄候樣仕り度何卒右の趣御免被成下度此段連印以書附奉願候以上

萬延元申八月

丸山町

油屋　とみ
大坂屋　彌八郎
肥前屋　しま
吉田屋　ます
東屋　みつ
津國屋　清藏
戎屋　喜藤次

寄合町

筑後屋きく
大黒屋友太郎
引田屋かつ
門屋清左衛門
門屋英太郎
門屋富三郎
筑後屋すが
筑後屋安三郎
千歳屋みね
大黒屋龜之助
筑後屋利喜三郎
肥前屋勝藏
松村屋ゆき

盜賊方

御役場御中

遊女賣込商業手弘くといふ、珍しい書出しの願書は、豫て內意もあつた事とて、早刻の許可となり、稻佐は前にも增した大繁昌の日はつゞいて、惜し氣もなく蒔かれる黃金は、無量の愛嬌を湛へる靄の中に、數限りなく落ちるのであつた。

渡來品の積みおろされる荷物船の團平船には、荷物の代りに、賣込遊女が載乘せられて、笑ひさゞめく艶めかしさが、岸に集うて、遊女來を待つ士官水夫の差別なく、我勝にと爭ふおろしや人の混雜は、一通でなかつた。

金釦紐いかめしい士官は、拉し去る遊女の派手なる振袖に腕を通して、仲居を引連れ得々と、己の借切の百姓家に連れこみ、三味線に醉ひたる心地を舞踏したりして、何日も〳〵遊女を引つけ、遊蕩に歡樂の日が足らざる有樣であつた、水兵等は、マタロス休息所にて、遊女を聘し大亂舞の時が展開されたのであつた。

露西亞の艦長は、遊女賣込の繁昌に就いて憂ひの心を抱いたことは、花柳病の傳染であつた、如何しても遊女見改めの方法を適用する事を痛感して、その旨を役所へ申出でた。

長崎奉行所では、遊女見改めの事は、開闢以來の珍事で、由々敷大事件であつたので、奉行所では甲論乙駁の評議となり、結局、遊女屋の意見を聞く事に議決して、その旨を傳へると、遊女屋連中の協議もなか〳〵はかどらなかつたが、遂に見改めを受ける事となり、遊女も一度は反抗して見ても、泣き寢入りより他に方法がなかつた。愈々、見改めを實行する事となつても、長崎の醫者は、如何に醫者の勤めでは有ると言へども、遊女の見改めはと、嫌ふものばかりであつた上に、露西亞の方では日本の醫術を信賴しなかつたから、再び奉行所と協議の上、乘組の軍醫をして、これを行ふ事とした見改めとは、檢黴の事であつて、此の見改めの最初は、慶應二年寅八月五日で、實に日本に於ける檢黴の嚆矢であつた。

おろしや人遊興取締、見改めの方は、日露文にて書記し、マタロス宿泊所及び、遊女控所の遊女置場所に、張り出されたものであつた。

一水兵を上陸遊歩爲致候日は日本政府にて露西亞水夫の爲取建てたる家に於て、多からぬ酒或はビール麥酒を價を出して求め醉はざるまで呑むことを許せり但し他所にて呑む事は嚴に禁ぜり尤も日本人へ對し無禮且つ亂暴なる所業ある輩は嚴重罪科に行ふべし。

一婦人を得ることを欲するものは一分銀一個半を彼の婦に拂ひ與ふべし若し婦を歸艦の期まで揚げ置き度希望あるものは一分銀三個を拂ふことを要す但し病氣を避けんが爲魯ドクトルは婦人を見改むべし依之右家の婦人に限り他所にて婦人を求むる事は水兵共へ嚴に禁ぜり

一病氣は精々穿鑿致すべく恐べき事なれば水夫共の內前文婦人より病氣を傳染するときは右婦人を表すれば直接醫法に行ふ事を肝要とす

諸岡榮之助譯
志賀浦太郎一見

遊女の揚代金は、揚詰一歩銀三個の三歩、一夕の仕切は一歩二朱で、丸山遊女にとつては、此上なき金放のいゝお客であつた。遊女の稻佐行が、遂に稻佐遊廓の元となり、見改めが、明治三年黴毒病院が大德寺の地に創設され英吉利人ニユートンの監督する事となつた源泉であつた。

阿蘭陀冬至

切支丹の宗教は、徳川幕府の世が、榮えると共に、嚴しき掟が定められて行く、輸入品にても、耶蘇に關する神像等は勿論のことで有るが、甚しきは、意味を解する事の困難な横文字の洋書に至つても、阿蘭陀船より、持あがる事を許可されなかつた。出島屋敷に住居する紅毛人には、たゞ一つ切支丹の祭禮をする抜け道が考へられてあつた。

その頃、十善寺内に唐人屋敷が建てられて居て、その唐人等の年中行事として行ふものに、冬至の祭があつた、此の日は、態のいゝ幽居同然たる唐人に取つて、最も愉快なる一日なのである。屋敷に出入をする日傭は、木細工の小綺麗な唐人船を、幾艘も〳〵造り携へては、曉早く屋敷に乘込んで銅鑼を打鳴して、船主、財副を初め役人商人達の各自の部屋を訪うて、お祝として、その唐人船を贈り、唐人船の入津といふ意味の縁起を大に祝福するのである、唐人達は、唐人船の細工ものを持こんだ日傭等に、纏頭を贈つてその勞をねぎらふ習慣となり、此の日一日は唐人屋敷内は饗宴の時に、皆々がさんざめきの聲を放つて、異郷の地にありながら、冬至の祝ひをするのである。

此の唐人の冬至を知つた紅毛人は、阿蘭陀冬至といふものを初めるやうになつた、而して彼等は、冬至前後の木曜日が耶蘇降誕祭に當るので、役人の目を盗んで、耶蘇之像を祭り、此處ばかりの天地には、鋭敏なる幕府の眼が光らずして、開港の時代を迎へる樣になつたのであつた。

出島屋敷に出入する日傭たちは、唐人冬至の如く、四五寸の長さに造つた阿蘭陀船を手に手に携へて、銅鑼を鳴して囃子立つゝ、夜のほの〴〵と開け渡る頃には、出島屋敷門前の橋を勇ましく渡る此の阿蘭陀船行列は、珍しいもの見たさの人達が人垣を作つて居た。

日傭達に祝はれたのを最初として、冬至の祭は賑やかさを加へる。

メールサンの鐘の音が、港の空に靜かに餘韻をひき流す時には、招待を受けた阿蘭陀通詞が饗宴の室にゾロ〴〵と這入つて行く、阿蘭陀人、通詞達が華やかな宴席に、笑ひさゞめく頃、今日を晴れと着飾つた遊女達は、嫣然一笑を以て、主客を惱殺せずにはおかない、黑坊の音樂につれて、胡蝶の如く舞ふ美女、而してその舞姿に見惚れる紅毛人、通詞、その室の華麗典雅なる雰圍氣は、これ一幅の好畫題そのまゝであつたであらう。

サンタクロースの老爺が、遠い〳〵北の國から、深い雪路を、馴鹿の曳く橇に乘つて、愛くるしき子供達に、數多くの贈物を持つて來るクリスマスの日、阿蘭陀冬至の名目の下に非公式では有るが開かれて、宗門改役人にも、何等氣づかはれる事なくして、紅毛人達は、天に向つて切支丹神を禮拜したのであつた。

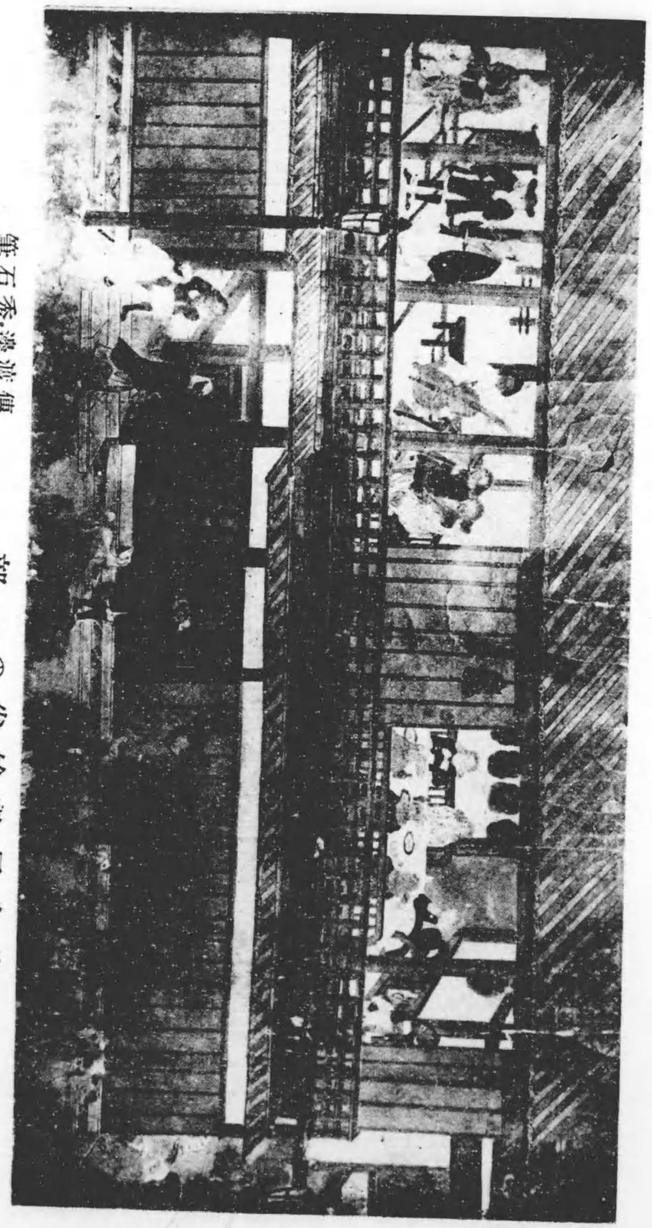
南蠻料理

南蠻料理が我國に最初傳つた事は、自由貿易時代の事であらうが、文祿元年に、豐臣秀吉征韓の軍を起し、肥前名護屋に滯陣した時、長崎の頭人惣代村山安東が、御禮言上に拜顏の榮を得た際、問に應じて長崎古今の事を、響の聲に應ずるが如く答へる安東を面白く思ひ、汝東庵といはずして、安東といふ何ぞとの問に、東安は默して退き、南蠻菓子、南蠻料理を調へ獻上したとの事である。秀吉が南蠻料理や菓子を喰べた事はこれで、知れるが、村山安東は、辯舌爽かであると共に、風流の道にも闇くなかつたが、何人に習つたのか、南蠻料理、南蠻菓子を作るに堪能なるものがあつて、諸人に調法がられたのであつた。

近世で南蠻料理を味ひ得るところは、古い港の長崎にある出島屋敷内だけであつた、此の屋敷には阿蘭陀通詞、丸山遊女達以外の者は、絶對に出入する事が出來なかつた、彼等は南蠻料理の馳走の日を一番樂しみとして指折り待つたのは、紅毛正月の時であつた。

切支丹禁制は嚴重な看視を受けて居たから、耶蘇降誕祭等は絶對に許されなかつたが、出島屋敷には、阿蘭陀冬至といふ名目の下に、唐人の冬至と同じやう祝日としてゞも、誰もが耶蘇祭である事に氣づかなかつた、その阿蘭陀冬至の日が過ぎると間もなく、紅毛正月が迎へられるのであつた。

出島屋敷には、甲比丹である蘭館長を筆頭として、ヘートル、臺所役、藏役、上外料、下外料、



筆石秀、邊渡傳　部一の卷繪敷屋島出

（藏所者著）

上筆者、下筆者、大工、鍛冶、桶屋が住んで居た、咬蹈吧から連れて來た黑坊は下僕として、紅毛人に使はれて居たのである、上外料、下外料といふ役目は醫者の事であつて、今日の外科が下料と言はれて居たのであつた。この紅毛人達は、元日の朝を迎へると、屋敷内から、靜に鐘の音が傳へられるのを合圖に、午餐の大饗宴が開かれる、而してその節には、黑紋服姿の阿蘭陀通詞も招待を受けて大食卓を紅毛人と共に圍んで、椅子に腰をおろした。

食堂は眼も覺めるが如く華麗に飾りたてられ、四壁には、南蠻繪が眩しき金緣に吊るされ、玻璃鏡には、欣びに滿々た人達の容姿を明るく寫す。タ―フルは、色も鮮かな天鵞絨を掛け、大鉢小鉢の陶器、ギヤマン、銀製の器には、名も知らぬ異國風の珍味佳肴が盛られ、水晶の樣な透明さを持つギヤマンのコツプには、茴香酒、珍陀酒、葡萄酒が心よき醉を誘ふ可く注がれる、紅毛渡りの美々しき服裝に身を飾りたてた丸山遊女の黑髮や、白魚の指に迄、珊瑚、琥珀、翡翠、玳瑁、金銀の裝飾品がつけられて、艶美極まりなき彼女達の盛裝にして濃艶なる有樣は、席につらなる人々の魂を奪ひつつ、饗宴の席は春めく、黑坊が手に捧げて運ぶ珍奇なる料理の香は、蘭癖の強い蘭學者達の心を蕩す夜の帳の深く垂れて、ギヤマンの花燈に燈火があか〳〵と耀く頃には、黑坊が得意とする樂音が湧きたち、トロンムル（太鼓）、ヒヨヲル（提琴）、ワルトホールン（曲つた喇叭）、トロンペット（喇叭）、フ

ロイト（笛）等の妙音は、華麗と驕奢な場面に相應い。

時としては遊女の三味線等が、合奏に加はり、黑坊の打つ太鼓に、遊女の舞踊の美的情調を見得るのであつた。

町役人、阿蘭陀通詞達は、南蠻料理の珍重さを、己が家族に頒ち與へ、友人に誇り見せんが爲め、懷中より白紙を取出しては、一品〳〵丁寧に包んで土産としたのである。

此の南蠻料理の代表とでも言ふ可き、紅毛正月馳走の獻立を記して見よう。

大蓋物　味噌汁　鶏かまぼこ、卵、椎茸

鉢　大鉢　潮煮　鯛魚、鯱魚、比目魚

鉢　牛股、油揚

鉢　牛脇股、油揚

鉢　豕油揚

鉢　燒豕

鉢　野猪股、油揚

蓋物　味噌汁　牛

鉢　鷄、木茸、葱

鉢　野鴨全燒

鉢　牛、豕研合せ同く帶腸に結納

鉢　豕の肝を磨りて帶腸に結ぶ

鉢　豕を磨り麥の粉にて包み燒く

鉢　ボートル煮、おらんだ菜

鉢　ボートル煮、萵苣

鉢　ボートル煮、胡蘿蔔

鉢　ボートル煮、蕪根

鉢　豕の臘干

鉢　鮭の臘干

酒　ローイウエイン　アラキ酒　セネーフル

菓子　紙燒カステーラ、タルタスーフ、カネールクウク、丸燒カステーラ

以上は、磯野文齋信春が、弘化四年に長崎土産の中に載せたるものであるが、天明七年に、森島二郎

中良著の紅毛雜話にある紅毛正月料理の獻立をも記して置かう。

冬至より十二日にあたる日を以て、彼國の正月とす。これを「ヤニユワレー」といふ。長崎出島に旅宿の蠻人。譯官をまねきて酒筵をまうく。ことに花麗をつくすとなり。家兄の社友大槻玄澤子云。其日出島の蠻人。棕櫚繩に裁を卷きたる物をもつて、「カピタン」を初め銘々をうちてまはるとぞ。案ずるに吾邦にて用ゐる所の印杖のたぐひなるべし。

料理の獻立

往年玄澤子崎陽に遊學せし時、紅毛の卓袱を食せしとなり。其時の菜帖左に記す。

「パステイソツプ」　鶴のかまぼこ。椎茸せん。氷こんにやく。ふりたて玉子。ねぎすましの如き鹽仕たて也

「コクトヒス」　燒肴

「ハクトヒス」　油揚魚

「ロストルヒス」　濱燒鯛

「フラートハルコ」　猪の股丸燒

「カルマナトチイ」　猪の薄身。鹽こせう搨こみやき

「コテレツト」　鷄。胡椒。肉豆蔻の花。葱。よくたゝきて紅毛紙に包みやき。

「ヲーグー」　鶴たゝき丸めて。しひたけ。ねぎ。すましあんばい。

「ゲールウヲルトル」　にんじん。油にて揚醬油にて煮しめ。

「スペナトン」　茶。みじんにたゝき「ボートル」乳酪にてさつと揚て皿にもり。玉子。四ツわりにしてもりあはせ。

「ブラートルボツタ」　野羊の股丸やき。

「モハルトベースト」　鹿の股丸にやきしてからし酢かけ。

「ブラートルエントホーゲル」鴨丸煮。

「ケレヒトソツプ」　海老がね（伊勢海老の事）

菓子

「カステイラブロード」　花かすていら。紙燒かすていら。紅毛紙を箱下折かすてらのこ手をつぎ燒なべの中へならべて燒たるなり。

「スペレツ」　玉子。小麥粉。水にてねりまぜ引のばして繩のごとく捻り油にて揚たるくわしなり。

「ポトフルチス」　菓子の名。
「タルタ」　同。
「ヲベリイ」　花の形に拵へたるかすていらなり大さかぶとの鉢ほどあり。
「スートアップル」　蜜柑。

長崎見聞錄には、簡單なる菓子の說明とその繪圖を示す。

阿蘭陀菓子

紅毛人慰に製する菓子なり、麵粉にて造る。裏のあんには、梅肉にさたうを調和し。入たるものにて、其外よりは、ぶたの油などにてあげたり。惡臭ありて、此地の人の口には、合ひがたきもの也。

蘭說辨惑は、大槻磐水先生の口授を、その門人福知山醫官であつた有馬元晁文仲が筆記したもので、磐水は、元晁の問に答へたものである。

葡萄酒

問て曰酒に葡萄酒、阿刺吉、珍陀などいろ〳〵ありと聞ゆ製法いかなる者にや

答て曰和蘭の酒は皆諸國より買出し來たる物多し皆葡萄を以て釀したる者なり製法に因りて色々の名あり酒の事を「うゑいん」といふ是れは葡萄を「うゑいんがあるど」といふを下略して稱したる名なり夫故皆いづれも葡萄酒にて其製に因て名を異にするのみ彼國酒の種品甚夥しとなり葡萄酒阿刺吉、珍陀など別物にあらず製法にて名を異にすと又別に「びいる」とて麥にて造りたる酒あり食後に用ゐる物にて飲食の消化を助くる者といふ、米にて製したる酒は絕えてなきとぞ。

はあか

問て曰く和蘭細工の小刀此方にて「はあか」といふ本名なりや

答て曰「はあか」とは鈎の事なり世に云ふ「はあか」は「きにいぷ、めす」といふ「きにいぷ」は櫃機の事「めす」は刀の事なり

その他、食卓に使用する器具は挿繪を入れて、說明を附して居る。「ぼかある」「ごるげれすて」「わんせうゑいん、がらす」「うゑいん、わふとる、がらす」「そをひい、がらす」「びいる、がらす」「けるきい」「ふれす」「ろんで、ぼつとる」「らんが、ぼつとる」「うゑしげ、もんど」「うわーとる、がん」「そうとぱつと」「きみいぷ、めす」等には相當面白い事が書かれてある。

食盤の具として「きいぺる」「めす」「ぼるこ」がある、

「きいぺる」食匙なり銀製鐵錫等にて造るあつもの造る汁氣のものをくむなり

「めす」庖刀なり丸たきの肉類をきり食ふ

「ひほこ」物をこの器にてさし食ふ俗に肉さしといふなり

此三具の外箸等なし卓袱道具皆硝子にて作るもの

ぱん

問て曰おらんだ人常食に「ぱん」といふものを食するよし何を以て作れるものにてや

答て曰これは小麥の粉に醴を入れ練合せ蒸燒にしたるものなり朝夕の食料これなり

問て曰く飯は絶えて用ゐざるや

飯も食すれども是れは至てわづかばかりなり此方の一椀にも至らぬ程なり多くは天竺米を用ゐるよし飯の事を「げこふくと、れいす」といふ煮たる米と云ふ事なり「ぱん」といふは何國の詞かいまだ詳かならず和蘭にては「ぶろふと」といふ和蘭隣國拂郎察といふ國にて「ぱいん」といふよし此語の轉ぜるか

西川正休編輯の長崎夜話草の中には、附錄長崎土産物として

南蠻菓子色々。ハルテ、ケジヤアド、カステラボウル、花ボウル、コンペイト、アルヘル、カルメル、ヲベリヤス、パアスリ、ヒリヨウス、ヲブダウス、タマゴソウメン、ビスコウト、パン此他猶有べし

ぱんは、紅毛人の食事に缺ぐ可からざるもので、我々の米と同じで、この言葉は葡萄牙語の pao で、

西班牙語では pan である。

テンプラは、南蠻料理より得たるものと思ふ、語源は詳でない。

カステラは、現今長崎名物の第一となつて居る菓子である事は誰もが知るところであるが、私が先年、大津の街を歩いて居たら、古い家の菓子鋪に不老不死仙菓の看板が掲げられて居たので、好奇心の下に、その家に立寄つて見ると、それは其家の祖先が、長崎の地に蘭學の修業に行つて歸つてから傳へた菓子で、カステラであつた。

出島屋敷内にて、南蠻料理の馳走を知つた私達は又、幕末には、丸山の遊女屋大壽樓が遊女の張店に、天鵞絨の洋裝を着飾らせ、遊客には、南蠻料理たる西洋食を出し、西洋料理を喰はんとする者は誰もが此樓に登らなければならなかつたとも忘れてはならない。丸山の廓を見下す西小島の高臺には福屋藤七が福屋といふ西洋料理を開祖として業としたのであつた。

南蠻料理を紅毛人と共に味つた遊女達が、異國人の抱擁をうけ、異國人と握手を交へ、異國人と口付である接吻をした事をもつけ加へて置き度い。

南蠻料理饗宴之圖は、川原慶賀、神代彦之進、磯野文齋等の畫筆の跡が殘つて居るが、六無齋林子平が、出島屋敷の阿蘭陀人アヽレントウエルレ、ヘート等と親交があつて、招かれて馳走になつたの

を描き、自畫自刻として、歸鄉の後、親戚知己に頒つたと傳へられる、長崎板畫の繪は、實に面白きものである。空席の椅子は、林子平が坐して居たのであつて、彼がその宴會を圖する爲に無く、圖の上部につゞる横文字は何の意味なるやと、或友人の問はるゝことある時には、敢て之れを蘭字なりと謂はず、只單に、西洋唐草を模様したるなりと答へたりとも言はれて居る。

阿蘭陀通詞今村金兵衞が、蜀山人に口傳した、菓子製造等を見ると、

阿蘭陀菓子拵方

一スシスブロウド　小判形

鷄卵、小麥粉、豚肉、粒胡椒、肉豆蔻花丁字

右を豚の大腸に入れ鹽を入れ煎なり、總じて胡麻油にて燒

一スウス　丸形

鷄卵　小粉麥

右を胡麻油にて燒

一スペレツ　長形

右同樣但竹の筒に入る胡麻油に落し燒なり

長崎の工藝

○毛氈

毛織物の術は、早く傳つて製造せられて居た。百濟王聖明毳氈一頭を、欽明天皇の十五年に奉獻したのが、獸毛を以つて衣服に使用する事の便を知つた最初であつて、其後氈を作り、取わけ、下野にて製するものは、上等品であつた。その術は、羚羊の毛を絲に紡ぎ交ぜて織る事であつた、出來あがつて密なるを衣服に用ゐ、粗なるものを敷氈とした、敷氈を計牟志呂と稱した、文武天皇の頃には、兎の毛を使つて、兎褐を防寒具として製法し初めた。その後、出羽秋田地方にて、兎毛や柔毛を雜ぜて、兎褐に似た織物を作つた。

文化元年には、長崎奉行成瀨因幡守が、支那より毛氈職二人と、綿羊類を渡來せしめ、浦上村に飼つて、製氈業を傳習させたけれども、羊が盡く病死したので、切角の製氈も駄目となつてしまつた。

○花毛氈

花卉羽毛などを織入れた、華美を極めたもので、珍重せられた花毛氈は、モウル人が渡來した時にその製法を傳へ、大小長短のものが出來たのであつた。

○造花

唐人が傳へたもので、主として蠟花が流行した。生花に比べて見ても、一寸も、變りない程、技術の巧を極めたものである。

○染唐紙

長崎の文人墨客が、墨黑々揮毫した中に、染唐紙がある、水色、桃色、鼠色の薄いものから、赤、青、黃の强い色のものもあつて、唐人に習つたものであつた。

○線香

線香は、佛敎の上に必用なるものであるが、香木の代りにも用ゐられて、いゝ臭ひを嗅ぐ爲めに愛せられる。これも唐人が傳へたもので、線香屋も非常に多くなつて來た、盆祭の時には、唐人が大きな籠に入れたものを擔つて、賣り歩いて居る。鄭成功の親友である五島一官の子清川某は、線香を製造する上手な人であつた。

○花手拭

唐人や南蠻人が敎へたものに、花手拭がある。多く金巾木綿に、花鳥唐草の繪を染め出し、その染め方の巧妙と、剝落しない點が、世人に認められた、後には、手拭ばかりでなく、派手を好む者の着物ともなつて、一時の流行を見たのであつた。

○花筵

花筵は、暹羅人、咬吧暹人の傳へたものと言れる。海外貿易の盛んな時には、南蠻諸國の名産である此筵は、よく輸入されて居た。元祿模樣、唐草模樣、或は棒縞、花鳥の圖案が面白い、價格も割合に安かつたので、歡迎されたのである。長さ大きさにはいろ〳〵あつて、相當な長きもの、大きなものが作られた。

○皿紗

皿紗は、南蠻人、天竺人、黑坊が本場得意のものであるだけ、早くより傳へてくれた。更紗には多くの種類があつて、書皿紗、金皿紗、染形皿紗等がある、書皿紗は布の上に繪畫を描くもので、その精巧なるものには、唐人船の應接室に、壁畫の代用としたものがある、繪皿紗といふものは書皿紗の中で一寸も形を印してないものである。多くの書皿紗は、初め墨色の形を印してから、泥繪具のやうなもので、色彩をほどこす。

金皿紗は美しく作られた皿紗繪模樣の中に、金色を以つて描きあげられるもので、非常に贅澤なものとして高價であり、且つ得がたき逸物である。染形皿紗は、普通よく見受けるもので、型をかき色を染めたものである。上野俊之丞は、中島に住居して居て、中島皿紗といふものを作つた、中島皿紗の特色は、布地惡く、繪模樣の中央と四隅には、必ず時計を描いて居た、これは時計師の家柄だけあつて、時計の宣傳にしたのではあるまいかと思はれる。俊之丞の子に、寫眞の中興の祖として有名なる上野彦馬があつた。

皿紗は後年更紗の文字に書改められた。

天草島には、天草更紗が製造された、これは京都の人が天草に住むやうになつてから、作られた最も色彩の澁い、模樣の善いものである。

○時計

長崎の時計師には名手が多かつた、幸野、上野、御幡は、祖先代々の時計細工を以つて扶持を貰ひその技術の進歩せるには、阿蘭陀人も驚いた程であつた、將軍家獻上の名譽を得た人達も多かつた。

時計には、多くの種類がある、南蠻人より傳習したのみに滿足せずして、非常なる苦心の結果は、印籠時計、矢立時計、根付時計、枕時計、袂時計、尺時計等を作つたばかりでなく、時計臺に地球儀を置いて、その廻轉に依つて萬國の晝夜を知るもの、人形が出入りして時を報ずるもの、時が來るとヲルゴルが鳴り出したりするものが完成された。

時計は、土圭、土景、斗景、自鳴鐘等と、時代によつて文字の區別があつた。

時計師御幡儀右衛門は、阿蘭陀船の見物を許された、船上に時計のあるのを見て驚き、歸宅してよ

り數日間、木材を以つて小さく削りつゝ、木製にて、器械を作りあげた位の手腕を持つて居た。尙彼は、鈴打の時計を作つた時には、仕事場に七五三繩を張り、身を淸め、懸命の魂を鈴に打ち込んで居たのであつた。

○唐風竹細工

竹材を以つて、唐風の細工に模すものがあつた。書棚、机、卓、茶棚、煙草盆、籠等は、名人八郎平の細工が名高いものになつて居る。

○硯

唐人屋敷の唐硯から、唐風硯が細工せられ初めた、高濱村に產する靑雲石、壹岐の黑石等は、光澤があつて色の美が、硯の愛好者間に有名となつた、彫刻の刀法の巧みなことは、唐の硯に負けなかつた。黑川正英は、此道の名手である。

○羊角細工

獸の角は、多く藥品として輸入せられ、羊角は、細工物にも使用された。角を薄くするには煎つて削つた、燭臺、燈籠、櫛に用ゐられる、ことに燭臺、燈籠には風袰とすれば、火影が明るくなるので好まれた。

○唐木細工

唐木細工には名工が多く居て、鐵刀木、華櫚木、紫檀、黑檀その他の唐物を用ゐて、茶棚、机、書棚、テーブル、椅子、花臺等に作られた。後には、唐木曆が、染色を施して流行し初めた。

○ぎやまん細工

硝子を彫鐫するもので、九州では、長崎、鹿兒島、佐賀の地にて、南蠻傳來のものとして、その製法に巧みであつた。初め頃には切の深いもので、硝子が厚かつた、多くビードロ額、コップ、水入、茶碗、櫛、笄、燭臺、菓子鉢の類に作られ、色は紫、桃、靑、綠、赤、黃等好みのものが自由に扱はれ、花卉鳥類山水人物等の繪模樣が多かつた。蘭學者の吉雄耕牛はぎやまん風呂を持つて居たとも言はれる。

ぎやまんの製法は、遠く天龜元年、大村理專、長崎に市場を開いた時、南蠻人の玉工が來て、硝子を作り、且その法を傳へた。寬永年間には、支那の工人が來て、支那風の製法を敎へたので、南蠻法支那法の二樣と共に、二法を併用した法も起つた。その後、京都、大阪、江戸にて、硝子玉が作られたのである。玩具としては、ポロン〳〵と言ふものが、八坂神社の祭りの夜店で賣つて居た、これはパイプ形のものゝ、管を吹くと、ポロン〳〵と音がした、靑色、紫色が多かつた。

○玉細工

唐、南蠻人に傳へられた玉細工の法は、非常なる進歩を遂げて、作り珊瑚珠等には見事なものがあつた、硝子玉、瑠璃玉、碧瑠璃玉、がんぎ玉、とんぼう玉、筋玉、卯花玉、絲屑玉、金水精玉、七寶玉があつた。

安藏、市九郎はその玉作りとして知られた。

○長崎針

支那の南京は針の名産地である、これを學んだものが長崎針になつたのであつた。

○唐紅毛船細工

唐人の冬至、阿蘭陀人の冬至には、人足達が、その日を祝つて唐人には唐船、阿蘭陀人には阿蘭陀船を小さく作つて持つて行つたのである。これと同時に、唐、紅毛船の模型が美しく造られて賞れた、蘭癖家の床飾や、子供が池などに浮べるものとなつた。

○珠數

數珠功德經、佛告二曼珠室利法王子一曰、數珠之體種々不同

珠數の種類が、多く支那から傳つて、色々なものが作られた。

欠

○そろばん

唐土風のものが銅座跡や、櫻町でつくられて居た、唐人の手ではじく大形の算盤が、だん〳〵日本獨得のものに變化して行つた。

○薔薇油

李東璧曰、蕃國有薔薇、露甚芬香云、是花上露水、未レ知二是非一、又薔薇條下白、南蕃有薔薇露云、是此花之露水香馥異常、

薔薇油は、外療に用ゐて功效が多いので、紅毛人が常に長崎に持參して居た、さるあるものにやあかとを少許入れておけば、薔薇油は、數千年を經ても惡くならないと言はれた。蓄ふるには、フラスコに納めて、口にキヨルコをあて、紙にて封じておく。

薔薇油の佳快なる芳香は、丸山遊女の愛翫に初まつた、出島屋敷内には、薔薇が藥草園に誇り咲き浦上の切支丹墓には、人知れず何時しか植ゑられて香りを放つて咲いて居る。

○のぞきからくり

諏訪の祭禮、八坂神社の祭典等には、のぞきからくりが客の足を留めた。

描きたる繪を、遠くにはなして、暗箱のやうになつて居る繪の前面より、レンズを通して見るもの

欠

で、紅毛人の傳ふるところとなり、戰爭、宗教傳記、風景風俗等を、浮かびたる眞景の樣に見得るもので、理學的玩弄物の一つである。ボンボコポンとも言はれた繪の說明をするのに、歌をうたひ、竹をたゝいて拍子を取り、時々、中の繪を取かへて見せるもので、油繪風のものや、押繪などもあつた。西洋風景のものは、一番、人だかりがして居た。

文化頃の繪師西苦樂は、のぞきからくりを微細に寫生したものを殘して居る。

○外科道具

蘭醫が住居して居た地であるだけ、長崎には、蘭法を傳習せんとするものが多く集つて居た。醫術の進步せる町には、外科道具が作られた。阿蘭人の指圖に依つて製せられる人の間には、名人があつた、廣瀨、猪俣は、もつとも知られたのであつた。

阿蘭陀人より南蠻鐵の鍛へ方、外料道具の製作秘法を受けて、種々の利用を鍛錬した廣瀨九左衞門藤原泰心が、その法の溢觴と知られたのは寛永の年であつた、奥儀は、門人にさへ知らしめずして、子孫に傳へ、本業とした。廣瀨流の名作は、天下に喧傳され、享和三癸亥歲には、僞作多く製せられたので、官に訴へ眞僞の御糺を乞うて、廣瀨の極印は、一〇八であつた、極印にまぎれやすい印を打事を、官の命に依つて停止されたほど保護を得た。享和後には、廣瀨九左衞門藤原常信の代となつて、出來鍛冶屋町東側寺町門口より三軒目に、門戸を張つて繁昌をつゞけた。司馬江漢が長崎滯在中、猪俣を尋ね行き、細工道具トウ砥車など皆おらんだ風にて、日本の鍛冶の樣になしと、思つた事を、西遊日記に記して居る。

蘭醫シーボルトの滯留時代には、醫術も、外科道具も驚く可き進み方であつた。廣瀨流の製作は南蠻流、猪俣流のは紅毛流の流れと言はれて居る。

○女利安

めりやすは西班牙語 merias 葡萄牙語 meias で、我國では、女利安、田易、單皮手覆等と書いて居る。

めりやすの用は、初め手覆に織りたるものであつたが、後には、股引、くつ下等を作つた。

手覆は、武家の間に流行し、手覆の他に、大小刀の柄袋にも使ふやうになつて、一時は武家にのみ專ら行はれた。

嬉遊笑覽に

メリヤス、手覆を木綿にて袋に織たる物をメリヤスといふ、これは和蘭陀人足にはくものをメリヤスと云ふ、半股引のやうなるをブロツクと云ひ今は和蘭もイギリス風を學びて、メリヤスの上に尋

常のもゝ引のやうに長きをきる、メリヤスと云ふはホルトガルの詞、和蘭にはコースといふ。

長崎にては、紅毛人が長崎女に教へた時には、色ものが望み次第に美しく作られた。

婀娜な丸山遊女の肌には、めりやすが、つけられた、めりやすのしやつを着た最初は、此の遊女達であつたのである。

長崎の古老は、めりやすといふよりも、メイヤスと言ふ人が、今日でも多い。

めりやすを句によんだものが、非常に澤山ある。

唐人の古里寒しめりやす足袋

メリヤスをはいて蛤蜊踏れたり

はき心よきメリヤスの足袋

メリヤスをはめるとつかむ眞似をする

たくしとむ茶屋メリヤスの袋町

めりやすはいれど足袋屋はいらぬ所

○眼鏡

後奈良天皇の御時、天竺の人、周防山口の國主大内義隆に獻上したので、眼鏡、望遠鏡を手に取つた國主、家臣等は、物體の明瞭に映じ、且つ遠くのものゝ微細なるをもよく覗き得る事に驚歎の眼を見張つたのが、我國への傳來の初めであつた。

長崎の人、濱田彌兵衛は、南蠻に渡海して、眼鏡を作る法を學び、生島藤七にその法を傳へたとの一說もあるが、彌兵衛より餘程前に、眼鏡は作られて居たものと考へられる。濱田彌兵衛は、臺灣に於て、末次平藏の貿易船等が、阿蘭陀人の爲に不利に落入り、海賊的行爲のあつた事を怒り、臺灣にて、阿蘭陀人を屈服せしめた勇敢怪力の者で、寛永時代の人である。

その頃は、支那より玉工が來て居て、眼鏡を作る法をも、共に傳へて居たのであつた。

支那風と南蠻風の眼鏡が、長崎で出來て居た。

鼻眼鏡、數眼鏡、蟲眼鏡、磯眼鏡、透間眼鏡、近視眼鏡、天眼鏡、五色眼鏡、八稜眼鏡等が作られた。此外にドンク眼鏡もあつた、支那人は、眼鏡二つに折てたゝむ形、蛙に似てゐるので、その名があつた、蛙の事をドンクと言ふから。

百川學海云、靉靆出二西域滿利國一、如二大錢一、色如二雲母一、老人目力昏倦、不レ辨二細書一、以レ此掩レ目、精神不レ散、筆畫倍明、按靉靆眼鏡也、用二水精切片一、以二金剛屑一、磨琢造レ之、隨二老壯一有レ異、如二老眼一爲二微凸一、如二壯眼一表裏正直、如二中老一表正直、裏微窪、但老人以二壯眼鏡一視、則遠物鮮明、而近物

不レ明。近眼鏡、表微凹、裏微凸、

とは、和漢三才圖會の說明である。眼鏡を持ちたる繪畫は、川原慶賀の南蠻風になるものに巧みなものがある、六人の異なる紅毛人が、鼻眼鏡、老眼鏡、近眼鏡、天眼鏡を各々手に握つて、一枚の小形の鏡を見詰めてる圖は、顏面表情と共に、色彩の上にも、天才振を現して居る。

○天文道具

古くから天體を研究する學問は、陰陽道と呼んで傳へられて居た。加茂保憲は、安倍晴明に、天文道を授け、曆道をその子光榮に讓つた。天文學は時代と共に多數の學者を出した、長崎にては、南蠻紅毛人に依り、幾多の天文學者を產した、その中でも西川如見は、西文曆學に精通し、德川吉宗に招かれた。吉宗は、年若き頃より、天文曆算の術に心を傾け、將軍職をつぐと共に、建部彥次郎を召し曆學を親しく問ひ、工加藤某を紀州より呼び寄せ、大渾天儀を製せしめた。享保三年自側午儀を吹上上苑中に設置した。西川如見は、自己の著書を獻じ、三年貞享曆の差違あるに氣付、如見の子忠次郎に、補曆の事を勵ましたのであつた。

日尺、星尺、圓規、日晷、渾天儀、星圖、地球圖の正確なるものが早くより、長崎の地に行はれて居たが、何人がそれらを細工したか不明である事は遺憾にたへない事である。

○青貝細工

腰間に印籠を佩ぶることを好んだのは、慶長年間であつた、その印籠の多くは漆塗りであつて、蒔繪をほどこすか、或は螺鈿を嵌めて美觀とした。元和年間には、生島藤七が螺鈿を嵌裝するに名手として、その名が高まつて居た。弟子の野澤久右衞門も、長兵衞といふ者も、技術の妙手として知られ長兵衞を指して人々は、青貝長兵衞とさへ言つたほどであつた。

螺鈿をするには、鸚鵡螺、青螺を以つて嵌入した。長兵衞は支那人に師事して、益々技を練つたのである。此の長兵衞が青貝長兵衞と綽名されてから、螺鈿細工を青貝細工と稱す事になつて、江戸、大阪、長崎の工人は、その業を後世に迄傳へたのであつた。今は大德寺の本堂すら無いのであるが、大德寺內には、螺鈿堂があつて、廻廊を昇つて、佛像を拜んだ。その螺鈿堂の青貝は、美色燦然と放つて居たと傳へられる。

○堆朱

支那の堆朱を摸造せしに初まる。後土御門天皇の御時、漆工門入が最初の摸造を作つた。朱漆、黑漆を厚く塗り、花鳥山水を圖に彫刻した。唐草模樣は多く行はれて居た。慶長の年には、堆朱平十郎が巧者として現れ、萬治元年には堆朱楊成が堆朱器に妙手であつた。長崎にては、藤七、勘七の作が

知られ、黒川正英は近世の名人として、その作品に見事なものがあつた。

○塗物

屈輪、沈金、色時繪等の如き塗物類は、唐人に傳習して、多く行はれた。

○鑄物

切支丹禁止の時には、藤原祐佐が、名人としての名が世間に知れて居た。祐佐は本古川町の住人で寛文九年、長崎奉行は、彼に踏繪を作る事を命じた。祐佐はじき父の記念である南蠻製柱掛の基督像を手本として、製作に餘念がなかつた、彼の作物は秀でたものであるから、定めし莫大なる恩賞があるであらうと、世上の噂は高かつた。官は、彼の名作が、反つて切支丹宗門の者をして、信仰を增す事と、切支丹の爲に將來、邪教の神像を賴まれることを恐れたあまり、無慘にも祐佐は賞の代りに斬罪にされてしまつた、彼の製作した二十枚の鑄物の大部分は、帝室博物館に藏されて居るが、私は先年長崎市外の古賀村の埋沒した地中に寺の柱があつて、その柱の中に隱し入れられて居たのを偶然手に入れた。それは、銅牌の長さ三寸一分五厘、幅二寸二分、厚一分五厘で、耶蘇が刑冠を頭に戴き、兩手を前に縛され、葦の笏を握つて居る圖である。

世に、萩原祐佐と言はれて居るのは、藤原の間違である。祐佐の他にも、多くの南蠻鑄物師が住んで居た。祐佐の父は、南蠻に渡つた時、鑄物術を習ひ、その子祐佐に傳へたのであつた。

司馬江漢は、蘭學者吉雄耕牛の家に宿つて居る時、

幸作悖定之助定五郎來ル亦細工場ト云ふ處あり見物す土間ニしてろくに攪キ鍛冶道具其餘奇妙なる形チの物數々あり幸作細工ハせねと好事に色々あつめたる者なり

耕牛は、阿蘭陀大通詞であつたゞけ、いろ／＼の西洋器具を集めるに便利であつた、幸作とは耕牛の事である。

唐風の鑄物は、多く唐金鑄物で、道助といふ者が、支那に渡つて習ひおぼえて來たのを、最初として擴まつた。花入、香爐、飾物が主として作られ、鑄工周悅の女と言はれるかめ女の作は、彼女の磊落なる行爲と共に有名であるやうに、名作家であつた。

○錫細工

錫細工には南蠻、唐の二流がある。

細工師勘次の祖は、蠻國に渡海して、その法を會得し歸り、子孫に傳へ、勘次の代になつて愈々、巧妙なる錫が製せられた。

唐僧木庵は、象嵌、目貫、小柄、錫の術を蘭溪若芝によく敎へ、若芝は子に傳へ、子は又子に相傳

した、蘭溪若芝、若芝喜左衛門、若芝長右衛門、若芝理十郎等の作は、世に嘆賞を受けたほど、代々の名工で現れた。

○錫細工

元祿二年、唐人の錫細工が、見事なものを作つて居たが、後ち清左衛門は唐人に請うて、細工を知り、錫器に眞鍮の象嵌を入れる事をよくした。

○寫眞

千八百四年、我が國の文化元年、露西亞の使節アレキサンダー、レサノフが、崎陽（長崎）を訪づれた時に、座乘の軍艦より、港内の風景を撮影したものが、今日の寫眞術であつた。弘化前の天保の頃には、その器械が輸入されたとも傳へられる、畫人石崎融思は、異國人に、繪鏡の法を傳習受け、風景寫生に、それを用ゐて大に便利を得た。繪鏡の法が、今日の寫眞術である。しかしその頃の寫眞術なるものは、不備な點が多いのと、器械が高い上、なか〳〵手に入ることが六ケ敷かつた。寫眞術はいろ〳〵の變化改革がともなひ、ダケロタイプが我が國に這入つて來たのは、嘉永安政時代で蘭學者の間に、漸く注意を惹く位になつて來た。が蘭學者では、割合此術に熱心な人が多くなかつた。佐久間象山は自己の像や家族の像を寫し、川本幸民は暗箱を作り、平賀源内は、田沼侯の爲にドンクルカームル（寫眞暗箱）を取寄せた位で、術の發達の上に大した努力の跡は無い。

長崎の人上野俊之丞は、天保の時に、此法を親しく阿蘭陀人に就いて稽古し、彼の化學知識は種々な侵入の物質文明の上に、擴まつて居た。薩摩の島津齋彬は、寫眞器購入を、俊之丞に依賴したり、彼を招聘して、術に熱心なるものがあつた。

安政三年になると、阿蘭陀の貴族ポンペ、フアン、メールデルフオールが來舶して居たので、海軍傳習生として、長崎遊學を命じられたる津藩の堀江鉞次郎は、ポンペに就いて寫眞術を學んだ時、俊之丞の一子上野彦馬も學んで居た。後佛蘭西人ロシエが渡來して、二人とも指授を得大に悟る所があつた。ポンペは有名なる蘭醫であつた。

萬延から文久にかけては、寫眞術の研究は進歩の跡を見せ、器械等にも改良されたものが來て、横濱では、下岡蓮杖が米國婦人ラウダに就いて勵み、清水東谷も技術の妙を占して居た。

上野彦馬の撮影所は、中島川に面する地に建られ、龜屋德次郎は、出島屋敷に出入して居る内、術を學び、蘭學者吉雄圭齋や、江戸より醫學の研究に來て居た松本良順等も、寫眞術を學ぶ事は、有意義なるものとして造詣深くなり、彦馬の門には、内田九一の如き鬼才を出し、諸國より入門を請ふ者日に月に增加するのであつた。彦馬は大勢の兄弟があつたが、彼の弟幸馬は、彦馬より技術に於て

巧みであつたが、後宮内省の御時計師として晩年を送つた。彦馬の著書舍密局必携は、文久二年に蘭説辨惑には

寫眞鏡

問曰く箱の内に硝子の鏡を仕懸け山水人物をうつし畫ける器この方にて寫眞鏡と呼べる者あり本蠻製のよし何と云ふものにや

答曰これは「どんくる、かあむるといふ器なり此方好事家も往々擬製する者あり甚工夫したる器なり實に寫眞鏡の名其所を得たりと云ふ可し黄履莊が臨畫鏡は此物なるべし

とある。此の寫眞器は上野俊之丞の如きは手製のものを作つた。文久年間に幕府は、歐洲に兩都兩港開港延期交渉の爲、竹内下野守、松平石見守、京極能登守等を使節として派遣するや、通辯として福地源一郎、太田源三郎の長崎人が彼等に隨行し、ベルリンに於て肖像を寫して携へ歸つた、これが我國人の最初に於ける寫眞を寫したものである。

寫眞術は、金屬板よりガラス、ガラスより印畫紙と變遷して來た。ガラス時代の初期には、濡れ板で、後に種板となつたのであるが、旅人は濡れ板に寫つた姿を故郷に持歸つた、しかし此時迄、寫眞術を以つて營業にして居るものは無かつた。寫眞は惡魔の如く恐れられ、人命を早やめるもの、器械の中には、血を吸ひこむ仕掛けあるものと思はれた程であつたから。

紙を用ゐ、それにインキを塗つて、色寫眞といふ印畫紙が出來る樣になつてからは、長崎土産として買求むるものが多くなつて來た。

○長崎板畫

支那板畫の影響を多分に受け、描くものを主として異國情調の題材を選んだものに、長崎板畫がある、南蠻繪風のものは、異宗門の迫害と同時に影を沒したのであつたが、これのみは許され、公然發賣して旅人の土産にと買求められたのであつた。

此の板畫は正保年間に起つたものが、最古のものであつて、寶曆、安永、天明、寛政、文化、文政享和、弘化、嘉永、慶應と各時代を通じて出版されて居る。

板元の古いものでは、針屋、大島、豐島屋、富島屋があつて、その後には大和屋、文錦堂、梅香堂今見屋、牛深屋、文松堂、文彩堂、紫雲堂があつた。中でも、大和屋がもつとも多くの作品を出し、磯野文齋は、江戸の池田英泉の門人で江戸に昇つて、浮世繪の筆に親しんで歸り、英泉張りの繪を長崎板畫の上に揮毫した。文齋の妻晴香女史も夫君を助けて描いた。文齋は繪師であると共に、大和屋を經營した板元であつた。

川原慶賀、同廬谷、敵月館の繪は、異彩を放つて、見る可きものは多い。

長崎板畫の特色は、南畫を見るやうに、線の上に素朴な味があつて、色調に於ても、江戸板の如き毒々しい色彩のない事で、多く黄、綠、朱、薄墨を使つて居たが、年代をふるに從つて、江戸繪に類似した點が多くなり、摺の工合も複雜を帶びてしまつたのであつた。

繪の種類は多く長崎港、異國船入津之圖、おらんだ人、黑坊、唐人等が描かれ、その背景としては海外文化が現れて、異國情調の好奇心を大にそゝり立てる力がある。その繪の色材に於ても、從來の日本繪具のみに限らず、西洋繪具を用ゐて、澄み渡つた大空や、青々たる深味を持つに都合のいゝ關係上、その效果を試みたものもある。

江戸繪の浮繪や、異國ものを題材としたものに、横文字を裝飾として書いたものがあるが、長崎板にあつては、裝飾でなく、繪の說明を横文字にて完全に傳へて居るものがある、或は支那人が讃を書きこんだものも、日本板畫としては珍しいものであらう。

元治、慶應の頃には、本下町の增永屋で、表店に、疊の上一ぱい、長崎板畫をならべたて、店口には、青竹にその繪を張つてブラ〳〵さげ、長崎地圖の大板が九十六文、普通の繪であると二十四文で賣られて居た。長崎は天領の地であつたので、九十六文をもつて百文の勘定としたのである。

旅人が、この板畫を多く買つて行つても、それは家の子供に與へるのであつて、江戸に行く時には長崎板を澤山買こんで持つて行くと、江戸の子供は非常に、阿蘭陀さんや唐船を珍しがつて嬉んだのであつた。

○ビードロ繪

ビードロ繪は、紅毛人の描いたものを眞似したものである。

司馬江漢が、出島屋敷を參觀した時の事を書き置いたものに、

かぴたん部屋へ行く疊二十デフも敷四方ランマ下にビイドロに描たる額を掛け並へ下ニハ椅子を並べ（略）障子皆ビイドロを以て張る（略）

とあるが尙、吉雄耕作方では、

二階おらんだ座しきを見物すイギリス細工のビイドロ額欄間下ニ掛ケならべ下ニハ椅子を並其外奇妙なる蘭物をかざり

と記して居る。

ビードロ繪は、ガラスの上に繪畫を描くものであつて、透明のガラス裏に描いたものが、表で眺られるものであるから、左と右とが反對に現れる。

ビードロ繪を描いたものは、今のペンキ屋のやうに、大家の描いた物はなかつたが、それでも非常に面白い味が多かつた、阿蘭陀船、異國人、花鳥山水等は珍しい繪と言ふばかりでなくて、捨てがたいものがあつた。ビードロ繪は、後にガラス繪と稱された。

○印刷術

三侯使節が永い海外旅行から歸つた時には、島原、天草には神學校が出來て居た。神學校では宗教の宣傳ばかりでなく、南蠻分明の諸法を生徒に傳へ、書籍の出版を可なり盛んにしてゐた。

サンクトスの御作業拔書は、天正十九年、肥前加津佐に出版され、平家物語は、文祿元年天草耶蘇會學院、ドチリイナ、キリシタンは、文祿元年天草耶蘇會學院、拉丁語葡萄牙語及び日本語對譯辭書は文祿四年天草耶蘇學林、日葡辭林は慶長八年長崎耶蘇學林、日本文法書は慶長九年長崎耶蘇學林、吉利支丹儀禮全書は慶長十年長崎耶蘇會學校に於て、西洋活字を用ゐ印刷され、書物中の繪として、立派な銅版畫を挿入されて居る。

吉利支丹の破却は、宗教のみにとゞまらず、一切の海外文化の法をも停止されてしまつたので、印刷術もそのまゝ消えてしまはなければならなかつた。

吉雄耕牛の如き蘭學者の家に、活字が保存されて居たが、印刷等は行はなかつた。

時代を新たにして、嘉永元年に阿蘭陀通詞品川藤兵衛、楢林定一郎が、蘭書植字判を手に入れた。

時の蘭學者達は、蘭書を購入する事の高價と共に、蘭書の入手の困難なるには、誰もが大なる苦痛をうけ、蘭學の研究に不便があつたので、蘭學者等は、長崎奉行荒尾石見守に進言して、閣老に向け阿蘭陀活字板蘭書摺立方の建白書を送らせた、安政二年、蘭書摺立が許され、西役所内に於て印刷する事になり、諸種の書籍が出版され初まつた。

出島屋敷にても、印刷が行はれて居た。何れの時代に初まつたか分らないが、奉行の建白書を送つた前年、安政元年、即ち西暦千八百五十四年には、Van Der Pijl's の Gemenzame Leerwijs が出來て居た、H. L. Schuld, Iwzu. の著述である。その後、シーボルトは、Open Brieven nit japan を文久元年に作りあげた、前者より後者に印刷術の見事な進歩が認められる。

安政元年の卷頭には、

フアン、デル、リールス氏の共同的教授法

教授し初めんとする人々のために

第六の大々改良したる出版

スクルド氏著

ドルトレヒト市の私講師

一八五四年ドルトレヒト、ブルツセー、フアンブラーム出版

安政四年（一八五七）長崎追再版

と記してある。

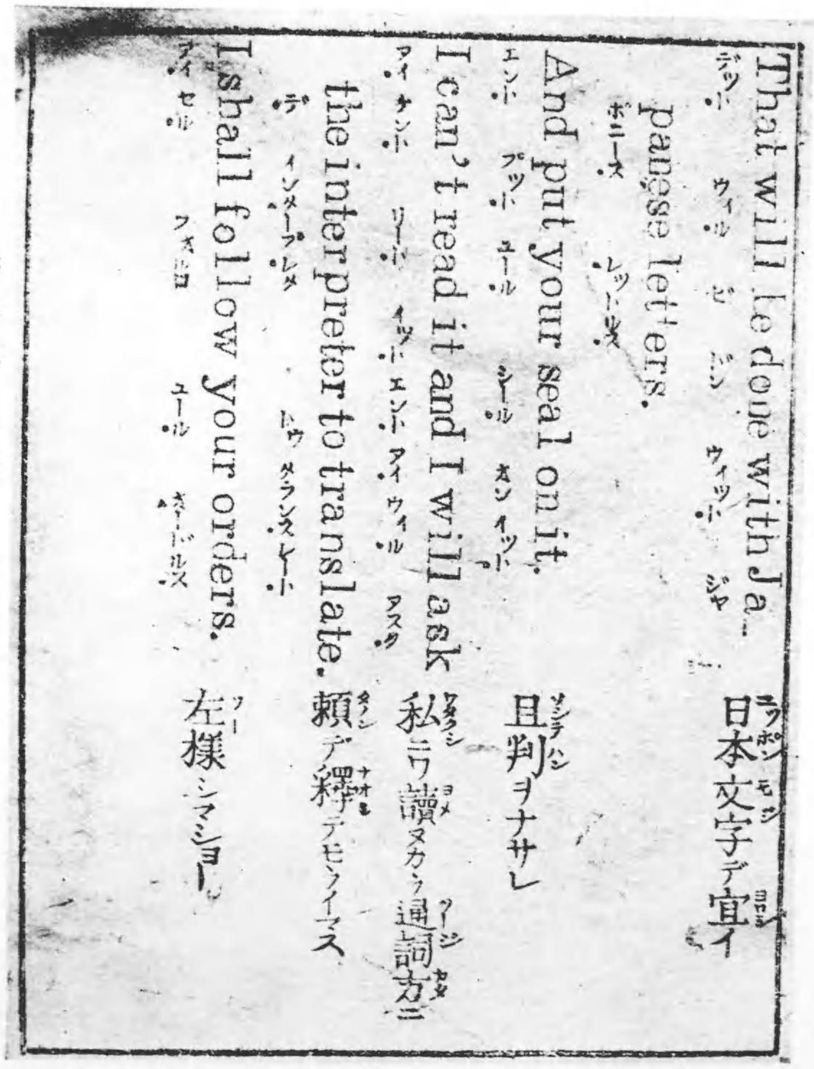
安政の時に、出島版の起つた年は、我國の對外關係も、米國より通商貿易を請はれる年で、水師提督ペルリが浦賀に軍艦四艘を率ゐて來た時になつて居た。

安政六年には、鹽田幸八が英日辭典、萬延元年に增永文治が、蕃語小引を印刷し、民間の印刷業が許された。

本木昌造は、嘉永の頃より、蘭書の印刷を試みようとして居たが、實行する運びに至らなかつたが活字の製法、印刷機等に就いて苦心して居た。彼は明治元年、製鐵所の頭取となると同時に、上海より外人ガンフル技師を迎へ、活字と電氣版の製造に着手した。長崎築町の川に横はる橋は、日本最初の鐵橋として有名であるが、これも本木昌造の建設したものである。

安政四年の出島版の成りし二年後の、鹽田幸八の發行したものも掲げて參考としたい。

卷頭には、



著　八幸田鹽　典　辭　日　英
行發　年六政安
（藏所者著）

A new of the English and Japanese Languages Generals nse for the merchant of the both Countries first parts Nagpsaky sixth year of Ansay December 1859

どちらの國の商人の爲、一般に用ゐらるゝ英語と日本語の通曉する熟語

一卷

長崎

安政六年十二月　一千八百五十九年

卷中の發音には、中々意を用ゐて、丸印と三角が附せられその說明中に、

一●ハ弱クシテ有カ如ク無カ如シ▲ハ强ク高調ニ言フ微ト ス此餘ノ口調ニ至テハ紙上ニ述ノベ難シ因テ之ヲ除ク

と有る、四十七頁には、

at what price will you make the boxes? 箱ワ何程デ出來マスカ

It will cost me seven mace five candarines. 七匁五分掛リマス

It is too dear. 夫レワ餘リ高直

長崎の工藝

Then I will get them made moself. 夫デワ私ノ方テ拵マショー

出島版の方は洋書で、西洋紙の厚いのが使はれて居るが、安政六年の分は、半紙を横とぢとした活字本である。

南蠻繪師小傳

喜多元規

切支丹禁教、迫害と共に、再び唐文明の空氣は深刻になつて來た、黄檗宗の僧侶は、伴天連に代つて、思想、物質的のあらゆる方面に、我等の祖先を導いてくれた。

隱元、卽非、木庵の三和尙を、隱卽木と言つた、此の三和尙に附隨したり又は前後したりして千獸獨湛、鐵心、獨立等の高僧が、ぞく〳〵と杖をひく事となつた、南蠻繪師喜多元規の才筆は、唐像の畫像を寫して、信者の爲めに分ち與へたのであつた。彼の描寫は眞に迫つて居た、ことに、顏面の寫生に至つては、その妙に人々を驚かせるのみであつた。

元規筆の遺物は、黄檗宗僧の肖像のみで、花鳥山水風月は一點もないのである。而してその唐僧の繪には、必ず描かれる本人の自讃があつて、何れも生々しい泥繪具を使つて居る事が特徴である。

元規の繪の如く、黄檗僧を描いたものに、元の字を署名した繪師が二三名あるが、これ等の人は、元規の弟子と見てよからうと思ふ、何故なれば年代に於て同じであり、描く肖像が同一であり、筆法に類似の點が多いが、元規に比較すると、筆力の劣るものがあるから、尙元規以外の畫人は、高價なる泥繪具を使用して居ない。元橘は、元規につぐ寫生の妙味を多分に持つて居る繪師であつた。

山田有衞門作

島原原城にて、天主教を奉じて、宗教戰の旗を高く翻へしたのは、天草四郎時貞を大將として、九州地方の浪人が多く集り、德川の大軍を引受けてよく戰つた。

一方の侍大將に、山田右衞門作が居た。彼は南蠻の事情をよく知り、南蠻繪を描くに長所があつた彼の描いた神々の像は、原城の人達に、神の御像の氣高さを知らしめ、信仰の爲一身を犧牲にする事を鴻毛の輕きに思はせた程であつた。

彼は何人より、蠻畫を傳習したかは不明であるが、彼が島原に住居して居たところより考へて、その頃すでに開かれて居た有馬、加津佐、天草等の耶蘇神學校の生徒であつて、異國の宣教師たる教官より、カンパスに油繪具の筆を動かす事を習つたのではないかと思はれる、此頃は銅版繪や印刷術が神學校の中で作られて居た。

右衞門佐は、籠城中に裏切者として、書を松平伊豆守に贈つた。原城が落ちた後は、江戸に連れ行かれ、彼は、犯人を蠻畫風に描いて創作の便としたので、その畫風は一層喧傳される事となつた。

彼の最期に就いては、裏切者として、原城の人々を落し入れたので、すゝんで火炙の刑についたとも言はれ、又は、法體の姿となつて祐庵と名乘り、長崎小川町に、安らかな生涯を送つたとも言はれ

て居る。

右衛門作口書は、原城の事をよく記して居る。

二月廿八日有馬落城ノ時生捕口ノ津ノ住人山田右衛門作申上條々

一今度吉利支丹起り申次第ハ此二十六年以前天草ノ内ニ束島と申所ニ山居仕居申候切支丹奉衛門左衛門源右衛門宗意善右衛門此五人ノ者ドモ六月中時分ヨリ方々へ觸狀ヲ以テ申廻候ハ天草ノ内上津村ト申所ニ住居仕候伴天連書物ヲ以申置候ハ當年ヨリ廿六年目ニアタリ當國ニ善人一人可ニ生出一度其者幼ナウシテ諸學ヲ極メ天ニシルク顯ルヘシ枯木ニマレ花咲キ山野ニ旗ヲ立テ諸人ノ首ニタルスヲ立ヘシ東西雲ノ燒ルコト近々アルヘシデイウスヲ尊フ時至ル可キナリト書置候ト申候事

一天草ニ大矢野四郎ト申者ヲ右伴天連ノ書物ニ引合考ヘ候ヘハ少シモ違ハス候間扨ハ此者天使ト云ハンコト無疑ト右五人ノ者トモ逸々ニ申觸レ諸人ニ尊ハセ申候四郎年十六歳ニナリ候事

一吉利支丹起申候時分ハ去年十月廿四日ノ頃ニ御座候前廉五人ノ者申廻シ候ハ廿五日比天地モ動ク許ノ不思議出來スヘシ其時皆々相構ヘテ驚申間敷由内々申觸候案ノ如ク廿五日ノ夜ニ入俄ニ切支丹トモ立歸リ村々ニ頭立候者トモ談合仕脇々ノ者トモ企テ人數ヲ相催シ島原ヨリ代官幷他門ノ出家等此宗門ニトホサルヽ者トモ不殘討殺シ其後已カ在所々々ニ引籠リ罷居候事

一右之次第松倉長門守留守居ノ者承付驚則人數百餘人合戰ノ出立ニテ古江ト申所ニ押寄セ吉利支丹トモ四十餘人被討其後ハ松倉ノ人數島原ノ城ヘ引退申候然處一揆ノ者トモ引取申人數ノ跡ヲ慕ヒ島原ノ城ニ押寄城際マテ攻戰候處松倉カ者ドモ次第々々ニ城内ニ引取リ門ヲ立申候ヲ寄手門ヲ打破リ押込候得共城中堅固ニ防申候町屋幷寺々許燒拂ヒ又面々ノ在所々々ニ引取申候其後吉利支丹トモ打寄談合仕候ハ兎角大矢野四郎ヲ引立此宗門ノ司ト可仕由評議相極村々ヨリ一人宛天草へ使ヲ立申入候ハ先年此宗門ヲ轉ヒ後悔ニ存候間今度ハ其方ヲ切支丹ノ大將ニ仕立宗門ヲ取立可申候由申遣候四郎申候ハ我等ヲ宗門ノ大將ニ賴ミアルヘキ由大慶無此上候然ハ我等下知ニ隨ヒ可申ト存候ハ人數書立可給候則逸々ニ寄合吉利支丹ニ不成者ハ悉ク討果シ何樣宗門ヲ取立可申由返事申入使ヲ返シ申候四郎事ハ天草大矢野宮津ト申ス所ヘ人數七百餘人相催シ如前宗旨ヲ取立罷居申候其後島原ヨリ頭立候者トモ人數都合書立宮津ニ遣候ヘハ四郎之ヲ見候テ則手廻四五十人程ニテ宮津ヨリ島原ヘ押寄セ大江ト申處ニ罷居候其明ル日島原切支丹頭々幷ニ諸勢大江ヘ參リ四郎ニ遂ニ一禮ー此宗門ヲ取立可申談合取々御座候其時四郎申候ハ人數一萬二千餘長崎ヘ押寄セ日見峠茂木兩所ニ陣ヲ取長崎ヘ使ヲ立ヘシ元ヨリ此宗旨ハ申ニ不及他宗ノ者トモ此宗旨ニ成間敷申候ハヽ

即刻押寄町中ニ火ヲカケ不殘燒拂ヒ男女悉ク斬捨ヘシ若同心ニ於テハ其人數ヲ手ニ付島原ニ押寄城ヲ可攻落ト評議一同ニ相極メ四郎已ニ長崎ヘ打立候處天草ヨリ飛脚ヲ以申越候ハ右次第天草富岡城主三宅藤兵衛付唐津ヘ申入候テ兵庫頭留守居ノ者共二百押渡テ三宅藤兵衛ト一ツニナリ上津浦ノ近所ノ島古志柿迄寄セ掛申候間急度加勢ノ人數可給由申來候依之長崎ノ儀ハ暫ク差延ヘ三宅藤兵衛幷唐津ノ者悉ク討果シ其後長崎ヘハ可寄由ニテ四郎島原ノ人數千五百人連レ天草ヘ押渡リ上津浦ノ人數ト一ツニナリ島兒ニテ合戰仕ル唐津ノ者トモ即時ニ追立富岡ノ城ヘ追込候則本戸ニテ三宅藤兵衛ヲ討取二日目ニ富岡ノ城ニ取掛一丸マテ攻落シ候ヘトモ本丸ヲ乘取不申候ニ付先引取四郎儀ハ手勢引連レ口ノ津ヘ押戻リ候事

一松倉長門守江戸ヨリ島原ニ參着仕候其上鍋島カ先手カラコト申所ニ着陣の由相聞え申ニ付サラハ要害ニ立籠打出々々合戰可仕由評議相極メ原ノ古城ヘ取籠リ候事

一十二月朔日ヨリ在々所々ノ糧米ヲ取入レ其上口ノ津ニ有之長門守藏米五千口餘取入レ申候四郎儀ハ同三日ニ參着惣人數ハ四日五日ニ不殘籠申候城普請ハ五日六日兩日ニ仕廻申候小屋ナトモ七日八日ニ作リ仕廻幟ヲ立申候事

一天草ヨリ人數男女二千七百程參着仕籠城仕彼者ドモヲ乘セ參候船幷ニ大江ノ濱ニ有之候數多ノ船モ悉ク打破リ塀ノ裏カコヒニ仕候三十挺立ノ早船一艘殘シ置申候原ノ城中ニ籠申候男女共ニ三萬七千餘人村切ニ逸々手配リ仕候

一者頭ニハ上總村ノ助右衛門宗右衛門三平堂崎村ノ次右衛門久藏六左衛門三江村次兵衛源右衛門有馬村次右衛門長助久右衛門不津村吉藏太右衛門串山村太兵衛宗右衛門古村ノ作十郎休意善十郎小濱村久兵衛甚右衛門有家村ノ甚右衛門清七天草久右衛門大藏七左衛門角助五郎左衛門上津浦市郎兵衛七左衛門大矢野七左衛門甚左衛門甚吉長右衛門口ノ津次郎兵衛右三十五人者頭トナル是村々ノ庄屋也

一軍奉行ハ蘆塚仲兵衛年五十五有馬修理所ヘ居申候　松島半兵衛內年四十　松倉家ノ又衛門年六十五　有家休意醫師年六十　會津元察人年三十　不津太右衛門

一極月廿日城攻ノ時右衛作儀ハ請取ノ場ニ罷在委事不存候正月朔日ニ又候攻有之由極月晦日ノ晚來城中ニ知レ申候ニ付其心得仕待居申候故手痛ク防キ申候城中ニ手負死人十七人御座候二月廿一日ノ夜討ノ事大江口ヨリ二千餘人其內四百餘人ハ松平右衛佐仕寄六百人ハ寺澤兵庫頭仕寄三丸ヨリモ五百人立山飛驛守仕寄出丸ヨリ千人ハ鍋島信濃守仕寄出シ申候城中ニモ被疵者即死スル者四百三十人吐內六十人ハ城中ニ引取申候此時右衛作矢文アラハレ申繩ヲカヽリ松山ノ出丸ニ罷有候

故　委クハ不存候

一城中ニ鐵砲五百三十挺程有之玉薬ハ正月末ヨリ切申候テ　打不申ト云ヘドモ少シハタクワヘ置候ニヨリ同廿七日ノ城攻ニ打ガケ申候

一城中糧米ハ八月十日頃ヨリ乏シク候諸勢迷惑仕候少宛所持仕タル者モ御座候

一城中ニ籠リ候浪人四十有之内年頃五十許リ者軍ノ手立敵ノ様子萬事見計ヒ差引仕候此浪人何方ヨリ籠リ候哉出處不存候

一四郎ハ本丸ニテ碁ヲ打テ居申處ニ鍋島信濃守カ築山ヨリ打申候石火矢四郎ガ左ノ袖ヲ打切リ脇ニ有之男女五六人討殺申候就夫城中ノ者共存候ハ今度ノ儀ハ妙不思議可有ト諸人賴母敷思ヒ候處四郎サヘ如此鐵砲ニアタリ側ニ有之者トモ多クウタレ候コト不吉ノ次第カナト皆々申合心モ弱リ申候彼築山ヨリ打申候鐵砲多クハツレ不申手負死人多出來迷惑申候

一右衛門作儀ハ四郎カ様子ナト見申シ萬ツ心細ク存居候處有馬左衛門佐所ヨリ矢文ヲ以申越サレ候ハ譜代ノ者ノ儀ニテ今度城中ニオイテ手立ヲ仕忠節ヲ致候様ニト申越サレ候間我等組七百人ノ内五百人内々心ヲ合セ二月十八日ニ私請取ノ口三ノ内ヨリ寄手ヲ挽入火ヲカケ乘取セ候テ私ハ四郎カ所ニ參リ寄手既ニ城ニ乘込申候上ハ何ト防キ申トモ叶間敷候早ク城ヲ出濱の手ニ落候テ船ニ乘何方エモ一先ツ引退キ可然旨申船ニタハカリ乘セ生捕ニイタシ忠節可仕ト存十八日ノ様子左衛門佐方ヘ矢文ヲ射返シ申候處ニ此矢文見付申サレス候哉十八日ノ手筈合不申如何ト不審ニ存居候其後矢文射申サレ候ヲ城中ノ者トモ之ヲ拾ヒ取リ見ルニ其方ヨリノ矢文遲ク見出十八日ノ手筈相違申候ニ付重テ日ヲ定メテ矢文ヲ射返シ候ヘト申越サレ候ヲ城中ノ者トモイブカシク思ヒ四郎ニカクト申候ヘハ扨ハ右衛門佐心變リシケルトテ即繩ヲカケ松山ノ出丸ニ置申候廿七日ノ城攻ニハ我等ヲ本丸ノ内ニ連寄召置候我等妻子ハ廿七日本丸大手ト升形ノ内ニテ斬ラレ申候私事モ縛ラレ居申候ヲ小笠原右近内衆見ニ出之ニ既ニ切リ可申ト仕候ヲ左衛門佐方ヨリノ矢文ナト見セ申候故命ヲ助ケ生捕ハ罷成不思議ニ命助リ申候

一私事四郎カ家老分ニ罷成玉薬又文筆ノ差引ナト仕候鍋島カ仕寄ノ竹束四百五十取申候茂私ノ才覺ニテ御座候細川越中守竹束モ私之ヲ取ラセ申候以上

平賀源内

高松侯の重臣眞田宇右衛門に事へる一人の茶坊主があつた、此少年は、休憩と言つて居た。暇を見ては讀書三味に耽り、儒書を繙く事を大に好み、天狗小僧の名は、藩中に知られた。藩公の命に依り

彼は藥園附の小吏となり、名を平賀源内と改めた。間もなく病と稱し暇を賜り長崎に赴き、唐人屋敷に出入し且つ傍蘭學を學び、蠻舶を購求して、工夫を凝らし、彼の才能は益々耀いて來た。

賤職の日を送らば、徒に星霜を過すのみ、夫れ膝を屈して人の下風に立つは、淵明の恥と思つて、故郷を出でた彼の壯言は、時をふるに從つて、彼の著述に依つて得難き學者となり物類品隲、火浣布考、食物本草、神農本草經圖、本草比眉その他の數多き著書は、天下に歡迎を受けたのであつた、萬物に就いての才能を發揮した中に、彼の南蠻繪は、專門の畫家をして、驚異の眼を見晴しめた程、畫面には才氣潑剌の筆跡を印したのであつた。晩年狂人と呼ばれ、人を傷つけし罪に依つて獄中の死を遂げた源内の漢詩には、その人の豪放なる才智が、よく表現されつくして居る。

彼はなか〳〵多くの號を他に持つて居た。鳩溪、天竺浪人、松籟子、風賴山人、森羅萬象翁、無根叟、福内鬼外。名は國倫字は士彝と稱した。

彼の子孫は今、四國志度に居て、源内在世當時の家居、彼の畫像、筆跡、エレキテール等の器を殘して居ると言ふことである。

司馬江漢

洋畫中興の祖である峻江漢は、銅刻を以て天球全圖、東都八景の圖を作製し、その聲名天下に轟き彼の横文字花押はその繪に相應はしかつた。

文化の頃、彼は歐洲文明の門戸たる肥前長崎の地に行かんものと、旅路の日を重ねる時、岩國の錦帶橋に引つけられたので、江戸に歸つて遠近法を用ゐ、油繪にて錦帶橋の圖に魂をこめて描きあげ、淺草觀音堂に掲げた。衆人の觀る者多く、奇妙なる繪として大評判となり、遠くより來る者多かつたが、清淨無垢の伽藍にかゝる南蠻人の繪を摸したるを掲げるは不都合なりと撤回される事となり、彼の名畫の姿は、消えてしまつたのであつた。江漢の西遊日記中より、岩國の分を抜書して見れば、

十九日（寛政元年九月）雨漸くあがりて天氣となる四時舟にのりておかたと云處につく夫より六里程行て關戸に至る往來なり爰より三里入て岩國なり日暮におよびければ錦帶橋の許に宿る爰は巡禮宿にて一向にムサキ處なり外にも旅商人一兩人之と枕を並て寢る

廿日天氣此岩國の江戸屋しきは今井谷なり留守居役内坂十郎兵衞當時は爰に居けり因て先内坂宅へ人遣しければ迎ひ參りて二三町行て能き家に參る夫より町奉行の下役の者參りて申には子細を書付差出しなされべしと云に付私此度肥前長崎表へ畫修行の爲參候に付此地相過候間御機嫌相伺申度絹地の畫一枚けん上と書付上げる夫よりしては滯留中上よりのまかりゐにて毎日三度の食の時先吸物酒を出して膳を出すはかまをはきたる者きふじをする岩國は山中にして海は三里を隔つ然ども

魚たくさん北の方は石見の國也橋は廿五間の橋五つ掛る中三つは橋杭なし河中百二十五間なり錦河に掛る故に錦帶橋と名り俗にソロバンばしと云橋の裏ソロバンに似たり人家は橋より西南二十餘町家數二萬餘軒多は瓦屋なり他國の者滯居る事を禁ず故ニヤ盗なし

廿一日天氣旅館主人ハ俳諧を好む畫二三紙認遣す錦川の河原を二三町行つて見るに昔獨立と云唐僧爰に一年醫に隱れ居りしに吾が生ニし處の赤壁に似たりと云て感じたる所何んの事もなき所なりき日暮より內坂氏へ行く酒食を出し馳走す江戸に無き物とて手茸と云ふ菌を食せり之は傘をひろげたる大きさなりとぞ少々苦味あり夜の八時に歸りぬ

廿二日天氣此日祭あり橋を渡れば陳家あり其後ロの山を城山云ひ旅客は此邊へは行事を禁ず祭にて之を許す川の邊にサンジキをかけて見物す此所絹服を禁ス縮面板しめ染ちりめんの如く見ユる物皆木綿なり此日祭なる故に宿よりも酒を出す鮎のすし其鮎幅二寸長サ八九寸アリ江戸には無き物なりさて旅館主人は萬兵衛と云ふ話に此國至て疱瘡をきらふ私家內に疱瘡人ありし時爰に居る事ならず故に小津村と云ふ處へ引越す比は三月也爰は蜃氣樓の立つ處なり天至て長閑なる日霧の如くかすみて其中にあらはれる長州八代島三萬石の處カムロ島上の關此島の間に立つ事なり其島一面にかすみて見えざる樣になると其中に竹林或は松並木樓閣の如き者うす墨にて畫く如く見ユ正面に海士路村は正面なり小津村は斜なりと爰にては島遊びと云ふなりさて又此國に犬神と云ふ者あり犬神の人來りて喰物或は器物樣の物好き物と思心起れり其品々を所持したる者忽ち犬神取付狂人となる也犬神の者は且て人に取付たる事を不知となり又山代と云處近くに鎌ケ原村あり爰より三里深山に入其處の人物髪ひげをそらず異國の人の如し岩石に水晶石英を生ず

廿三日天氣五時より旅館の忰を案內とし行廚持一人此方二人四人にして橋を渡り上の方へ十餘町行き又河をこなたへ渡りて十五六町行き阿品村を過て山合に行事八九町犬戻と云處山皆岩石なり溪水の間を飛び渡る誠に畫の如し頃は秋なれば紅葉錦の如し岩上にのぼりて酒を呑其景色を寫す夫より一里半行て彌山が嶽あり登る事廿一町路なし岩石に取付登る頂に小き社あり山神を祭る鐘あり其かねをむせうに衝きならす傍らに茶やあり其家横に倒かゝりて一人顏色あをくふくれたる男居る爰にて行廚を開きける岩國より此山神へ參詣する者ありと見えたり四面山にて塞ぎ見所なし夫より下りて暮六時過に歸りぬ路々すゞ蟲なく

廿四日雨天此日上へ牡丹の畫絹地也外扇に畫を描き之をケン上す家老へヌメ地に畫を描亦用人には大唐紙二枚宛之を贈る町に使者屋あり門がまへなり玄關よりあがると下役の者と見え出向ふ口上を上役の者へ云次々上役吾前に來りて口上を聞夫より座しきへ通し二十五菜の膳を出し酒肴を出し夫

より上ミ上り被下しとて白銀三枚外に金三百疋也爰を去て　内坂氏へ行上より内意ありて内坂を以て何分にも病中故お相申されず殘念なる事なりと

廿五日天氣家老用人よりも各々挨拶ありて　明後日は出立せんとす

廿六日天氣藩中の人かはる〴〵來り夜に　入内坂へ暇乞に參る亦た酒肴出し馳走するさて此地へ參ると馳走役人付添ひ三度の食に魚肉多し甚だ困り入る。

廿七日天氣よく明方に出立して先づ橋を渡り向うの河ふちを通り程なく山に入夫より又濱邊へ出て大ケ崎と云處なりとき島八代島其外小島數々見え　此處は蜃氣樓立と云其處の者に直に聞しに春三月頃長閑なる日島霞て其かすミの中に　色々の模樣あらはれ亦たん〳〵とこなたの島に移り（略）

廿八日天氣よし今日も兩人の者出てていねいに　尊敬す故に畫を認め可申と云ければ夫ハありがたき事なりとて唐紙持來りけれハ畫かく筆は荷物の　内にあり出もめろんどふ故只の筆にて認め（不明）五時に出立す此國の風とて先づ飯前ニむすびを出し茶を出す夫より膳を出しけりさて二人の者先へ五町はづれ橋ある所まで送る所の者是ハ何ニ人なるやと見物す案内者一人荷物を持せる此處は麻布ヲ晒ス所なり夫より一里半來りて多武瀬村あり染物屋多し之より岩國領に非ず

永田善吉

岩城國須賀川の紺屋渡世を業として居る者の子供に、繪を善くするものがあつた、それが永田善吉で後、亞歐堂田善と稱した南蠻畫に巧みな腕を示した。彼の銅板繪は、司馬江漢と共に名をなしたものであつた。

父は昆山と言つて紺屋渡世のかたはら、花鳥山水の畫を得意とした、父に就いて、畫筆に親しんだ善吉は、僧月僊の門に入つて專心その道に一生懸命だつた彼は、師の好んで描く蠻畫風が感染して來たが、彼自身の研究の結果一層西洋畫法の技がすゝんだのであつた。

寛政六年六月の日に、白河樂翁は領内巡遊を初め、須賀川の舊家安藤三郎右衛門の家に立寄つて中食の饗應を受けた時、立廻らした屏風が、室中で一番異彩を放つて讃歎の聲をすら洩らした、その屏風は、江戸愛宕山の圖を題した、善吉の傑作であつた。

間もなく善吉は、樂翁より召出されて、御用繪師となつた、或日、將軍家拜領の世界地圖を樂翁は取出し、摸寫を命じた、善吉は洋風の畫をよく描くには、長崎に行き修業の必要をのべ、許されて彼は長崎に滯在する事となり、南蠻繪師達と交り、その苦心の結果は、彼の非凡なる才能を畫面上に現して來たのであつた。四年の長崎遊學の後、享和二年、五十五歳で、長崎と別れ郡山の樂翁の許に

歸つた彼は、世界地圖を原圖に劣らぬ力を以つて見事に作り上げた、その地圖に配した雲の模樣を指して主君は何故に相違せしやとの問に、その儘寫すは、凡人の仕事であると彼は答へた程、強い自信すら起つて居たのであつた。

樂翁がお國替になると同時に、暇を乞うて故鄕須賀川へ歸つて行つた。

彼の刻苦經營して作製した銅版畫には、金龍山淺草寺之圖、洋船難破之圖、三圍、ゼルマニア廊中之圖等は、師の江漢のそれに比較しても決して恥かしきものではないのである。

彼は江漢の如く長命にして、文政五年五月七日、七十五歲の永眠であつた。

宇田川榕齋の著す解剖之書の跋に紫石杉田勤の記があつて、善吉の銅板畫を稱讚して居る。

宇君榕齋。著二醫範堤綱精誠之績、細入二無聞一理究二至妙一又恐下初學不易二領會一慾三徵以二銅版圖一而苦三當時不レ得二其人一天誘二其衷一助以二亞歐堂一實爲二本邦內象銅圖之嚆矢一至二其巧緻一亦不レ在二西洋之後一於レ是乎初學之徑脣而領會之巧全焉（略）

川原慶賀

慶賀は長崎に生れて、出島屋敷の御用繪師をつとめた、通稱を登與助、號を慶賀と言つた、父の川原秀山に就いて大和繪を學んだ彼は、蠻畫の筆跡の侮り難きを知つて、寫實の技に苦心する日が多かつた。

毎日、出島屋敷に通つて、館內に飾る油繪や、阿蘭陀人の描く繪畫を眺めては、研究慾が燃えさかつて一筆〳〵にも疎にせなかつた彼の實力は、滯留人の蘭醫シーボルトの認めるところとなり、彼の爲めに、日本の本草を描く日が多かつた、シーボルトが國禁事件を起した時には、親交ある彼も、その捲き添を喰つて、犯科帳の中に罪名を書きとめられてしまつた。

今下町出島繪師

一　登與助

子十二月廿五日入牢

丑正　月　廿八日出牢し上町預

寅閏三月廿五日　伺之上叱

右之もの戌年阿蘭陀人拜禮參府に付附添罷越道中筋に而藥草繪圖等認外料シーボルトに附添罷在候上は見物人又は病人等多人數來り混雜いたし候はゞ別而可心付處シーボルト儀病人療治いたし遣し或は對話いたし候ものより到來の由に而御制禁の品多分持越候次第右始末不埒に付叱り置候

右者伺之上松平和泉守殿依御下知申渡間一同可在其旨二而申渡候

奉行大神能登守在勤の時であつた。外料とあるは、今日の外科醫師の事である。その後又、彼は懲りもせず、紅毛人に繪を描き與へんとして、再び罪を得たのであつた。その頃、無斷にて紅毛人に繪を與ふる事は禁ぜられて居たのである。

今下町繪師

一　登與助　寅九月十一六日預

同月廿一日手鎖預

同十一月十三日江戸並長崎拂

右之もの出島屋敷え出入いたし湊繪之内長崎其外御臺場ニ而役所向等を相認申間敷處旨誓詞も有之處尚六月中蘭人相好ニ任せ右誓詞を相背繪樣之内長崎西御役所又は番船之幕に九曜之星茗荷愛紋所彩也ニ書入蘭人え可相渡旨存認メ候迄ニ而未ニ出島えは不差出得共右始末誓詞いたし居候身分ニ而は別而不屆ニ付江戸並長崎拂

出島乙名

小田喜三兵衛

寅十一月十三日申渡

阿蘭陀大通詞

岩瀨彌十郎忌中ニ付代

小川慶右衛門

右之もの共町繪師登與助儀誓詞を相背蘭人好ニ任せ不屆之繪樣相認末ニ蘭人えは不相渡候得共右始末不屆ニ付登與助儀を江戸並長崎拂申付候間以後之儀猶更別而心付取締可致候

慶賀は二度の罪を得た、彼は晩年姓を田口と改め肖像畫を專門として渡世したのであつた、九曜の星の紋とは肥後細川のものにて、長崎港警備之圖を筆にしたのであつた。

彼の死後、その子蘆谷は、父の遺稿を集め慶賀寫眞草を著した。描くところの本草は何れもシーボルトの依頼に依つたものゝみで、唐人吳門陸吟香の序文は、慶賀の才能を記述して居る。

夫作畫之不同得其氣韻者或乏筆法得其筆法者或失位置兼衆妙而善者世難其人河原慶賀君也者世以繪事爲業善于傳襍是以入貢於吾崎港紅毛綠眼之徒驚喜其水土之殊域造物之變態每覩珍禽異草花果蟲魚輒各請慶賀君致之寫照云々

石崎融思

荒木元融の蠻畫は、唐畫と蠻畫の折衷式であつたが、その子融思に至つて、南畫を多く取り入れた

る蠻畫の筆法を用ゐた。

明和四年に生れた融思は、初め慶太郎と言はれて居た、彼は唐繪目利役の石崎家に養子となつたのである。

彼の繪が純油繪に走らなかつたのは、生活の爲めであつたであらう、その頃は南畫全盛の時代であつたから。

融思は、人物を描くに微細の用意があつた、下繪として、裸體の人物を描くのが常であつた。用意周到なる彼の筆蹟は、寫生の微細に亙つて、觀るものを、恍惚とさせずにはおかないのである。ガラスの裏面に、水銀をひいて鏡を作つたのも彼であつた。

年五十九歳の作、長崎名勝圖繪は、一枚一枚に長崎の特色を現して居る貴重なるものである。

弘化三年七十九歳にて、世を去つた彼の門弟中から、長崎三畫人と呼ばれる日高鐵翁、木下逸雲三浦梧門の三人が出でた。

字士齋、號鳳嶺、放齡とも言つた。

唐繪目利の役は、なか〳〵多忙なる仕事があつた、幕府獻上の品々を模寫する事を第一とし、輸入品の鑑定、缺所の場合の鑑定等であつたから、大作を試みる暇がなかつたのであつた。

切支丹宗門の禁制は、南蠻繪に迄及んで、當然禁止の命を受けたが、唐繪目利のみは、模寫するのが仕事であつたから、南蠻繪の研究は、十分に出來たのであつた。

阿蘭陀繪目利と云ふのは無かつたので、唐繪目利が、南蠻繪の目利をしたのである。

小野田直武

秋田の藩主佐竹義敦は、自國の財政困難から鑛山業を盛んにし收益を多くあげる爲めに、平賀源内を招いたのであつた。

源内が滯留中に、知人となつたのが、直武であつて、彼の爲に、南蠻繪の方法を懇切に教示したのである。その手法、理論は、直武にとつて暗夜の光明であつた、自然を寫す事に筆法なきこと、運筆よりも色彩の調和、明暗に依り物體の形態を明瞭に描くことを、大に說き示された。直武は安永二年物産取立役に出世して江戸詰となつた、彼は本舞臺の都にあつて、繪畫の技の上に著しい進境を現して來た、蘭醫杉田玄白と水魚の交りをしつ〳〵、玄白の解體新書の挿繪を喜んで描いた、彼は細筆を以つて、手本とした西洋の原圖を、熱心に摸寫した。角館城主佐竹義躬は直武に、蠻畫の法を授かり殿樣藝でなく立派な作品を殘すに至つた。南蠻繪筆を握つた多くの繪師の最後は、不遇であつた、直

武も主君の憎みを受ける身となつて、故郷角館に歸り、安永九年五月樂しまずして、三十二歳にて歿したのであつた。

荒木如元

通稱善十郎、元融義子、嗣二父後一爲二鑑畫職一能畫二蠻畫一

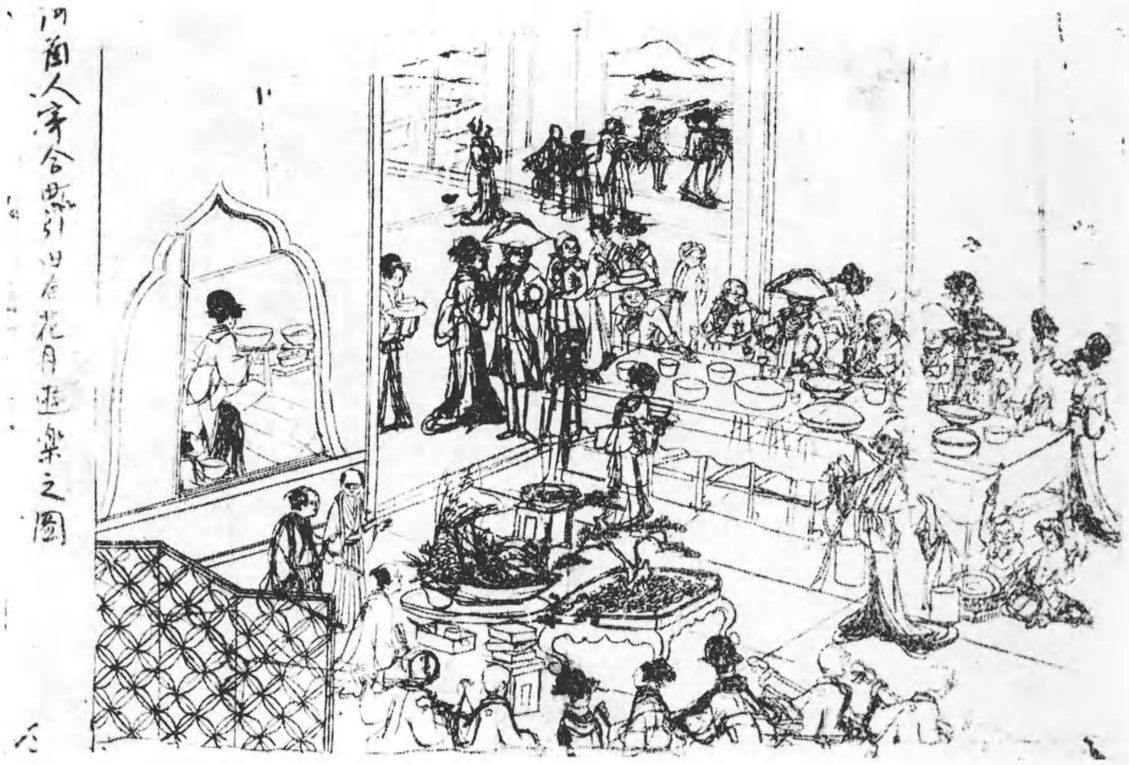
長崎畫人傳には、如元の記は、極めて簡單に扱つて居るが、此他に何等、傳記が無いのであるばかりでなく、彼の署名した畫が殘つて居ない。

京都大學のも無落款である、私の祕藏して居るものも傳荒木如元筆であつて、此畫人も純油繪を描いたか如何か疑問が起るが、筆法その他に就いて見るに、蠻畫の風を學んだ事は爭はれない。

私の藏品である世界人物繪卷物は、明人男女を筆頭に描き現し、韃靼、暹羅、天竺、交趾、安南、咬嚕吧、葡萄牙、西班牙、和蘭、大人國、小人國等の人物の顏面の陰影、衣の皺、手にする器等に、細微なる寫生を用ゐて、蠻畫の妙、優長典麗さを點頭する樣に、異國情味の豐富さを示して居る。

○○○○○

南蠻繪師の傳記の材料は、著者の下に相當集つて居るが、これは大部の一冊として著述する筈であるから、此處には、僅かの人をあげたに過ぎない。



長崎名勝圖繪　石崎融思筆

阿蘭人寄合町引田屋花月遊興之圖

（長崎名勝圖繪）

南蠻情趣は、俚謠のなかにも織りこまれて來た、而してその流行は早やく傳づたが、意味を解する事の困難なるものが相當に殘つて居る、私は、解釋に骨の折れないものゝみを此處に擧げる。

四ツの海も
しづかにて
もろくに船の
入りつゞく

この浦安の國までも
民のゆたかさ

長崎勝山町の諏訪祭禮に、薩摩より傳つた大薩摩踊の一節がこれである。

長崎浦へ出て見れば
カラカラ舟が三艘來た
金襴まき物積んできた
めしてたもやれ、若衆たち
處繁昌となる程に

中なる船には何積んだ
きぐすりなんぞを積んできた
めしてたもりやれ、若衆たち
處はんじよとなる程に
あとなる舟に何をつんだ
小間物なんぞを積んで來た
めしてたもりやれ、若衆たち
處はんじよとなるほどに

唐船入津の港の有樣が、眼につくやうである。

豐國の子守唄も面白い、

ネーン〳〵ネンコロヨ、おむつの父さん何處に行た、なーがい長崎、金ぼりに、お金が無いのか、死んだのか、一年までども、便りなし、二年待てども、まだ見えず、三年三ツ月のあかつきに、おむつに來いとて狀が來た、
おむつに何々着せてやろ、去年仕立てた白小袖、今年仕立てた紅小袖、上には何々着せてやろ、奉

書紋付着せてやろ、帶は何帶しめてやろ、金襴どんすの帶しめて、ネンネン、ネーンネ、ネンコロ
ヤ
やはり唐人船のものであるが、滑稽味を帶びた歌が、その頃の氣分をよく知らせてくれるのがある、
長崎の、沖の方に、唐人船が入つて來た、とう唐人と、めい人と、馬と牛と、犬と狐と、猫と鼠の
聲聞かしやんしたか、ヒヒモモ、ピョー〳〵、わい〳〵、ちゆうに、ひいも、びよう〳〵〳〵のく
わいくわい、にやあ。

出島屋敷の所在地江戸町は、さすが阿蘭陀人を見る事の多かつた町の事とて、諏訪祭に紅毛人行列が
あつた。三色旗を飜へした旗持の後に、西洋音樂隊、西洋銃、サーベルを持つた兵隊、金モールに飾
りたてた甲比丹や將官、それにつゞいて美しい婦人が、花車の中に居て、黑坊は日傘をさしかけたりす
る、その通り物には、町の人々の眼を驚かした、而して阿蘭陀人達に扮裝した子供達は、口々に阿蘭
陀歌を唄ふのであつた、

カーリンデ、カーリンデ、カーリ、アーイノ、ジョンブル、サンジューゴリン、オーサ、シンクサ
レ

とくりかへした。カーリンデの唄は、日本語の訛りが這入つてしまつて、完全なる阿蘭陀語としては
何等の意味がないのである。ブーラ〳〵節が盛んな時、嘉永七年露西亞の提督プーチャチンが、港外
の四郎ケ島に來たので、それが早速歌になつた。

嘉永七年、きのえの寅の年、四郎ケ島に見物がてらに、御ろしやが、ぶうらぶら、ぶらり〳〵とい
ふたもんだいチュー。

沖の臺場は、伊王と四郎ケ島、入り來る異船はすつぽん〳〵大筒小筒を鳴らしたもんだいチュー。
長崎の沖の方に、唐人船が入つて來た、とう唐人と、めいんと、(牡犬)馬と牛と、犬と猫と、猫と
鼠の、聲聞かしやんしたか。ヒーヒーモーモー、ピョー〳〵クワイ〳〵チューに、ヒーモ、ピョー
〳〵〳〵クワイ、ニヤア。稻荷岳から館内見れば、阿茶と女郎子の枕引ぶうら〳〵、ぶらり〳〵と
いうたもんだいチュー。

館内は十善寺の中にある地名、唐人屋敷の事を指したもので、阿茶とは支那人の意味、女郎子は女郎
衆から訛つたもので、館内の唐人屋敷で、唐人と遊女が戯むれて居るのを歌にしたのである。

今年、十三月、肥前さんの番代り、城ケ島見物がてらにおろしやが、ぶうら〳〵、ぶらり〳〵とい
ふたもんだいチュー。

おろしやとは御露西亞と敬語に使つたので、稻佐の一角では露西亞とは言はない。

安政開港になると、

ジョン來な

ジョン來な

ジョン〳〵來な〳〵

長崎、横濱、箱館ホイ。

が流行して、渡來外人までが、此唄に足拍子を踏んで愉快に踊るのであつた。

赤つかとばい、

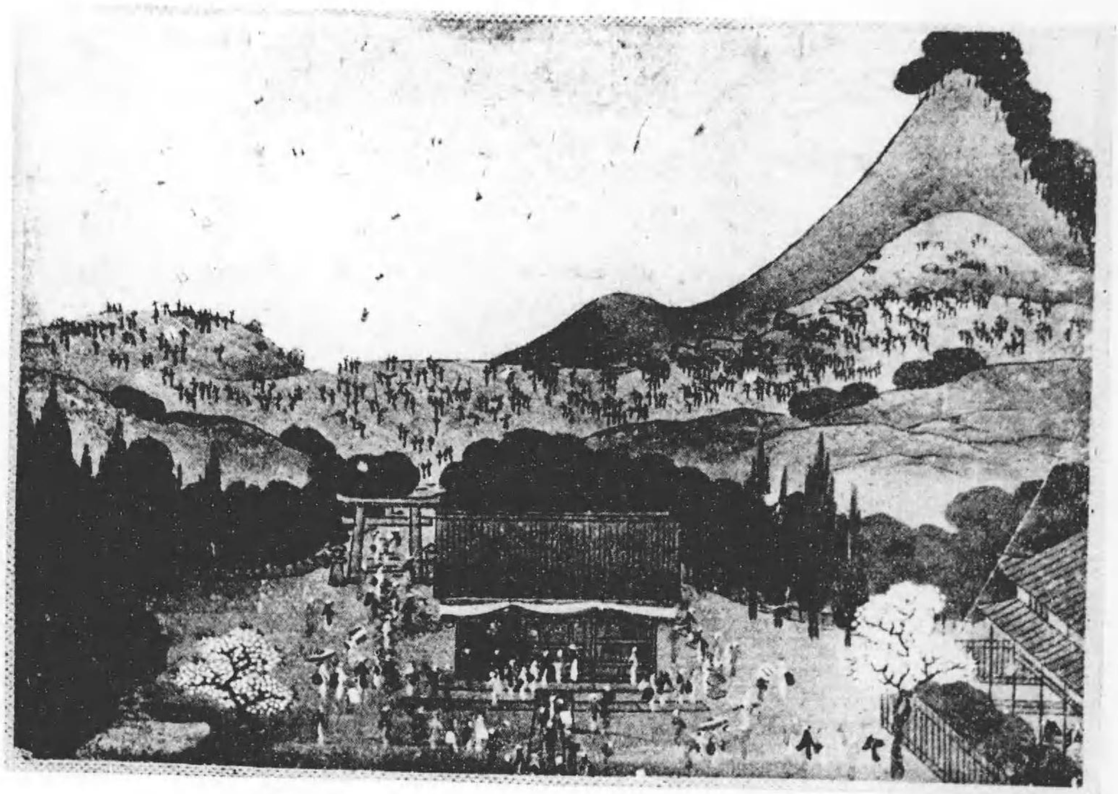
金巾ばい、

おらんだサンから

貰らうたとばい。

赤金巾は貴重な品であつた、出島屋敷に行く丸山の遊女が阿蘭陀人から貰つたといふ事と言つたもので、短い歌に、遊女と異國人の親しさをよく現はして居る。

アチヤサン、ボーブラ、クワーンナ、クワーン、チユーテ、ナーカイタ、アチヤサン、ボーブラ、クワーンナイ、クワーン、チユーテ、ナーカイタ。



琴平山ハタ揚　日鏡繪

（著者所藏）

かうなつて來ると日本語だか、阿蘭陀語だか區別がつきかねるが、長崎語である。アチヤサンは支那人、ボーブラは外來語で南瓜、クワーンナイは喰はないか、との事であるが、此處では、唐人屋敷の館内を指す意味にも用ゐて、支那人さん、南瓜喰はないか、喰はないと言うて泣いた、支那人さん、南瓜、館内、喰はないと言うて泣いたとの事である。

ホーロクドン〳〵、ヒイ一ツ、クレンナン、イマ火ワ、ゴザラン、ウツテナリト、上ゲマツショ、カチカチ。

唐人の馮六官が、日本語研究の爲に、日本語の言ひまはしを歌に依つて稽古したもので、ホーロク殿〳〵、火を一つ下さい、今火は、御座りません、打つてなりとも差上げませう、と思へばよい。

江戸に流行した四季の變唄は、明治初期のものであるが、異國趣味が窺はれる。

春の遊びは琴平につゞいて賑ふ風頭
勝負爭ふビード ロ凧屋がとりもつ緣かいな
夏の涼みは公園に鶴ケ港を眺むれば
出づる軍艦入る蒸汽ドンコがとりもつ緣かいな

秋の月見は鹽見崎右に見渡す天草の
月に輝く千々石灘鈴蟲とりもつ縁かいな

冬の雪見は富貴樓藤屋不二亭のみあかし
のぼる福屋の小座敷でカルタがとりもつ縁かいな

春の遊びはの、琴平、風頭は山の名であつて、此山の上では、凧合戰が賑やかである、ビードロとは凧絲に使ふ硝子粉を絲に塗つたもので、敵手の凧を切るに必用なものとなつて居る。夏の涼みの公園は、諏訪大祭の催される諏訪公園で、ドンコとはドンコ茶屋といふものがあつた、ビヱル、ローチの創作お菊さんにも記される居る、よく外國人達の休憩した所。秋の鹽見崎は、市外茂木村の岬で、千々石灘は賴山陽の詩で名高い、切支丹合戰の天草諸島や島原半島は、手に取るが如く眺められる、こと に溫泉嶽の山岳美は繪にも描けない程の美くしさである。冬の富貴樓、藤屋、不二亭は日本料理屋で、のぼる福屋とあるは、丸山の遊廓の高臺をもう一息昇つて行くと、其處には、西洋料理の元祖と言はれた福屋があつた。

長崎なまりと言ふ歌は、現今では忘れられて居るが、外來語より來たる長崎語を、面白く入れて居るので紹介する事にしよう。（　）の中は、意味の解釋として讀んで貰ひたい。昔の長崎なまりと、今の長崎なまりとは、大分距離が出來て居て、私達にも難解な點が多い、これは何れ識者の教へを願ふ事として、そのまゝ發表する事とした。此の歌の作者は、畫師打橋半雨の父竹雨の作で、文化の年より流行した。

山の三軒屋の（丸山の三軒屋。茶屋の名）、なア、あんたゞちや、（お前達は）知つとるなん、（知つてるか）ごゝさまの、（お孃樣の）ほすかときや、（小さい時には）なまの、（至つて）きつかべで、（不明）お龜女てゝ、（お龜女というて）言うてな、（言つてね）ふとうかなんして、（大きな風をして）てしけはしけ、（如何にも手に合はぬ）及ばんぢやつた、（及ばなかつた）跡の、振雀チウー、蓑と笠と、持つて、參れ、去年の、大風、今年の小風、ながしめ（梅雨）大津くらこつくら（不明）あたま、（天窓）へつゝく（あたる）打つて參れ、一寸、聞いて下はれ（一寸、聞い下さい）一二三四五六七八九の十、おやのめはんぢやゝ、（親の番繁昌。遊戯の時、親になつたもの。）十善寺のあちやの、（十善寺の支那人。唐人屋敷の支那人のこと）手間取り、ぞうたん、（冗談）ぼさん（坊さん？）杯きや（杯きは）突遣つた〳〵、じやんじやら、もんじやら（不明）ちやくに任せて（猪口？に任せて）此處退け、しう〳〵又、さゝんせ〳〵、草履隱し、かこらんもんめ、（加はらぬ者奴）あん畜生の、（あ

の畜生の）はの、はゝの〳〵、（母の〳〵）いふ事にや、（言ふ事には）釵、買うて（買つて）飛ぼより、（飛ぶより）髯付〳〵、そうらいす、〳〵（支那語にて意味不詳）又、出さんせ〳〵（出しなさい〳〵）向場、ぢやの、向場ですね）草履がくし、ぢやの、（草履かくしですね）足が、あいたいたゝ、ぢよ〳〵一本、（草履一足）うしなうて（無くして）赦しなら、赦して、おしやしやんせ（おつしやりなさい）こつ〳〵、誰よ、このふと、此の人、羊繩盜人、親が居る程、子は取られ、得られん、ぷかんこ〳〵、（不明）ずつきやん〳〵、（肩車、）えつと振んなはんな、（あんまり振つていけない）目の、舞うて、もつとぶんなはい、（もつと振つてくれ）面白かばな、（面白いよ）目の前、こまへ（目の前、すぐ前）斃れた者な（斃れた者は）犬の糞、猫居れ〳〵よ、居んな〳〵よ、（居るな居るなよ）町廻ら、（町廻りは）三年ど、（三年で）つぼいたら（蕾になつたら）開いた、開いたら、つぼんだ、（蕾になつた）もぐら、（土龍）打ちや、（打ちは）とがな〳〵、（科ない〳〵）ぼふのめ〳〵、（魚の目〳〵）祝うて、三度、おしや〳〵んのしやん、（手をうつ音の事）もう、祝たばな、（祝つたよ）一まつぼ、二まつぼ、さんまつぼ、始末ぼ、（吝嗇）しまつぼの、おてにや、（お手には）鬼ばもつた子持た、（鬼の子を持つた）角の生えた、孫持て、なきべすこべす（泣き蟲）罕の前の、乾糞、天狗のやめ、（天狗の山）登つた、あゝ寒むさ、（あゝ寒むい）こさむさ、愛宕のやめ、（愛宕の山）火の附いた、早よふいて、（早やく行きて）消やせ、（消せ）消やせば寒か、（消せば寒い）消やさなぬつか、（消やなければ暖かい）せーらえんや、（嬉はないか。せーらんゑんは陸上ぺーろんと言ふ遊戯の一種）せきばたり、（せーらゑんの時の言葉？）こふばたり、（同）中のもんな、（中の者は）追ひ出せなれたか、（慣れたか）なれんか、（慣れないか）なれたぞ、（慣れたぞ）ひよふしこんて〳〵、（調子づいて）蜜柑の皮、換ゆうよ、（交換しようか）換ゆう〳〵、どんくの飛ぶときや、（蛙の飛ぶ時には）桶かぶせ、夫でも飛なら、杵おけ〳〵、ぎし〳〵やどこまで、（ぎし〳〵は何處まで。片足を地につけずして、地につけた方の足で、石を蹴り、蹴つた石のところに片足で、飛んで行つては、又石を蹴る遊び、稻佐の先まで、油買に往や、かいりが大事、（歸りが大事）おかつさん、（嫁さん）金毘羅參ら、（金毘羅參りは）ぼゝちよよんご〳〵、（身體の勞れの意味）ほふろくどん〳〵（ほふろく殿ほふくろ殿。人名）火、一つ、吳れんなん、（下さい）今火はござらん、（今は火は有りません）打つてなりと、（燧石にて、打つて）あげましよ、（差上ませう）かつち〳〵〳〵（かつち〳〵〳〵。燧石の音）提灯や、ぱい〳〵〳〵、（提灯に火をつけて、赤坊に見せる時、バイ〳〵〳〵と言ふ）石投げたもんな、（石投げた者は）手の腐るゝ、提灯に、釣鐘、やまいもにどんぼ、（山芋に牛蒡）螢、ほう〳〵ばら〳〵、よ、池の水呑まんや、蝦蟇よ〳〵、ちや〳〵、（茶水）みざのまんや、（水は呑まない

か）呑だ、くしやくと、（柄杓と）茶碗と、持つて來い、〳〵、中の〳〵の、こふぼとけ、（小佛、屈め〳〵の遊戯の親の名）なし腰やあ、（何故腰は）屈んだ、天の地の下にしふ〳〵らゆうて、屈んだ屈んだ、一にけんしよ、二けんしよ、三んけんしよ、四けんぢよ、しけのはたの、桃は、桃かん取つて、十方、八方、張りまかされて、てゝん、手車に、じつとゆうて、こほりひけ、〳〵、（此の一節は大勢の子供が、手をつないで圓形をつくる遊びで、時の唄、意味は不明）てゝんしすちや、（隱れあそび）またもゝしたり、（鬼事）隱事したり、なりにげ、（役、逃げ）ひげや、（髮は）太鼓や、小便の、目かくし、影踏、べんさらかくし（紅皿かくし。遊戯の名）屈み、ちよんねんどん、隣りのばゞさん、お茶のみ、おんじやれ、（お出で）おしよさん、（坊主さん）どけいくな、（何處に行く）わたしハ、（私は）丹波の笹藪に、ハしもつきて（私も連れて）往しやんせ、子供つれにはじやまになる、とふよくな、（道慾な）おしよさんや、（坊主さんや）そんなら、（それなら）こい、〳〵、（來い來い）何の坊主、こつち向け、（此方を向け）いんま、（今）女郎子か呼て嬉しかつけ、（遊女が呼んで嬉しいだらう）歸らうや、（歸りませう）柿の葉、戻らうや、（戻りませう）桃の葉、歸いつて戻つて、（歸りて戻りて）鹽量ろ、（鹽を量る）座頭さんの通來す時や、（座頭の通る時には）道やよのけ、（道をのけ）子買を〳〵、今、子は御座らん、そんならば、（それならば）問答しう、（問答しよう）問答しうに、（問答すに）何ん喰はう、（何を喰べさせよう）砂糖餅、蜜かけて、砂糖餅や、あ（砂糖餅は）腹くだす、ぼふそいてまゝにしう、（魚を添へて飯にしよう）ぼふハ、（魚は）いげのある、（骨がある）いげは、（骨は）とつて、（取りて）あつぺシラ、（捨てよう）此の子が好かろ、（此の子がいゝだらう）豚こん〳〵よ、（豚來い〳〵）ろかすどんの、（ろかすさんの。人名）よめご、（妻）、海、とつちや、（取つては）ぼちやん、（海に捨てた音の事）跡の烏、先きなれ、（先きになれ）跡なれ、（後になれ）とび舞ひ〳〵よ、（鳶飛い〳〵）まい〳〵〳〵、あの紅な、（あの紅は）誰がべえよ、（誰の紅でせう）おかつさんの、（妻君の）祝儀の紅、つばつけたら、（唇につけたら）あつたから、（熱いだらう）あとしやま、（お日さま）遠く、錢々百く、おけつけ、（頂戴）油買うて進上、こちや、今年の紅、こちや、今年の目、赤らちよかいべー、（子供が、舌を出す時に言ふ事）雪こんこんよ、（雪來い〳〵）霰こんこんよ、（霰來い〳〵）はなびら雪の降る時は、蝶三つなれ、蝶のかゝさん、（蝶のお母さん）三十三んになれ、かごや〳〵、（籠や〳〵）ぬらしめし〳〵（乘らせ、〳〵）錢がなければ、のりもえずのりもえず、（乘りも得ず〳〵）しはすの二十九日に、（師走の廿九に）拂ひましよ、〳〵、ぴゆひよろぴゆひよう、（鳶の鳴き聲）かれへまんこしたり、（不明）つんぐりまんぐりして、（如何なりかうなりして）あすうて、（遊んで）おらしたら、（居つたら）さかとんば、（眞倒樣）とふれて、（倒れて）くさ

か十たんぼの、(臭い水溜の)中へつけ、(中に這入り)泥臭かめに、(泥臭いめに)なつても、かんまでな、(かまはずに)ようむなかこた、(よくもないこと)しようしたばな、(して居たよ)それが、いまは、あの向の、五郎助どんの、かたのおかつさんにならした、(方の奥さんになつた)ほんにな、ほんなこと、(眞實)へふれ、(屁ふれ)すらごとたい、(嘘です)そんなら、(それなら)すら事ぢやなかばな、(嘘ではないぞ)どうなこうな、(如何だこうだ)あすこどころが、(彼所どころか)こり/\たい、(凝り〳〵です)なんちうや、(何をいふか)あじやよかろ(味はいゝだらう。悪い時言ふ時に用ふる言葉)まんくさらかし、(縁起でもない)ばゝちよ、(婆さん)おしやも、(不明)あいらる、(可愛がられる)じやんも、(爺さんも)あいらる、(可愛がられる)おしやとじねんと、(不明)たばねて、(皆んな)あいらる、(可愛がられる)なんちうな、(何を言ふか)すら事ばつかり、(嘘ばかり)いはすばな、(言ふ)あつてまた、(だつて又)このふと(此の人)また、珍らしいもんたいなア、(珍らしいものですね)あんげん、(あんなに)こんげん、(こんなに)言はんばはつてん、(言はないけれ共)よかたな、(いゝよ)あすけ(彼處)ゆいや、(祝の時萬歳といふ時に使ふ言葉?)まあれ、(廻れ)打おけ(不明)そるばつてん、(それだけども)嫁にならしたか、(嫁さんになられたか)ほんな事なら如何するなん、(眞實なら如何する)だちもねうふばんげなもんたい、(埒も無く、だうしないものだ)おんだアあんげん、(私はあんなに)こんげん、(こんなに)さいたら、(文字不明)ねんね、(寢る)のたりう、(不明)おんだまた、(私は又)如何しうかしらん、(如何仕様かしら)こちやこや破れた、(文字不明)よか〳〵えつと、(よろしいよろしい、あんまり)あらがらんばつてん、(急がないけれども)よかじやなかなん(いゝではないか)お前への、いらんおすばん、(いらぬお世話)こつちや、(こちらは)かんまんたい。(かもはないよ)

此歌の中の多くは、兒童の遊戯のときに、歌をうたふいろ〳〵のものを、つゞり合せて作られたのである。長崎方言を嚴密に調べると、外來語より轉化したものが非常に多い。

唐人歌もいろ〳〵と種類があるが、その一つを、

たいしゆらん、ひや酒のんでみや、長酒のみじやらけ、も一つのんでみや、たんたらふく二日醉、後悔藥に、金たらひ。

大酒亂、冷酒、長酒を飲んで、二日醉の苦しみを言つたもの。

ホーカイ節では、

オンダーイヤー、(私は嫌)ソンゲンシマスナ、(そんなにしてはゐけない)バケト、(馬鹿に)シトツタイ、(してる)ドーユーコンナンナ、(如何此の人は)バカジヤロカイ、(馬鹿だらうか)ホーカイ、

オンドガ、(私は)アヲモチヤ、(晴人は)ホカニアル、(他にある)アンタ、(あなた)スカン、(嫌ひです)。

松の葉には、

昔より今に渡り來る黒船緣が盡くれば鱶の餌となるサンタ、マリヤ

と、切支丹を詠んで居るものも、長崎の古歌として記載されて居る。

日本歌謠類聚には、

長崎

其一

みやいちがよれた〳〵しよじよがなさけ。

其二

ながさきの鳥は、時しらぬ鳥で、眞夜中に歌うて、〳〵、きみをもどす。

其三

くれなゐの、三尺手拭、かたみに見よとて、おいてゆく。

其四

くれなゐは、うすくなるとも、そもじとわれとは、一期ちぎるべい、そよもさしらがに、こえたのさくと、ちぎるべい、そよもさ。

其五

むかしよりいまに、わたりくる黒舟、緣がつくれば、鱶の餌となる。さんたまりや。

其六

おもはぬ君に、おなさけはむやく、うきみやついて、たげくわれらに、おちさせられぬ。

これは足利末期に流行したものであらう。

芳澤春水調の長崎鳥は、長崎の其二からヒントを得たものと思はるゝ、

ながさきどり（一名かりまくら）

こゝろこそ、心まよはす我こゝろ、いまはこの身にあいそもこそも、月夜の鳥となきあかす、明のわかれの鐘なるごとに、つらやにくしと今朝までおもふ、あだなかねごとつく〳〵ひとりのう、花の紋日につい假まくら、長崎きのな、とりは、鷄は時しらぬ鳥で、眞夜中にな、うたうて、まこと時しらぬ鳥はしゆらよ、たもとにこぼれ春雨の、はてしなき身はかぎり知られぬ。

作者、作歌年代不詳のものに、唐人がある。

唐人

入船を、待ち明かしたる長崎へ、どつと碇をおしかりも、かへり三桝や市川の、團十郎と聞きや唐までも、つよい〳〵評判の、重荷小附の御贔屓を、ありがたや、寄合町や丸山を、洒落た顔しておかしやんせ、あんなんこんなんあんたらり、よかもさばつてんおそろんか、日本詞で、洒落やんす酒をやめても浮氣はやめぬ、それが勤のうさ晴らし、世話やかしやんすな、おまへさんのお世話ぢやあるまいし、靴音たか〳〵響かせば、それと見るより唐團扇、褄襠脱ぎ捨て走り寄り、ちと取りにくいむなづくし、とつた方ら涙ぐみ、どんぐわんさん是れマア胴慾な、そも入船の其時に、にほひぜんかうの移香も、ほんに忘られぬ嬉しさを、覺えてかいなと取り付けば、ヤアぬかしたりとらげいせい、もうおけろんかいけろか、座敷上手に小唄節、沖の島山ちくらがいそよ、鮫や鯨が面白い、サ、、、沖の島山あんなんこくよ、珊瑚瑪瑙が流れ寄る、サ、、寐言まぜりの口拍子、早入船のよそほひに、てつこふつかいが先拂、げにや治まる、四海浪、其清國のいさ。をしさ。これは、歌舞伎十八番の關羽を作らせた、二代目團十郎の舞臺詞から轉化したのではないかと思はれる。ところ〳〵に長崎訛があるから、長崎生れである市川團十郎の時に流行したものと言ひ得るのである。

香づくしを歌つた三種も見のがす事は出來ない。

香盡

六十一種の名香は、法隆寺東大寺、逍遙三吉野、紅塵枯木、中川法華經花橘、八橋園城寺、似たり不二の煙は、菖蒲般若鷗鵠斑青梅、楊貴妃飛梅種ケ島、漂澪月龍田紅葉の賀、斜月白梅千鳥や法華、老梅八重垣花の宴、花の雪名月賀蘭子卓橘花散里、圓霞花筐、上は薫り須磨明石、十五夜隣家夕時雨、手まくら有明雲井、くれなゐ初瀬寒梅、二葉早梅霜夜、七夕寢覺篠目、薄紅薄雲上り馬、とかく伽羅の烟と命のきみは、とめても幾代、いくよとめても、とめあかぬ。

香づくし

六十一種の名香は、法隆寺東大寺、逍遙みよし野紅塵枯木、なか川ほけ經、花たちばな八橋園城寺似たり富士のけぶり、菖蒲般若、鷗鵠斑あを梅、楊貴妃とびむめ、たねが島みをづくし、月たつた紅葉の賀、斜月はくばい、ちどりや法華、臘梅やへがき花の宴、はなの雪、名月賀蘭子、卓立ばな花ちる里、圓霞花筐、うはがをり、すまあかし、十五夜隣家ゆふしぐれ、手まくら有明雲井くれなゐ、はつせ寒梅、二葉早梅霜夜たなばた、ねさめしのゝめ、うすぐれなゐ薄雲のぼり馬、とかく伽羅のけぶりと、いのちのきみはとめてもいくよ、とめてもやよやとめあかぬ、……朝妻撿校作調。

伽羅のかをり

伽羅のかをりと此君様は、幾夜とめてもとめあかぬ、とめあかぬ。

和寇が、異國の日本人町で歌つたものをも誌しておかう。

少女別郎

十七八と寢て離るゝは
　たゞ萍の水ばなれよの

青春嘆世

十七八は二度そろか
　枯木に花が候かよの

月夜私情

十五夜の月は宵々曇れ
　曉さえよ殿御もどそよ

夫婦妻接

いとしの殿やおいとしの殿や
　とまれ弓肩よ箭筒は戴かうに

呂宋國漂流記

呂宋は、ロソン、ロクソン、ルマニヤ、ルスン等と呼ばれた島國であつて、阿媽港、臥亞、斯把爾亞、新伊斯把爾亞、意大里亞等と共に、南蠻と呼ばれたのであつた。

華夷通商考には、肥前國長崎より海路、本邦の里數にして八百餘里と記されて居る。產物は、木綿を第一とし、熊、虎、麝香、靈猫、鰐、鵞、鸚鵡であつて、土人の面色黃黑く、氣候酷熱、一年春秋八季、數十の酋長處々に割據すと言はれた。

呂宋人が、初めて我國に來たのは、慶長元丙申年九月八日、土佐國葛木濱に、呂宋船の漂流したのに初まる、豐臣秀吉は、船中の荷物を沒收し、禁裏公家諸大名に分配した、その中に德川家康も利得をした一人である。

家康の時代には、慶長六年の秋、上總國大瀧の津へ黑船が流れて來た、家康は、ふびんに思つて、彼等呂宋人に、淺草川につないで置いた唐船と、食物等を與へたのであつた。その時の呂宋船乘組代表は、世連郎壽安惠須氣羅であつた。その後、呂宋國よりは、度々使節が渡つて、彼我の貿易交通が開けたのである。慶長九甲辰年六月六日には、伊丹宗味を筆頭として、同年十六辛亥年正月十一日平野孫左衞門にいたる迄二十通の渡海御朱印を賜つたのであつた。

寛永の頃には、松倉豐後守重政、長崎を知行して居たが、家人の船誤つて、呂宋國に漂流し、彼國の人情風俗及び國情を知り、我船に積んだる荷物を大に欣び、今後貿易せんことを乞うたので、歸崎してその旨委細重政に言上した、重政は古兵を商人に仕立、呂宋人の悅ぶ品々を多く積み、呂宋國を見極めさす可く渡海させ、慇々、有富なる國とたしかめ、德川綱吉將軍の許しを受け、弓鐵砲三千宛を調度なし、押渡らんと野心勃々たるものがあつたが、彼は死んでしまつたので、沙汰中止となつてしまつた。

航海術の進步せざる船は、强風の爲めに、異國に流れたものが多かつた、異鄕の地に暮して來ても、學問の無い、漁師達には、それが何の國名であつたかを知らずに終つたものも多かつた。

呂宋に漂流した中には、寶曆三癸酉年、伊豆、陸奥、筑前の者乘組廻船もあつた。寶曆五乙亥年には、伊豆國白濱の者三之助が一人、漂流の浮目を見て、歸り着いた事もあつた。翌六丙子年には、筑前の者二人、南部の者一人、豆州の者一人都合四人、やはり漂流民として送り歸され、明和四丁亥年七月八日には、筑前幾島の十五人が、これも漂流民として、送りかへされた。天保十三年にも、長崎に歸り着いたものがあつて、その漂流記を、弘化二年大槻磐溪が筆記したものがあつて、その頃の漂流關係並に、呂宋國情を知るに有益と思はれるので、全文を記載する事とした。

大槻磐溪は、磐水の第二子であつて、磐里の弟にあたる、大槻家は代々學者を出した家柄で、仙臺

の人である。磐溪は年若くして、諸國を遊歴し、長崎に、しばし足を留め、蘭學を學んだのであつた、彼が三十二歳の天保三年には、拔擢されて儒員に列した。彼は西洋砲術の蘊奥を窮め、萬難を排し、嘉永の年開港の建議を主張したのである。彼は又、明治戊辰の亂に獄に下つた事もあり、京師に客たる時には、賴山陽と往來した。彼の父大槻磐水は、環海異聞、解體新書の著者として有名である。

呂宋國漂流記

右天保十二辛丑年九月十三日奥州伊達郡北半田重吉船五百石積拾七反帆觀吉船に公儀御城米四百五

宮城郡石濱　本吉郡氣仙沼

水主　長治郎　五十二歳

水主　喜兵衛　二十九歳

拾石積入石卷舟頭茂助並拙者共兩人外盛岡之重吉八ノ戸之岩松吉松最上之與三藏次郎吉等都合八人乘組御代官島田帶刀殿送狀持乘同十八日亙理郡荒濱出帆宮城郡石濱港之船繫候處十月七日同所出帆己午之方へ晝夜走り候處同十五日朝五ツ半時頃上總國九十九里沖ニテ戊亥之方より俄ニ大風吹起海上荒立空色眞黑ニ相成遂ニ山も見失ひ里數も不覺吹流され夜ニ入風波彌荒く阮ニ船も危く相見え候ニ付追々上荷を撥捨候へども彌增風止不申乘組一同髮を切神佛を祈念し御圖を戴き候へバ帆柱を切れと之御敎ニ付帆柱を切捨候處風一向ニ止不申此上ハ最早助命も難叶と一同覺悟仕罷在申候然ル所十八日ニ至り段々風ハ靜ニ相成り候へども方角も不知大洋へ流れ漂ひ空敷月々を送り候內粮米ハ遣切不申候得ども貯置候呑水ハ波ニふり落される不足ニ相成候に付殘水を八人ニ割合聊ツ、相用ゐ生米をかみ罷在候處同月末と覺え俄ニ天色かき曇大雨頓ニ降來候ニ付偏ニ神佛之御助ト一同難有存じ桶鉢樣取出天水を溜む又々流れ次第ニ處居ハ何方トヤ方角も翁へ不申候へども氣候ハ次第ニ熱く相成單へ物ニテも凌ぎ兼多くハ裸ニ罷成居候翌年天保壬寅十三所吹流候より十ケ月め七月廿日頃と覺ゆ朝四ツ半時頃申酉之方ニ凡十里程之島山一ツ見付一同力を得候へども船具等ハ殘らず相失ひ漕寄可申樣も無く其ま〳〵罷在候同其夜五ツ時頃俄ニ卯辰之風吹起大浪を卷立船中へ塗入候ニ付一同相働き汲捨〳〵精力を盡し候へども中々屆き不申船ハ遂ニ波之中え沈み入一同櫓

ニ集り居候處忽大浪ニテ裂打袈櫓斗浮上り船ハ其まゝ碎け申候尙も櫓ニ取付罷在幾度となく波ニて打落候得バ游時も同段ニ磯近く相成遂ニ右島山にて打揚一同上陸仕候此島之名後ニ承り候得ハ「ボローグワン」と申候由嘗而高山ニも無之不見馴樹木生茂り路も無之處を登り行見渡し候處遙ニ人之形三人相見得候ニ付高聲ニ呼縣候へハ却テ此方に恐れ候や逃去候ニ付彌追掛候所獵師と相見へ銘々槍又ハ鐵砲を持頭ハザン切ニテ筒袖之服を着し居候我等ハ難船ニ逢ひし者ニテ久々水ニ渴し候間水を爲呑呉候樣ニと仕形仕爲見候へハ合點致候樣子ニテ小川之處え案內致候ニ付一同水を澤山ニ給申候夫より三人之者住所え參り候處女房と相見得髮を頭之上え卷付候女一人留守居仕罷在候家ハ丸木之二本柱を立横ニ木を渡し棧櫚之葉樣之物ニテ其上を覆ひ候小屋ニ御座候全體此島ハ人之住居候處ニハ無御座候右三人之者「バーボイ」と申山豚を獵し候ため參り居樣子ニ御座候食物ハ「バラバン」と申形圓く色白き野生之芋をふかし給へ申候常々「ボウヨ」と申夏棗ニ似て赤キ汁出候木ノ實を好み食ひ候ゆへ口之廻り皆赤く染居候拙者共其夜ハ流寄候舟板等を取集め小屋掛致相休み申候此處ニ三四日罷在候內尙獵師之內一人用向有之樣子ニテ何方へか參り二三日過テ村役人體之者七人計同道罷歸此處より一里半程連行テ拙者共を丸木を刳め候小船ニ爲乘櫓を搖キ瀨戸を乘渡凡十里程參り「ライテン」と申家數百四五十軒も有之處え着岸仕村役所樣之家ニ差置申候家造りハ丸木之四本柱を立棕櫚葉樣之物を編立候テ屋根を菅根板を高く張其下を土間ニいたし階子ニテ上下仕候これハ赤蟻を防キ候ための由食事ハ米之飯ニテ魚類野菜等を割烹ニ致給へ申候此處二三日逗留折節領主之巡見有之樣子ニ而村役人等殊之外馳セ廻り船上り場より通筋兩側え竹を立繩を張り右え殘らす木ノ葉を飾り付申候四五日遣る「ホツコン」と申殿樣外兩人何れも二人舁ミ輿ニ打乘り下部十四五人召連村內陣屋樣之所え入無程拙者共を呼ひニ參り候間一同罷越目見仕候處曲余え腰を掛萌葱羅紗之服着用千草色古羅紗ニテ造り候襞之有之帽子を冠り天窓ハ矢張ザン切ニテ外二人ハ其中程を丸く削落し有之候右ハ和尙樣ニテも可有之哉ト奉存候右ホツコン樣拙者共ニ向ひ地を蹈みて我ハ此國之領主也汝等何國之者ニ候哉と申樣子ニ相問ひ候間舟頭甚助事日本ト認メ爲見候へバ頷きテウ、ハツポンと被申懷中より紙を取出鳥之羽ニテ横文字ニ書翰を認候仕形モ致候間拙者共此添翰ヲ以先々え送り可遣と之心ニも可有之ト相察し一同平伏仕候へバ長治郎を間近く招キ右之手を堅く握申候右ハ親みを結候心ニも可有之と奉存候

按ニ此ホツコント云フモノ呂宋國ヨリ此島々ヲ支配セシムル奉行代官ノ類ナルベシト思ヒシニ漂客等左ニアラズ此ホツコンハ殿樣ノコトニテ呂宋國王兄弟ノ由王ヨリ此一島ヲ與ヘテ支封トナセシ由語リキ又按ニ呂宋國ハ西洋伊斯把爾亞ノ屬國ニシテ橫文字通用ノ國ナルニ日本ノ字ヲ讀得シ

ハ不審ナリト云ヒシニ其國都「マフナラ」ヘハ唐人大勢來テ交易ヲナセバ漢文字モ少シハ見慣居リシナラント漂客等語リキ

翌朝直ニ出立拙者共一同川端え參リホンコン様外兩人ハ屋根船ニ其餘ハ小舟十四五艘ニ二人又ハ三人ツヽ乘組飯米並鍋釜等も積入此處出船仕候此川幅四五間廣キ所ハ七八間も可有之兩側ハ高山峩々として巖石切立何百年とも不知大木生茂其谷間之急瀨え竹棹を指し力を入て舟を進め其至テ高く瀧之落る所ニ至れハ人並荷物等殘らず舟より卸し空舟を瀧之上より網にテ引上ケ人々ハ巖石之間木の根蔦之蔓等を引とり其上ニテ又々乘船次第〳〵ニ山之頂上えとり極メ申候　之難處凡五六ケ度も有之扨竹之棹不用　相成候へば其處〳〵自然之竹を幾度となく切取相用申候此川側竹林至テ多く一町程も續き候處數ケ所見懸申候

按ニ此處山名川名等漂客等記シ來ラサルハ遺恨ト云フベシ海國聞見錄ニ北面高山一帶。遠ー視若ニ此谷川を凡十里程登りテ日暮れ其夜ハ山之上え野宿ホツコン様外兩人ハ木綿之天幕を張リ蓆を敷て其上えふせり拙者共ハ河原之上え其ゟ〳〵打臥申候翌早朝又々乘船昨日同様之谷間をとり此間ニモ瀧之落る所數ケ所有之夕七ツ時頃家數四五軒有之所え上陸送り來候人足ハ殘らす空舟え乘組右之谷川を下り罷歸申候此處ニ而木葉を卷たる笛を吹候へば忽人足集り來る荷物をかつき直ニ出立仕候此處より右之高山ハ北之方え分れ拙者共ハ南え向ひ山を下リ三里程參り海邊え出一同乘船一里半計瀨戸を乘渡リ夜五時頃「サンマル」と申家數二百軒も有之所え止宿仕候翌朝又々乘組五里餘リ行テ「カヂバラ」と申所着船仕候此處舟上リ場之正面小高キ處ホツコン様ハ屋敷ニテ白塗之塀にテ圍ひ門之外ニ足輕體之侍一人鐵砲を持番仕罷在候其左之方ニ寺一ケ處有之拙者共ハ其前之役所ニ逗留仕候家數四五百軒も可有之家造り多くハ瓦屋ニテ二階造り致シ玻璃又ハ薄き貝ニテ障子を張階子ハ紫檀黑檀之類を用ひ至テ見事ニ相見へ申候此處鶴犬牛馬羊野牛水牛之類多く米類魚類野菜等も澤山ニテ酒ハ椰子之實より取候燒酒を用ひ候惣シテ此國椰子之木至テ多く「ライテン」「サンニル」邊ニモ夥敷見懸ケ申候高サ二三丈も有之實ハ葉ノ間より幾ツも下リ居申候此實より取候油を諸國に交易仕莫之利益を得候由承り申候

按ニ此カヂバラハ島中ノ一都ノ邑ナレハ西洋地理書ヲ博ク讀得ハ必考フベキコトアラン今闕テ他日ヲ待ツノミ

此處逗留中岩松吉松兩人最初破船大浪ニ被奈候節櫓之出釘ニテ惣身を被引裂追々痛處甚敷相成漸々旅行仕此處到着之上早速醫師も參リ色々療治相加へ候テも其驗も無之遂相果候ニ付此處墓

場え葬り木札を立日本人岩松吉松之墓ト　認メ置申　候此處　凡二ケ月計　逗留　仕　候内呂宋國え渡海之商船出　帆　仕　候ニ付一同乗組八月下旬と覺へ此處　出　帆此船ハ二本柱ニ而阿蘭陀同様之黑船ニ御座候此海上　左　之方ハ八九百里も可有之繼キ　島にテ右之方ハ數も不知大小之島々有之其間を十四五日走リ向島之内「サンタクロス」と申所え立寄り無程大洋え出西之方へ折れ呂宋國之内「カベッテ」と申所ニ而舟改メを受其より　南之方え一里半程行而「マネラ」と申美麗なる城下え着船直ニ送リ來候舟頭同道ニテ城中へ入勘定方役場様之所え「カチハラ」より之添翰差出拙者共漂流之次第相屆逗留中　賄ひ等之金子も請取候様子ニテ直ニ連れ歸リ舟役所様之長屋内ニ揃ひ申候此處呂宋國都城之由港口ニ諸國之商船數十　艘繫リ居川内ニハ五六百艘も入こみ何れモ二本又ハ三本柱之大船ニ御座候川幅三町も有之舟渡シニテ往來自由ニ仕候城下之中程川之左右より石垣を築立其上え堅固なる石橋を架し其下を船ニテ通行仕候川之左方ハ　卽都城ニシテ石之塀ニテ幾重ニも圍ひ其中ニ國主居館並諸役人屋敷等建並び其海岸に向ふ方ハ數十挺之大筒を仕掛有之候塀之厚さ二三間も可有之其上を鐵砲を持候侍晝夜とも見廻りあるき申候川之右方ハ皆町屋ニテ家數大抵十萬餘も可有之市中之振乃家作之美麗なる事言語ニも難盡候川之入口ニハ高く石臺を築き其上ニテ毎夜篝火を焚入船之目當ト仕候此國産物ハ二度米椰子油　鼈甲芭蕉布砂糖氷砂糖藍紫檀黑檀蘇木之類此處より數十艘之大船え積立諸方え差送リ交易仕候野菜之類も澤山ニ有シ唯牛房蒟蒻計見當リ不申候此國之言語拙者共覺へ候分大略左ニ申上候

天アツタン	地ショラン	日アヅラヲ	月ボーラン
雨ブラン	水トウベイ	火カラヨ	夜ニーヤ
朝モアス	熱ニパシヨ	寒ラクニ	父タータイ
母ナーナイ	妻サーワ	子パータ	男ララーケ
女パヽイ	男子ララーケバータ	女子ババイバータ	目ニタ
眉ケイライ	鼻イロン	口ババ	舌レラ
齒グゴ	耳タレーガ	頬バイホン	顋ショラン
頭オーピー	髮ボホー	額アツタン	男陰ボウトウ
女陰ボライ	睾丸イチロク	鷄ニノ	犬アーヤム
猫ビサイ	馬カバヨ	豚バーボイ	牛バーカ
水牛カラバウ	蕃瓜カラバーチヤ	茄子グロン	菜モツタサ

生姜ロウヤ　椰子ロベ　米ブカシ　飯ロウトウ
粟ホニヘ　酒アラキセ　茶セメンテン　油アーナ
酢ソウカ　醤油ケイシヤブ　砂糖カラニイ　肴イシタ
家アバラヤ　衣服バノ　金ハタカ　錢サラベ
股引サルワン　履セネラン　手拭バニヨ　鉢ヘンガン
紙ハペリ　太鼓ゲンバリ　三線ゲタラ　大船ボンテン
小船マルコ

カヂバラ

一ヲシヤ　二ロハ　三トロ　四ヲバ　五レニ　六ヲノム　七ペト　八ワロ
九セヤム　十ナボロ

マネラ

一ヲーノ　二ドウス　三テレイス　四コアツロ　五シンコー　六サイス　七セイテイ
八ヲヲチヨ　九スイキベ　十ケイス

イキリス

一ヲツン　二トウ　三テレー　四フホー　五フロイス　六セキス　七セブン
八エイテ　九ナイン　十テン

唐國

一イヽ　二ニー　三サン　四スウ　五ウイ　六ロー　七チー　八ハー　九カウ　十サプ

按ニ「マネラ」ハ明人ノ譯ニ瑪泥爾訝ニ作ルコレ南海中有名ノ都府ニシテ西洋人ハ多ク此名ヲ以テ其總國ヲ稱スト聞ケリ呂宋國古ヘ自立ノ王アリテ世ニ唐國ヘ朝貢ヲ納メンカ明ノ隆慶年中我ノ未西洋ノ伊斯把爾亞國ニ併セラレショリ今ニ至ルマデ其屬國タルコト增訂宋覽異書等ニ詳ナリ初メ伊斯把爾亞ノ人此國ニ至テ通商シ其國ノ兵弱クシテ奪ヒ取ベキヲ見テ卽チ王ニ黃金ヲ奉テ曰ク願クハ牛皮ノ覆フニ足ルノ地ヲ賜ヘト王コレヲ許ス伊斯把爾亞ノ人卽チ牛皮ヲ細長ク截テ線トナシ多クノ地面ヲ圍ミ繞ラシコレニ城郭ヲ建テ兵備ヲ嚴ニス王コレヲイカントモスルコト能ハ

ズ伊斯把爾亞ノ人遂ニ兵ヲ以テ其都ヲ圍ミ王ヲ殺シテ其地ニ據ルト見ヘタリ

此城下ニ一ケ月計逗留之處唐國澳門に通商之大船出帆仕候ニ付拙者共を差送り可申由ニ而舟役人同道端舟ニテ港え出本船へ一同乘移リ九月下旬ト覺此所出帆戌亥之方え晝夜走リ十四五日經ニテ「ホンコン」ト申島え着船仕候此島之廻リ七里餘も之有シ剝山ニテ高サ十七八町程有之港口ハ北之方へ打開臺灣と相對し大船七八百艘繫り居其中ニイギリス軍船も相見へ申候此島等唐國之屬島ニテ民家偉七八軒も御座候由之處近來イギリス人所領ニ相成新ニ山を切開キ居館を構へ家數阮ニ千軒程も相立當時普請最中ニ御座候追々諸國之商館も新起建立ニ相成候由拙者共乘リ來候マネラ船も右商館を作り候ため材木積越此島え相卸し申候

按ニ此ホンコント云フ島ハ廣東ニ近キ一小島ニシテ南北往來ニ甚タ便ナル地ト見ヘタリ英吉利人唐國ト和議ノ文ニ議ー定香港交ニ歸紅毛界ート見ヘシハ此島ノコトナレバホンコンハ香港ノ唐音ナルコト疑ヒナキナリ

此島ニ二三日滯船十月上旬夕七ツ時頃出帆其夜之內灣門え着船致し上陸之上マネラ商船ニ罷在候此地ハ唐國之大港ニテ拙者共承リ候通商之國ニ候「イキリス」「イスパニヤ」「ホルトガル」阿蘭陀天竺アメリカ等何れもニテ大なる商館を構へ其國々之旗印を立誠ニ堅固美麗城郭之如くニ相見へ申候但シ本國之人ハ皆唐人ニテ文字も眞字を用ひ暦書樣ハ拙者共ニも可也相分初に月之大小を覺へ申候

按ニ灣門ハ卽チ亞媽港ニシテ廣東香山縣ノ南海ニ斗出スル一大港ナリ西洋印度諸國ノ商船來集テ繁盛殷富ナルコト海內ニ顯レタリ初メ明ノ嘉靖年中我天文波爾杜瓦爾ノ人此ニ至リ唐國ノ人ニ請テ其地ヲ得テ始テコレニ城邑ヲ建テ交易ノ大利ヲ營ムト聞クコレラ漂客等ニ質セシニ今尙然リト答ヘタリ

此處ニ永々滯留ニ相成候ニ付拙者共を早く先々え送り遣候樣マネラ人え相歎き候へば此節南京邊イキリス人と戰爭最中ニテ中々通行難成右騷動鎭リ候ハバ差送り可申由仕形ニテ申聞候然ル所マネラ人より唐人を賴甚助喜三藏兩人を小船え便乘再びホンコン州道同所商人宿え差遣申候此島逗留中喜兵衞イキリス人と角力を取候處イキリス人ハ押力至テ强く候へども此方ニテ身を振廻し候へハ忽前え倒れ申候如此三度迄仕候へば押合計ニテ身を轉じ候事無用なりとイキリス人申候扨又此島ニテイキリス人飛脚船と申物一覽仕候船々形橫ニ長く左右え車之輪を仕掛ケ船中大釜二ツニ熱湯を沸し其蒸氣ニテ左右之車を廻し進退自由ニ海上を走り行事目も不及程ニ御座候ホンコンより舟出なし八九百里之所僅三日ニ往來仕候を拙者共面たり見受申候本國ロンドン之都え注進之節ハ一

萬三千里之海上を十四五日ニ往來仕候由承り申候

按ニ此飛脚船ノ蠻名「ストームボート」ト云フ蒸氣船ト譯ス唐國ノ人ハ萬足船ノ名ヲ命ジタリ此船ハ英吉利人近來ノ工夫ニテ新製スル所ト云フ漂客等親シク之ヲ見シハ誠ニ奇遇ニシテ其所說皆實ヲ得タリト謂フベシ

此島ニテ越年致シ翌年天保十四癸卯三月アメリカ人舟山え阿片を差送り候便船ニ乘組同月中旬出帆此海路ハ地方を離れ不申始終唐國之山を左ニ見て走り廿日經ニテ舟山え着長次郎外三人ハ五月初濱門出帆西南風ニテ大洋を晝夜走り十二日經候テ同所着船仕候此舟山も七八年前イキリス人ニ被改取當時和睦相整候へとも唐國よりイキリス人え相納候金子約定通り皆濟致候迄ハ軍船引取不申由ニテ舟山ニ十四五艘其前後之島々ニ一艘或ハ二艘ヅヽ繫り居申候

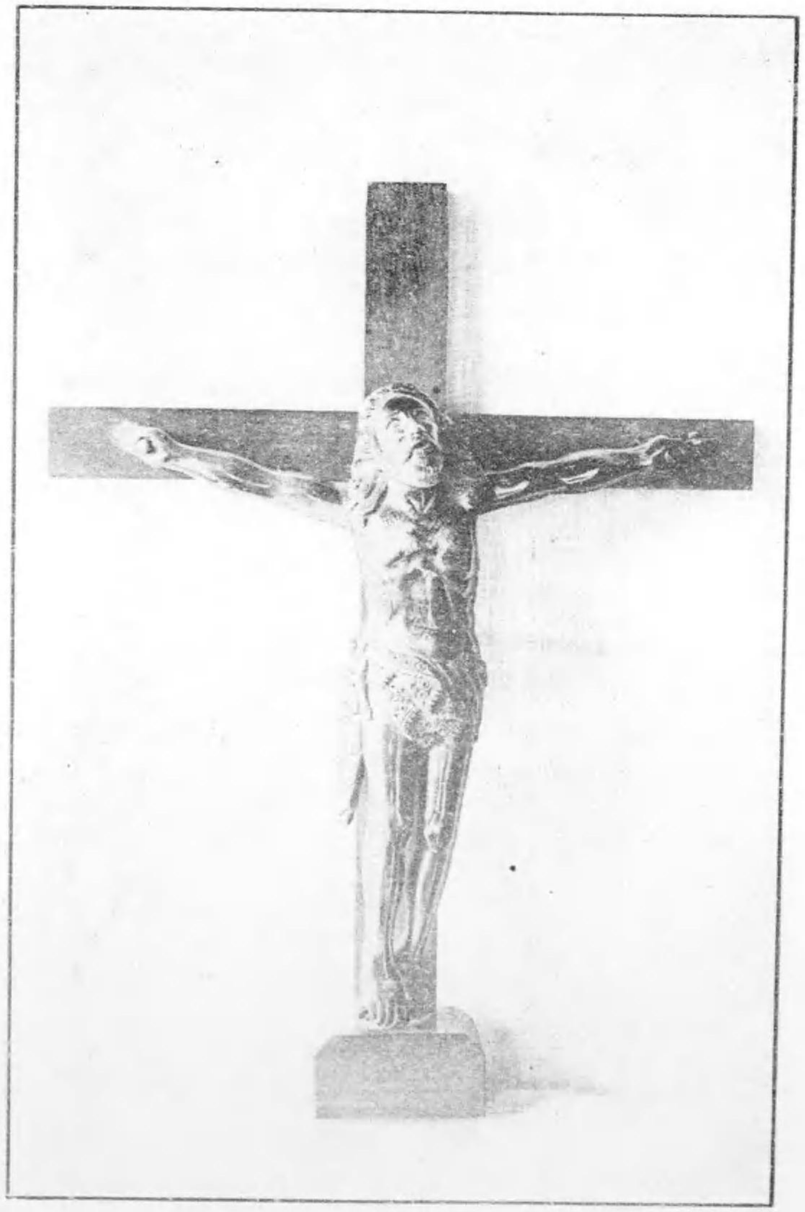
接ニ英吉利人唐國ト戰爭ノ來由ハ天保八年ノ頃唐國帝深ク阿片ノ人命ヲ害スルコトヲ察シ寵臣林則徐ヲシテ廣東へ下ラシメ英吉利人阿片商賣ヲ嚴ニ禁ゼシメ其持渡ル所ノ二百九十一箱ヲ取上ゲ殘ラス蹈碎キテ之ヲ海中ニ打捨タリ此ニ於テ英吉利人大ニ怒リ遂ニ數十艘ノ軍船ヲ差向ケ先ツ舟山ヲ攻取テ根據トナシ其勢ニ乘シテ內地へ攻入ニ三年ノ間ニ江南數千里ノ地ヲ容易ニ掠メ取リ既ニ南京へモ攻上ラントセシカバ唐國帝大ニ畏レ始テ其鋒ノ當ルヘカラザルコトヲ知リ遂ニ和睦ヲ結ビ阿片銷滅ノ償ヒ銀トシテ二千一百萬兩ヲ英吉利へ納レ即時六百萬兩ヲ渡シ餘銀一千五百萬兩ハ五ケ年賦ニ五分ノ利銀ヲ加ヘテ皆濟スベキ約束ヲ定メシ由此度漂客等見聞シ來ル所ハ即其事ナリ香港島ノ永々英吉利領地ニ定リタルモ此時ノ事ナリト聞ケリ

此處ニテ拙者共を唐人へ引渡七日計逗留唐國之小船ニ乘組戊亥之方え六日計走リ乍浦ト申港え六月九日着岸仕候此海上僅四五十里之所潮候惡敷島內え舟繫リ致如此日數相懸リ申候扨着岸之節唐人共大勢參リ日本語ニテおまへどこか樣と辭を被掛候ニ付拙者共漂流以來初而日本語承候事ゆへはや長崎え參り候やト心嬉敷又怪しくも覺へ申候扨上陸仕候へば日本渡海之湊ニテ交易之品々昆布煎鼠椎茸其外更紗染風呂敷茶碗并鉢之類夥敷見受申候唐人も多くハ長崎海之者ニテ長崎口能覺之居申候家數ハ丁度長崎程も可有之繁美之地ニテ芝居遊女屋等も有之湯屋髮結床等日本ニ差テ替る事も無御座候但し此邊もイキリス人兵亂之後ニテ大筒ニ被打崩候家跡海邊處々ニ相見へ申候

按ニ乍浦ハ本海邊ノ一小邑ニシテ人家モ甚稀少ナリシガ日本渡海交易ノ道ヲ開キシヨリ次第ニ戶數モ相增シ遂ニ繁華ノ港トナリ宋竹它カ詩ニ乍浦逼ニ瀛壖。孤城小ニ於蠶ニ居民八九家僅足レ道ニ飢凍。邇來弛ニ海禁。伐レ木運ニ堂棟。因ニ兩估頗多。僻地乃喧闐。增レ竈遂成レ郛葺レ墻巧籬レ空云々

此處ニ凡七ケ月逗留十一月中旬長崎渡海之商船出帆仕候ニ付拙者共六人之内引分れ甚助長次郎喜三衛外二人ハ源寶と申船ニ乗組十二月四日長崎着岸次郎吉及阿波紀州加賀之漂流人三人ハ金泰平と申船え乗組同三日一日早く長崎着岸仕候舟頭甚助事着岸之上病頓死仕候

弘化二年乙巳四月臣大槻清崇謹錄



象牙キリスト像

浦上三番大崩れに信者が竊に所持したもの

（著者所藏）